と云つてよい。その感情の點に於ても優雅と哀愁とがよく融合されて、わが詩壇に於ける劃期的な一大收穫であることを首肯せしめる。常に向上を忘れなかつた藤村は、三十一年の一葉舟・夏草に於て若菜集の情熱に沈靜を加へ、情緒の世界から現實の世界への心的推移を示した。この傾向は落梅集に至つて一層具體的になり、現實の上に自己の新天地を求めんとする努力が强くあらはれて居る。この傾向を進めて行つた時、藤村は詩人としての轉機に逢着し、彼は斷然詩を拔てゝ小說に進んだのである。

情熱的な藤村に對し、雄渾な格調と、冥想的な傾向をもつた詩人土井晚翠の存在は、よき對照をなして居た。

土井晚翠　晚翠の詩は豪宕雄放の趣を持して男性的である。最初の詩集は、明治三十二年に出た天地有情であるが、その中では星落秋風五丈原・萬有と詩人・暮鐘などが殊に勝れて居る。彼は主觀的に人生に對して、現實の悲痛無常を詠歎し、常に高き理想の天地に憧憬を寄せ、進んで冥想思索の哲學的風趣を求めた。しかしその冥想や思索は、主として机上から得來つたものであつたから、抽象的であつて、眞に人心を感動させるだけの力强さが缺けて居た。その後に發表した曉鐘・東海遊子吟も心境の上に何等向上の跡がなかつたので、殆んど顧みられずして終つた。

次に藤村・晚翠の後を受けて　明治詩壇を代表するものは、**薄田泣菫**と**蒲原有明**である。

薄田泣菫　泣菫の詩風は、大體に於て藤村と同じ經路を辿つて進んだ樣に思はれる。彼が詩壇にあらはれたのは　明治二十九年頃であつて、最初は浪曼的な戀愛と詩美の詠歎を主として居たが、まもなく一轉して現實的傾向を見せるやうになつた。明治三十二年の暮笛集は、彼の最初の詩集で、熱烈な情操と清新典雅の格調とは忽ち詩壇にその文名を重からしめた。彼の詩は、未だ藤村の渾成の域に達したものではなかつたが、つとめて新鮮な感情を新詩形によつてうたはんと努めた。それで彼は色々な工夫を凝らし、藤村の七五調によらず八六調其他苦心の結果、變化ある格律を用ゐたから比較的その感情を自由に表現することが出來た。更に明治三十四年に出したゆく春には、なほ暮笛集時代の香があるが、その世をのろふ聲は、現實的になり、時に農民生活を讃美し、田園生活を謳ひ或は時事問題などにも、その詩想を托するに至つた。ゆく春の中の石彫獅子の賦一篇は、藝術の永遠性を示した雄渾極りなき彼の傑作である。次期になると泣菫は、上田敏などの影響をうけ、白羊宮などを出して象徵詩的傾向に變つて行つた。

蒲原有明　泣菫と並び稱せられる蒲原有明は、泣菫よりも思想的に深みのある詩人であつた。明治三十五年に出したその處女詩集草わかばには戀愛を歌つたものが多かつたが、翌三十六年に出して、詩壇に少なからぬ反響を與へた獨絃哀歌になると、更に戀愛の奥に滲透して靈的神秘の境をさぐらんと努め、それから來る惱みや、淋しさをうたふて次期に於ける象徵詩的傾向をも豫想して居る。彼はまたこの詩集に於て泣菫の八六調より一歩を進めた獨自の詩形を創作し、複雜な近代的詩想を自由に表現することが出來たのである。

以上のほかなほ、この期に新體詩人として聲名をはせたものに、河井醉茗・兒玉花外・高安月郊などがあつた。河井醉茗は無弦弓に温雅な思想と流麗な格調を示し、兒玉花外は三十二年に風月萬象を出だし、高安月郊は小說詩歌合集金字塔及び夜濤集に於て特有な聲調を以て勁健な詩想を吐露した。

新體詩の隆盛なるに伴つて大いに新刺戟を受けたのは、從來の和歌と俳句とであつた。しかしてこの期に於ける和歌壇の革新は、落合直文らの運動によつて始まる。

短歌

落合直文の歌道革新　國粹保存主義の勃興によつて國文學の研究が盛んになるや、落合直文は明治二十五年淺香社を組織して歌壇革新の第一聲をあげた。彼は國文學者であつて、泰西文學に比較的緣遠い人であつたから、その歌題詞藻には新味があり、表現にも清新の調はあつたが、感情や物の見方の上に、新味を多く認めることは出來なかつた。從つて彼の歌風はその議論に伴はず、歌壇革新の聲も不徹底を免れなかつたのである。たゞ多くの門下を養成するに極めて自由な態度を以てのぞみ、各々個々の赴くまゝに、その才を伸びさせたので、幾多すぐれた青年歌人が輩出し、彼が遺した歌壇革新の事業は、それ等門下の手によつて成就されるに至つたのである。即ち與謝野鐵幹・服部躬治・金子薫園・尾上柴舟・鹽井雨江などは、何れも萩の舍門下の歌人である。

淺香社中の青年歌人の中で、直文の歌風を受け繼ぎ、しかも自己の個性と趣味とを大膽に表現したのは與謝野鐵幹である。

鐵幹のものこの歌　與謝野鐵幹は、常に和歌革新の先頭に立つて、健鬪最もつとめたものである。明治二十九年に長短各種の詩歌を集めた、東西南北を、翌三十年に天地玄黃を出した。彼の歌は自らをのこの歌と云つた如く、覇氣滿々として極めて雄健であつたが、强ひて粗豪の語を連ね、感情が蕪雜であつて眞情の流露に乏しい。しかしその勇壯な表現と比較的整つた格調とは、反つて青年者流に喜ばれ、沈滯した歌壇に刺戟を與へて、歌壇革新の風潮を促進するに效が多かつた。この歌風は、明治三十三年明星を發行する頃から漸く變化し、粗豪の風を脫して纖細な感情をも表現するに至り、妻晶子と共に活躍するに至つては、戀愛を中心として浪曼的傾向を鼓吹し、多くの門下を養成して明星派の全盛時代を作つた。

與謝野晶子　歌人としての晶子は、その夫鐵幹にまさる豐かな天分の持主である。歌集亂れ髪が出た時、世人は目を見張つて、この新進女流歌人の出現を迎へた。彼の女は、この歌集に於て奔放な情熱と鋭き感受性とをもつて、極めて自自由且つ大膽にその戀愛を歌ひ出で、在來の歌人が歌つた戀愛のいづれよりも熱烈で、肉感的感覺的な近代的色彩を有つて居た。かくして亂れ髪は、歌壇に一新時期を劃し、和歌革新の事業はこれによつて正しき道程につくことを得た。この後彼女は、小扇を出して詩的進境を示し、ついで舞姫・春泥集などを出し、從來の主觀的傾向を離れて、客觀的事象を多く歌ふやうになつたが、本質的に見れば、矢張り亂れ髪と同一傾向を辿つて進んでいつ

たのである。

明星派の歌は情熱的であるが、落合直文の門から出た金子薫園・尾上柴舟は清楚な歌風をもつて一家をなした。

尾上柴舟　柴舟は理智の人で思想的には深みを持つて居たが、どちらかといふと冷たい感じがあちはれて居た　銀鈴・靜夜などの歌集がある。

金子薫園　薫園は、本質的に温雅な趣味の人であつたから、自然を愛好し主として叙景の方面に新天地を開拓した。片われ月・小詩國・凌宵花・伶人などの歌集がある。

更に落合直文と系統を異にし、明星派ともその歌風を異にしながら、同時に新進歌人として歌壇の視聽をあつめたものに佐々木信綱がある。

佐々木信綱の竹柏園派　佐々木信綱は、明治二十一年大學古典科を出てから竹柏園派をたてて門下に教へ二十九年めざまし草を出すや流麗暢達の調を以て世に稱せられた。彼は寧ろ歌學者として優れた人で、歌人としての天分はさまで惠まれたものではなかつた。從つて個性の色彩に乏しく、和歌革新に對する態度も概して温和で、その用語などの點に於ては、むしろ保守的傾向をもつて居たが靜かに自然を觀じて清新な情趣をたゝへた多くの歌を詠んだことは、なほ彼が新進歌人と稱せられる所以であらう。思ひ草・新月なども、この期にあらはれた彼の歌集である。

以上諸家の歌は、その題材の人事自然たるを問はず、浪曼的傾向が作品の基調をなして居るが、これ等と全く反對の立場をとつた根岸派の存在は、たしかに好固の對照をなすものであつた。根岸派の中心は云ふまでもなく正岡子規である。

根岸派の人々と正岡子規　子規は、俳句革新の餘勢をもつて更に和歌の革新に志し、三十一年日本に「歌人に與ふる書」の一文を掲げて萬葉集を中心とすべきを說き、鐵幹等の浪曼的傾向に反對した。そして俳句革新に唱へた純客觀的表現をもつて、和歌の上に寫生を唱道し、自ら竹の里人の名を以て一種の新調を詠み出した。その特色は俳趣味を和歌の形式によつて表現し、しかも調に於て萬葉調をとり、勁健にして、たるみなきにある。子規が日本紙上に、その歌論を發表するや、門下に香取秀眞・伊藤左千夫・長塚節等が集まり、三十二年に根岸短歌會を起し短歌革新を試みたのであるが、明治三十五年に子規が歿したため、遂に俳句に於けるが如き完成を見ることは出來なかつた。しかし次の第三期に於て歌壇の中心勢力となつたものは、根岸派の系統から出て居るのである。

俳句　和歌革新の新運動が行はれたと共に、俳句革新の運動も實に目ざましいものがあつた。前期に於ける月並俳句の弊を打破して、世界最小の詩形であるわが俳句に、文學的生命を與ふべく敢然として革新の叫びを擧げたのは、正岡子規である。

子規の新俳句　子規は明治二十五年に獺祭書屋俳話を出だし、翌年芭蕉雜談、二十九年に俳人蕪村を書いた。芭蕉雜談は、新文學觀の上に立つて俳諧を論じた俳論の嚆矢であり、俳人蕪村は、彼れ獨自の美學的見地から、蕪村の俳句を批評し分解した明快な新俳論であつた。彼は、はじめ猿蓑

を中心とする蕉風の一派を喜んだが、後漸く元祿の俳風をはなれて天明の俳調を追ひ、蕪村に私淑するに至つた。蕪村は從來畫家としての名のみ高く、芭蕉の如く俳壇に於ける價値は殆んど知られなかつたが、子規によつてその眞價を認められるに至つたのである。

子規の俳句の上に於ける主張は、純客觀の寫生句を作れと云ふことである。即ち小主觀をすてて各自の眼に映つた人事自然を、率直に僞らず、藝術的に寫生すべきを要諦としたのである。彼はこの主張を口で論ずるだけでなく、自說を裏書する新鮮な俳句を續々作つて自ら範を示した。この點彼が斯道革新家として偉大な成功と功績を殘した所以である。彼は、はじめに可成極端な破格を示したが、漸次その俳境は一方面に偏するやうなことはなくなり、趣味の向上と技巧の進歩とは、遂に明治の蕪村とも云ふべき境致に達したのであるが、三十年代に至つては、更に蕪村より一歩を進めた域にあつたことを思はせるものがあつた。子規は明治三十五年に歿したが、天若し彼に壽をかせば、おそらくは蕪村より進んで、芭蕉の堂奧にまで達すべきであつたらう。

日本派の人々　子規は、統率の才があり、且つ門下を導くに巧みであつたから、高濱虛子・河東碧梧桐・內藤鳴雪・夏目漱石・石井露月・佐藤紅綠などがその門に集つた。これ等の人々は、何れも日本派の重鎭として活躍したから、子規歿後といへども、日本派の勢力は益々增大して行つたのである。

高濱虛子　虛子は、主觀的傾向をもつて理想を詠み、複雜な對象を詠じて、その印象は碧梧桐の鮮明さはなかつたが、その句には餘韻餘情があつた。

河東碧梧桐　碧梧桐は客觀的傾向を有して寫實に傾き、常に印象の明瞭ならんことを期したから、その描寫の範圍は自ら限定されて小なるを免れなかつた。次の第三期に於て彼は新傾向句を唱へた。虛子と碧梧桐とは各その特色を發揮して俳壇の舊套打破に預つて力あつたが、その詩形に於て極めて大膽な破格を試み、時には極端に走つて强ひて異調を衒うものであるとの非難をも受くるに至つた。

內藤鳴雪　鳴雪は、前二者と異なり穩健な態度をもつて古今の俳句を研究し、形式に於ても異調をしりぞけ五七五の正調を守つた。やゝ保守的ではあつたが、雅語を用ゐて、その句風は幽寂淸雅を特色とした。

日本派以外の人々　日本派の活動によつて、殆んど文學的生命を失つて居たわが俳諧は、燿然として復活の光を見せたので、俳運大いに起り、日本派以外にも新しく多くの流派がならび起つた。

今その重なるものを擧げると、先づ尾崎紅葉は硯友社同人を率ゐて紫吟社を結び談林を模範として、その俳風は一時流行したが、まもなく紅葉自身その談林の奇調をはなれるに及んで世俗によろこばれなくなつた。このほか角田竹冷を中心とする秋聲會は、新舊兩派の調和を標榜して、俳諧秋の聲を發行して機關紙となし、佐々醒雪などは筑波會を立て、帝國文學にその俳句を發表したのである。

かく各その俳風を鼓吹したが、日本派以外の統派は、その態度が餘技的で熱に乏しかつたから、まもなく不振に終つた。

四、戲　曲

第一期の戲曲は、默阿彌の歌舞伎劇が主となつて居たが、坪內逍遙の該撒奇談が出た頃から、世人は漸く目を劇界の革新に向け、演劇の改良を唱ふるものか多くなり、明治二十年前後には演劇改良會などが設けられて劇壇の革新が企てられたが、その實效はあがらず未だ新しい展開を示すに至らなかつた。たゞこの時代に於て注意すべきものは、史劇の勃興したことである。

史劇の勃興　在來の世話物は云ふまでもなく、時代物とても時代を過去にとつただけで矢張り夢幻的なものであつた。ところが當時の觀客は、かくの如き荒唐無稽とも云ふべき夢幻劇に興味を失ひ、寫實的なものを欲するやうになつたから、この觀客の嗜好に投ずべく、默阿彌も自らの得意とする夢幻的な世話物を棄てて、寫實的傾向を加へた所謂活歷物を書くやうになつた。この試みは果して觀客に喜ばれ明治二十一二年の頃は盛んに行れたのである。この機運に促されて、先づ筆を史劇に振つたものは依田學海である。

依田學海　學海はかねて劇革新の志をもつて立つたものであるが、こゝに於て在來の夢幻劇から離れ、寫實を基礎として、明治二十二年に川尻寶岑とともに吉野拾遺名歌譽・文學上人勸進帳とを合作した。が彼はその後、極端なる史實主義に傾き實演の方面を顧慮しなかつたから遂に藝壇に容れられなくなつた。

この時、政論の筆を止めて劇界に身を投じ、史劇の創作につとめたものは福地櫻痴である。

福地櫻痴　福地櫻痴は、その社會的閱歷を以て先つ劇界の信用を得　進んで歌舞伎座の立作者として文壇と劇壇との接觸を計り、一面劇の地位を高めた功勞は明治演劇史上偉なりとしなければならない。その作は主として九代目團十郎のためにかゝれたものである。春日局・關原譽凱歌・大久保彥左衞門などは初期の作として最も好評を得たものであるが、その傑作は俠客春雨傘である。彼の作は外面的事件の描寫が主となつて、內面的解釋に乏しい弱點があつたが、概して穩健で上品なところがあつた。

以上の人々と別な立場にあつて、劇文學の革新に努力したのは坪內逍遙と森鷗外である。

逍遙の史劇　坪內逍遙は、イギリスの劇壇や戲曲などによつて得たところを、わが劇壇の上に活用し、根本的革新の第一歩を脚本の上に置かねばならぬことを主張した。そして彼は明治二十六年早稻田文學に「我國の史劇」と題する一文を發表したが、これは逍遙の積極的な劇革新の第一宣言とも云ふべきものであつた。その論文に於て彼は先づ我國古來の史劇作者の作　を批評し、かねて自家の史劇觀をのべ、ヨーロッパ風の性格劇の必要を說いたのである。かくて逍遙は、その所論を具體化するために明治二十七年春の屋主人の名を以て、桐一葉を早稻田文學に連載した。この作は

豐臣家遺托の重任を負へる片桐且元を中心人物とし、豐臣氏の滅亡してゆく間に起る歴史的事實の上に、人生の普遍相を見出ださんとした戯曲である。大體に於て素材を正史にとつたのであるが、なほ事件の進行を助けるためや、人物の性格を描出すべく、多くの劇的醇化を加へてあつて、複雜な淀君の性格を鮮やかに表現するとともに、且元の特殊な性格を描かんとしたのであつた。しかしこの作では、主人公且元が大阪城を去るまでの事件を取扱つただけで、事件も完結せず、從つて且元の性格描寫も明瞭を缺いて居た。そこで明治三十年にその續篇とも云ふべき杏手鳥孤城落月を書いて未完成の事件の局を結び、なほ且元の性格をも明かにしたのであつた。三十九年になると更に陰慘な鎌倉時代に材をとつて牧の方を書いた。この作は、鎌倉執權北條時政の後妻牧の方を主人公とした悲劇で、牧の方が己の生んだ政範の愛に溺れ、之を將軍職につかしめようとして、稻毛入道重成父子とともに將軍實朝を弑する大陰謀を企てたが、更に偉大なる陰謀家義時に觀破され、遂に義時の前で自盡するといふ筋である。この戯曲は、はじめから三部作の一として書かれたもので、後に至つて星月夜・義時の最後の二曲を書き、是等によつて鎌倉時代を背景とし、大野心家義時を主人公とする大戯曲が完成されたのであつた。

かくの如くこの期に於て歌舞伎から出た史劇が勃興して劇界を賑はしたと同時に、一方に於て新時代の皮相寫實を主とした所謂新派劇の出現したことも劇の展開上忘れることは出來ない。この新派劇は、明治二十四年頃始めて政治的世話物とも云ふべき、雪中梅や花間鶯などを演じた川上音次郎一派の粗放な劇を指すのである。新派劇は日清戰爭前後になると壯士劇と呼ばれ、戰地見聞記などの戰爭劇を演出するや世俗の喝采を博し、一時歌舞伎劇を壓倒するの勢を示し、劇評家は之を新演劇と呼び、この影響をうけて各地に多數の新派劇團が起つた。しかし是等の脚本の筋は、支離滅裂であり、その寫實の皮相的なことは學海・櫻痴の作よりも甚しく劇としては殆んど無價値のものであつたから、劇壇には再び夢幻的な歌舞伎劇がもてはやされるに至つた。ところが三十年代になつて川上・伊井・高田などによつて己が罪・金色夜叉・不如歸などの小說が舞臺で演出されるに及んで、やゝ劇としての價値を認められるに至り、後更に名優團・菊等が相次いで殁し、歌舞伎劇が不振の狀勢に乘じて目ざましき發展を見せ、軈て鞏固な地歩を、演劇界に占むるに至つたのである。

次には坪內逍遙とともに、わが劇文學革新のために盡した森鷗外の飜譯劇について述べなければならぬ。

鷗外の飜譯劇　森鷗外は、ドイツの劇文學によつて得たところを以て、日本の劇文壇を革新しようとして、明治二十二年頃柵草紙によつて、その意見を發表した。即ち劇界革新の第一歩は脚本の改良にありとし、俳優の意を迎へたり、觀客に媚びる在來の作者の態度を非難した。この立場から同じ年に、調高矣洋絃一曲・折薔薇の飜譯劇を發表したが、時勢は未だこれらの飜譯劇を上演するほどまで進んで居なかつた。しかしながらこれ等の新しい試みは、次第に劇壇を刺戟して、新機運を醸成するの原動力となつたのである。鷗外は後更に戯曲としての處女作、玉篋兩浦島を書き、

明治三十七年には日蓮上人辻說法を書いた。

鷗外以外の飜譯劇　なほこの期に於て、鷗外の飜譯劇以外には明治二十九年の初に逍遙のハムレットが早稻田文學に揭げられて、やゝ世人の目を惹き、三十二年に戸澤姑射のオセロが太陽な發表され、ついで三十四年には、高安月郊の手によつてイブセンの社會劇が流麗な筆をもつて譯出された。

かくして、わが劇壇をながく舊套に安んずることを許されず、革新の機運は促進され、遂に明治三十七年逍遙によつて樂劇が作られるに及んで、劇革新の光明を確實に認めることが出來たのであるが、これは次の期に於て述べることにする。

第三章　自然主義の時代

明治三十六七年頃——明治末年

一、思潮概觀

自然主義の興起　第二期の終りになつて浪曼主義が漸く頽廢的に赴き、空想的な憧憬や理想が得られざる夢であつたと氣付いた時に、人々の心には浪曼主義に對する不滿の色が濃くあらはれ、自ら思想的に一つの動搖があらはれて來た。自然主義的思潮はかくして起つて來たのである。自然主義的思想の根據は、ヨーロツパの唯物的な實證主義的精神や、科學的精神にある。十九世紀末から二十世紀へかけてのヨーロツパは浪曼主義の夢が破れて進化論が思想界を風靡して居た。即ち英國ではベンザム・ジョンスチユウアトミルの功利派の哲學が生れ、佛蘭西ではコントの實證哲學、獨逸では唯物的人生觀を持したヘツケルらを生んだ。從つてヨーロツパの文藝は、これ等の哲學思想に影響されて先づフランスにフロオベル・ゾラ・ゴンクウル・バルザツク・モウパツサンが現はれ、ロシアにはゴオゴリを始めドストエフスキイ・ツルゲエネフ・トルストイらがあらはれたので、ヨーロツパ全般に亘つて自然主義文藝が勢力を得るに至つた。この思潮が浪曼主義にあきたらず何等かの展開を試みようとして居たわが文壇に、多大の影響と刺戟とを與へて、自然主義的傾向は遂に第三期

に於ける文壇の主潮となつたのである。

わが文壇と自然主義　わが文壇に自然主義的傾向を最もはじめに見せたのは明治三十三年に出た小杉天外の初姿であるが、自然主義の叫びが評論壇に認められるやうになつたのは日露戰爭後からであつた。評論の上に於て堂々自然主義を主張したのは、島村抱月・長谷川天溪などで、それも一時は世間の誤解を受けて一部の人々から猛烈な反對をうけ、後藤宙外一派は正面より之に反對したが、結局抱月・天溪などの奮闘によつて文壇を風靡するに至り、明治末年までは動かすべからざる主潮として文壇の中心勢力となつた。しかしてこゝに至るには當時現實的なプラグマチズムの哲學と、ロシヤ、ドイツ、フランス、スカンデイナビヤ、イタリイ等の大陸文學とが輸入されて、間接に自然主義文學の發展を助長したことを忘れることは出來ない。

次にかく文壇の主要勢力となつた自然主義文學の特質について略述する。

自然主義文學の特質　自然主義文學の特質は、先づ第一に個性尊重といふことである。近代思想は我の自覺に第一歩をおいて居るが、自然主義的文學もこの基礎の上に立つて居るのである。第二にそれは人生化された文學であると云ふ意識をもつて居ることである。在來の小說戲曲のやうな皮相的意味での藝術のための藝術でない。したがつて極樂を描き夢の國を描く遊戲的のものではく、活社會の息づまる樣な實生活を對象とする。その作品の背後には常に作家の生活が滲みでて居ることを求め、そこに文學を人生化しようとする彼等の意志が認められる。第三に自然主義文學の特色は、それが實證的の文學的であるといふことである。われわれの內面的な內部生活でも彼等は唯物的に解釋し、唯物的に眞相をとらへて滿足した。第四はそれが歸納的な文學であるといふことである。これは物の見方に於て經驗第一に立つ自然主義的文學としては當然なことである。彼等は描かんとする對象を分析的に檢覈し、それから得た事象を克明に描いたのである。

以上のやうな特質を有する自然主義の主張は、われ等に人生の眞の姿を感じさせてくれた。わが國の文學は、自然主義的思潮の洗練をうけてはじめて近代文學としての資質を與へられたのであつた。

自然主義の長所とその弱點　自然主義の主張が科學的精神を中心とし、人生の眞實を摑まんとする現實觀照の態度は、たしかに正しい理論の上に立つものに相違ない。が事實彼等の現實に對する觀照は、それが人生の觀照として全きものであつたらうか。現實には醜惡もあり、更に利己と爭闘の世界もあり、肉慾腐爛の境もある。しかしこれは少くも人生の全部ではない。醜惡の中に善美あり、利己と爭闘のかげに愛と平和とがひそんで居る。自然主義の人生觀照は、この意味に於てたしかに一方に偏したものであつた。されば自然主義に徹した時、かれ等の到達すべきところは懷疑であり自己人格の破綻であらねばならぬ。果してこの期の終り頃から、自然主義は漸く行詰つて世人の胸底には、現實の上に立つた新思想の光明を求めんとする機運が見え初めて來たのである。さはれ浪曼的なわが文學を眞の上に立たしめ、空想的な美のあこがれから目醒まして人生の眞の美を摑

む因子を示唆してくれた點に於て自然主義的思想は新興文學の大恩人と云はなければならない。これを文學史の上から眺めても、それがもたらした文學的寄與は殆ど空前のものであつたと云つてよい。

二、小　說

この期に於ける自然主義の思想は、すべてのわが文學に、近代文學としての資質を得しめてくれたが、殊に小說に於て最も明かにしか云ふことが出來る。自然主義の作家と目されるものは、その數が極めて多く、一々之を品隲することは容易なことではないが、今その重なるものをあげると、國木田獨步・島崎藤村・田山花袋・德田秋聲・正宗白鳥などである。就中自然主義小說を書いて先驅者の名を得たものは國木田獨步であつて、ついでは島崎藤村・田山花袋の名が何人の頭にも浮んで來る。

國木田獨步　獨步は天成の詩人であつた。彼は宇宙の悠久と人生の果敢なさを思ひ、脆くも生死する人々の悲痛や寂寞な運命を見て　これから脫れようとしキリスト敎を信じたり、また戀愛や自然美に陶醉して紛らさんとしたが、人生に對する悲痛哀愁は、依然として彼の心底から消え失せなかつた。彼が自ら神秘的な運命主義的な思想な抱くやうになつたのも、かくの如き心的憂悶を辿つた當然の歸着點であつた。從つて深酷彼の如きは、硯友社一派が文壇を支配して居た時代に不遇であつたのは蓋しやむを得ない。ところが自然主義的思想が一度文壇に流れ入るや、硯友社の影もうすくなり、彼の藝術は遂に世に認められることになつた。卽ち明治三十八年に出した獨步集や、三十九年の短篇集運命によつて彼は確乎たる文壇的地步を占むるに至つたのである。明治四十年に出た彼の音、翌四十一年の竹の木戸は共に嘖々たる割には、彼として優れた作品ではない。彼の傑作はなんと云つても牛肉と馬鈴薯・惡魔・運命論者・巡査・女難・酒中日記などである。いづれの作品に於ても皆宇宙の神秘を探求せんとする嚴肅な態度と、運命の前には抗することが出來ないと云ふ悲痛な彼の人生觀を看取することが出來る。彼の人生觀は、かく光明もなく全く暗い寂しいものであつた。その表現は簡潔で力强く華やかな修辭的色彩は見られなかつたが、適確に素材を描いて讀者に深い印象を刻みこむ獨特な筆力を有して居た。また時にユウモアの閃きを見せて、單調に流れるのを防ぐ用意をさへ有して居たのである。このやうな特色をもつ、彼の作には勢ひ短篇が多く、またそれが彼の得意とする所でもあつた。

獨步は短篇を得意としたが、島崎藤村・田山花袋等は長篇の中に人生の眞の姿を描かんとした。

島崎藤村　藤村は天才的詩人で獨步と同じく尖銳な感情の持主であつた。前期には抒情詩人として詩壇に重きをなして居たが後詩より小說界に轉じた。明治三十九年長篇破戒を出して世に問ふや一躍自然主義文學の代表　作品として嘆賞された。破戒は信州小諸地方の鄕士色を背景に、悲痛な人間の階級的爭鬪を描き、人道的に解決しなければならない重要な社會問題を提供したのであつ

て、彼が、生活苦と戰ひつゝ前後三年の時日を費して完成した藝術的精進の結晶であつた。藤村はこの作に於て終始冷かな客觀描寫の態度を持し、地方色の鮮明な印象を表現する事に努めて目覺ましい成功をおさめたが、なほ性格描寫の上に疎略なところがあつたり、往々目觸りな作爲のあとがなしとしない。しかしこれらの微瑾は勿論破戒が明治文學史に一新時期を劃した大作であることを妨げるものではない。彼はこの後、春・家の二大長篇を公にして、泰西文學に對する研鑽と、その藝術的精進の程を世人に示したのである。藤村の作品は概して因襲、權威、理想と現實との爭鬪を取扱ひ、努めて人生を直寫してその眞を掴むといふ自然主義的態度に立脚して居るのであるが、天性詩人的素質を持つて居た彼の作品には、なほ抒情的な香がほのめいて居た。

田山花袋　花袋はさきに浪曼的な作風を鏃却して以來、重右衞門の最後・女教師などを出して自然主義的傾向を示したが、一般文壇は未だその作品を重視しなかつた。しかるに明治四十年蒲團を公にするに及んで、一躍自然派作家の中心となつた。蒲團は決して彼の名作とは云ひ難いかも知れないが、描寫の態度及び材料の取扱ひ方が在來の作品とは全然異なつて自然主義の一要點に觸れて居た。これ幾多の缺陷を有するに拘らず、彼を有名ならしめた所以である。彼はこの後、隣室・少女病・一兵卒などを出して、ます〳〵その文壇的地位を高め、遂に彼が主張する平面描寫を試みた三部作、生・妻・緣を發表した。花袋の作にはこの他、蒲團・田舍教師・渦などの作品が多く、何れにも重くるしい世紀末的な人生が見られる。

自然主義文學が、かく盛んになつた機運に乘じ硯友社時代から自然主義的な素質をもつて居た德田秋聲も、また今までの失意の境から救はれた。

德田秋聲　秋聲は、明治四十四年に黴を公にするに及んで俄然その地位を高めることが出來た。彼の表現は藤村の華やかさもなく、獨歩の簡勁もないが、その作品には北國人特有な陰鬱さがあり、しかも咏歎におちいることなく、飽迄も現實的態度で人生を描寫し、そこに倦怠した人生の縮圖を示した。黴のつぎに書いた爛もありふれた人間生活を描いたものであるが、矢張りどこかに人をしC物を思はしめずに置かないところがある。

正宗白鳥　白鳥は明治三十七年頃始めて文壇に知られた新進作家であつて、當時の自然主義作家中もつとも特色のあるものであつた。彼の思想は否定的であり、逃避的があり、また虛無的であつた。彼は宗教を信ぜず、哲學を信ぜず、世の一切を信ずることなく、自己すらも信じない。何等の理想も捨たず、何物にも感激を持ち得なかつた。この點　は徹底した世紀末的思想の所有者であり、天成の自然主義的作家とも云ふべく、多くの自然主義作家の中で特に異色ありとせらるゝ所以である。何處へ・二家族・泥人形・毒などは彼の代表作である。これ等の作品を通じて彼の描寫の態度を見ると、あくまでも覺醒的で描かんとする對象の生命を、そのまゝに直寫して、よくその印象を再現せしめる卓越した手腕をもつて居ることがわかる。

以上のほか自然主義的作家として是非あげなければならないのは、小栗風葉・二葉亭四迷・眞山青

果・岩野泡鳴などである。

小栗風葉の青春　風葉は常に時代思潮の推移に注意し、時流に遲れざらんと努めた作家で、明治三十八年青春を出して、まづ自然主義的傾向を示した。彼はこの作に於て主義の念が强く、時に冷酷な行動をとる青年を主人公として、その新性格を描き、更に時代思潮の內面に突入してその缺陷を暴露せんと試みたが、單に新思潮を知るばかりで、之に對し眞實の同感をもち得なかつた作者は、唯主人公の弱點をあげることにのみ努めて、青年主人公が悲痛な犧牲者となりゆく眞相を描き出すことは出來なかつた。ことに作者の艶麗な筆致は、かくの如き時代の新性格を描くに不適當であつたことは、結局彼のこの作をして失敗に終らしめたのである。その後風葉は、天才・極光・戀ざめなどの自然主義的作品を出したが、著しい特色を示すには至らなかつた。

二葉亭の平凡　浮雲以後飜譯に沒頭して久しく小說に筆を執らなかつた二葉亭四迷は、明治四十年に其の面影を東京朝日新聞に發表し、ついで平凡を揭げて、老練の手腕を示した。平凡は、青年時代の作者自身の生活を主觀的に描いたものであるが、內容よりも、絕妙な技巧に於て無限の魅力があつた。彼は常に一段の高所から冷かに人生を瞰下し、やゝもすれば人生に對する嚴肅な觀照と、溫味とを缺いて冷嘲に陷らんとする嫌があつた。

眞山青果　はその天分に於て風葉よりも勝れて居た。代表作南小泉村に僻村の生活を描いて一躍小說界に認められ次いで瘋癲・不生女の一生などの佳作を出して、彼れたる生活の哀愁を描出して自然流の特色を發揮したが、間もなく彼は小說界から劇界に轉じたのである。

岩野泡鳴の耽溺　泡鳴は、さきに發展・放浪の二篇によつてやゝその存在を認められたが、更に耽溺を出すに及んで確乎たる文壇的地位を占めることが出來た。耽溺は彼の刹那主義を具體化したもので、無技巧な中に人の心を想きつける一種の眞實味がひそんで居た。

自然主義作家の主要なものは、大體以上に述べたのであるが、なほほかに小山內薰・上司小劍・中村星湖・水野葉舟・近松秋江・窪田空穗なども自然主義的色調の上に、夫々個性を發揮したのである。

この期は、上述の如く自然主義文學の全盛時代であつたが、なほそれらと傾向を異にし、別な道を歩んで、しかも隱然たる勢力を文壇にもつて居た作家があつた。即ち夏目漱石を中心とする餘裕派、谷崎潤一郎を中心とする唯美派がそれである。

餘裕派の夏目漱石　漱石は、今までホトトギス派の俳人として若しくは英文學者として知られて居たのであるが、明治三十八年の初め、倫敦塔を公にし、更に我輩は猫であるを出すに及んで、その俳味ある清新な作風は忽ち世人の推稱を受けた。吾輩は猫であるは、彼の特色を最もよくあらはした作品で、猫の觀察に托して中學敎師苦沙彌先生の家庭を中心とし、その周圍をめぐる種々の人物、及びそれ等の人々が演ずる雜多な事件を任意に配列して何等の統一を加へてない。餘裕綽々たる態度をもつて日常の事件に鋭利な觀察を下し、警句機智が隨所に閃いて洒脫諧謔の趣を極めて居

る。しかもその洒脫諧謔は氣品高尙で、在米わが文壇に見る戲作的な滑稽諷刺とは全く類を異にしたものであつた。この他漱石の作品には、坊ちやん・草枕・虞美人草・二百十日・行人・坑夫・三四郎・門・それから・こゝろ・彼岸過ぎまで・明暗などがある。

彼は英文學に對する造詣が深かつた上に、支那文學國文學にも通じて居たので、豐富に文字を驅使して特色ある句法を自由自在に試みたのであつた。この點自然主義が無技巧を主張したのと異なり、大に技巧を重んじたのである。また彼の思想は、大乘的な禪の思想を根本とし、それが英國趣味、俳諧趣味乃至江戸趣味と渾一融合して生じた東洋的色調の濃い彼獨特のものであつた。だから自然主義全盛の時にあつても、高踏的な態度を以て據然として文壇一方の巨匠と目されだ。更に晩年になると則天去私の境地を力唱し、大乘佛敎的思想をほのめかして居る。この則天去私の境地は、武者小路實篤等を共鳴せしめ、次期に於ける新理想主義文學の誕生を豫想せしむるものがあつた。

漱石の作品について云ふ時、その重要な色調をなすものは何んと云ふても俳諧趣味である。自然派は客觀描寫を重んじて、その作品は暗く陰鬱であつて所謂息の詰るやうな人間の心の苦鬪が描かれて居るが、餘裕派の作品は現實に對して傍觀的の地位に立つて觀察し描寫するから、常に死ぬか生きるかといふ樣な大問題を主とする自然派のやうな重苦しさがない。勿論彼の作風にも相當の變化は見られるので、初期の草枕・虞美人草などは表現も華やかであり、倫敦塔・幻影の盾などは浪曼的な詩味が漂つて居るが、門以後になると自然主義的傾向が加はり寫實的心理的に展開されて行つて居る。そして平面的に人生を見るのを排し、立體的に人生を見て精緻な心理描寫を試みて居るが、その根底には、いつも我輩は猫乃至草枕などに於ける逼らない非人情の世界がある。從つて人生の悲劇的材料を取扱つた、それから・心などに於ても自然主義に見るやうな重くるしさはなく、常に光明的で、ユーモアさへも見出すことが出來るのである。彼は大正五年大作明暗の稿なかばにして世を去つた。

虛子の鷄頭　高濱虛子も餘裕派の作家と見做してよい。彼の鷄頭に收められた短篇は、純然たる低徊趣味的作品であるが、後に出して傑作と稱せられた俳諧師には自然派的傾向が見える。このほか續俳諧師・朝鮮などの力作がある。

餘裕派と同じく自然主義と異なる道を歩み、所謂あそびの心境にあつて、小說に圓熟の筆を揮つた森鷗外には矢張り餘裕派と一脈相通ずるものがあつた。

鷗外のあそび　鷗外の涓滴・走馬燈・青年には、觀察の精確さと老練な筆致とが見られ、歷史小說天保物語には、豐富な考證癖をあらはして、獨特の新境を開いて居る。

耽美派　餘裕派と自然主義派とは、その人生觀照の態度に著しい相違はあるが共に人生のための藝術であつた。しかるに自然主義に不滿を感じて新浪曼主義の文學運動を試みた、永井荷風・谷崎潤一郎などは藝術のための藝術を主張して耽美的傾向を示した。

永井荷風　は早くから自然主義の洗禮を受けて、ゾライズムの傾倒者であつたが、四十三年に歡

樂や冷笑を出すに及んで、耽美・享樂の色彩が濃くなつた。その作品は全然享樂主義の謳歌を以て終始したかの觀があるが、フランス文學に通じ、また優れた江戸趣味の所有者である彼の表現には、豐艶にして快よきリズムを伴ひ、藝術的芳香が高かつた。

谷崎潤一郎　が文壇にあらはれたのは、明治の末自然主義がそろそろ衰兆を見せた時である。彼は自然主義的傾向がもたらした世紀末的な憂鬱、靈性の物化から來る生の倦怠から脱れるために、異常な新刺戟を求めんとして、人生の中から感覺的な美をえぐり出して之を描かんとした。しかも通常の感覺美ではなく、むしろ異常な變態的なものを求めたのである。この點に於て彼は荷風よりも一層耽美的色彩が濃厚で、徹底的な享樂主義者であると云へる。從つてその作品に出てくる人物は、毒婦・不良少女・不良少年などの頽廢的な人間が多く、惡魔・お艶殺し・刺青・お才と己之介・麒麟などの諸作にも彼の特色がよくあらはれて居る。

同じく浪曼主義の上に立ちながら、唯美派と異なつた方面を開拓せんとしたものに、鈴木三重吉・森田草平・小川未明などがある。三重吉と草平とは共に漱石の門下で、三重吉には小鳥の巣・返らぬ日、草平には煤煙の代表作がある。小川未明には魯鈍の猫・物云はぬ顏などの作品があり、神經描寫に獨自な領域を見せた。

かくの如く自然主義以外にも相當重要な傾向はあつたのであるが、これを小說界に限らず文學全般から大觀した時、自然主義はこの期の文學の中心をなして居たと言つて差支へないのである。但しこの期の末頃から自然主義は漸く衰微の形勢を示し、大正新文學の黎明が眞近に迫つて來たことを知らしめる。

三、詩　歌

長詩

象徵詩　この期の長詩は、薄田泣菫・蒲原有明の象徵詩時代を以て始まる。わが國に西洋の象徵詩が輸入されたのは、明治三十年頃で、當時上田柳村は先頭に立つて海外詩壇の新風を紹介するにつとめたが、幼稚であつたわが詩壇は、それらの新詩風を消化する用意と力とを缺いて居た。それでも前期の末には、泣菫・有明が詩壇の中心となり深みある感情を以て、神秘幽玄の境を表現し詩壇展開の新聲をなして居た。三十八年に有明の象徵詩集春鳥集があらはれ、これと前後して、上田柳村の譯詩集海潮音が公にされるに及んで、詩壇は一轉して、技巧と官能とを主とする詩風が、世にもてはやされるに至つた。有明の春鳥集は、フランスのサムボリストの詩風を模して象徵詩的技巧を試みたのであるが、その表現は未だ洗練を缺き、時に晦澁朦朧のそしりを免れなかつた。しかし幽鬱な情緒を象徵的に表現しようとした點に從來にない新味があつたので、柳村の海潮音と共に詩壇の歡迎をうけた。三十九年には薄田泣菫も從來の古典的作風をやめて、白羊宮を公にし象徵詩への轉化を示したので、象徵詩は終に斯界の中心となるに至つた。

柳村の海潮音　海潮音は、ボードレエル・エルレエヌなどの譯詩を集めたものであるが、清新で纖細な表現の中に、殆んど創作詩とも思はれる位よく氣分を生かし、その表現が洗練されて居た。

泣菫の白羊宮　白羊宮は、薄田泣菫の詩風の變化を示すもので、象徴的色彩を帶びて居る。彼はこの詩集に於て、もつぱら自然物に感興をよせ、それによつて人間生活の趣を象徴せんことに努めたが、零餘子・日ざかりはその代表的作品と云はれる。

かゝる間に、さきに象徴的技巧に洗練を缺いて居た有明も著しく進境を見せ、自然の光景を藉りて人生の意義を象徴する上に圓熟の詩風を示すようになつた。それらの作品は四十一年に公にされた有明集によつて略窺ふことが出來る。

このやうな詩壇の形勢は、明星一派の青年詩人をも動かし、かれらの間にも日常卑近な事物を藉りて、實際生活の意義を象徴せんとする傾向を生じた。また岩野泡鳴は、彼獨自な刹那的表象を唱へて自然主義的傾向を示し、詩集闇の杯盤を出した。やゝ遲れて三木露風は、軟かな感觸の中に纖細な氣分をあらはし、象徴詩人として活動した。

詩壇に於ける自然主義的傾向　象徴詩は詩壇に於ける一態度として、この後ながく勢力を有して居るのであるが、小說壇に於ける自然主義的作品に刺戟されて、詩壇にも自然主義的傾向が取入れられるに至り、それから民衆詩的傾向があらはれて來た。先づ內容の上に於て在來の詩は概して空想的な詠歎であつたが、もつと現實に卽するとともに、形式上に於ても字數用語などにとらはれず自由なるべきことを主張するものが出て來たのである。

相馬御風の自由詩　御風は明治四十一年に「詩界の根本的革新」なる一文を公にし、詩形の絕對自由を主張し、また內容に伴ふリズムを重んじた。口語詩瘦犬は、彼がその主張を具體化するために試みた作品である。御風はこの前後に三木露風・人見東明らと自由詩社を起して、詩壇の革新運動につとめ、北原白秋・吉井勇らのスバル一派も之に呼應し、これ等の人々によつて都會詩口語詩などが生み出されるやうになつたのである。露風・白秋は大正期に入つてからその特色を發揮し詩壇に活躍したのである。

短歌

明星派の凋落　次にこの期に於ける短歌を見ると、前期から引續いて浪曼的傾向の歌が勢力を占めて居た。依然として戀やあこがれの情緒を主として居て自然主義の影響を受けることが長詩よりもおそかつた。從つて明星派の與謝野晶子などが歌壇の中心をなして居たのであつた。しかし晶子が明治三十九年に出した舞姫を見ると、そこには著しく客觀的な風が加はり、明かに自然主義思想の影響が認められる。この頃から明星派の勢力は次第に衰へ、明治四十一年には機關雜誌明星の廢刊を見るに至つた。かゝる間に自然主義的思潮は、當時の青年歌人を刺戟し、遂に意識的にその主張を作歌に取入れるものがあらはれて來た。

歌壇に於ける新傾向　石川啄木・若山牧水・土岐哀果・前田夕暮らは浪曼的な明星派の歌風を排し、

現實を生命とした歌を高唱するに至つた。換言すれば歌の上に眞を拉致し來らんとする歌壇革新の叫びである。

石川啄木　啄木は幻滅的、否定的な態度を以て日常生活を歌はんとした點に自然主義的傾向を示して居る。彼の歌が特に人の魂を牽引せずにおかないのは、職業をうたひ貧苦の生活を歌つて時にヒユウモアや皮肉を出しながら、その中に暖い人間的な涙が光つて居た點にある。

土岐哀果も日常生活を歌つて啄木と同じような道を歩んだが、若山牧水ば、これ等の人々に比し浪曼的傾向が多かつた。しかし近代的苦悶を大膽に詠出したところに矢張り、自然主義的傾向が認められる。

前田夕暮は、前者に比し理智の人であつたから、すべての事象に對して常に觀照の態度を忘れなかつた。

俳句

前期に於ける俳句革新運動は、子規によつてほゞ成就されたかの觀があつたが、なほ殘された事業は主として虚子・碧梧桐の手によつて完成されたと云つてよい。子規歿後引續いてこの二人は俳壇の中心として年を加ふる毎に圓熟の境致に進んだが、自然主義的思想が文壇を風靡するに及んで、俳句もまたこの影響を受け、河東碧梧桐・荻原井泉水らによつて新傾向句が唱道された。

新傾向句　新傾向句は、長詩に於ける自由詩の如く十七字形式に制約されない自由句とも云ふべきものである。その自由な形式は往時の談林派と相似たるものがあるが、新傾向句には、內容的に力强い生命があらはれて居た。この點から見ろと、新傾向句の主張は、自然主義的思想の上に立つ一つの俳句革新運動であると云ふことが出來る。

四　戲　曲

次にこの期の戲曲をながめると、實演といふ上から言へば、なほ傳統的な歌舞伎劇が勢力をもつて居たが、注意すべきは坪內逍遙が再び起つて、眞摯な研究から出た新しい試みを劇界に提供したことである。

逍遙の新樂劇　逍遙は明治三十七年秋新樂劇論を草し、國劇刷新の要を唱へ、過去に於ける國民生活を尊重して其の特質の上に新樂劇を造りあげようとした。桐一葉を公にした頃の彼は、從來の劇を泰西の科白劇化せんとしたのであるが、わが國劇の特色は、樂劇方面にあつて科白劇方面でないことを悟り、こゝに樂劇を鼓吹しいのである。新曲浦島・新曲赫哉姫・鉢かつぎ姫などは、新樂劇論の意見を具體化したものである。

社會劇　元來この新樂劇は、音樂舞踊に近く、人を恍惚の境に遊ばしむるを旨としたもので、この期の文學主潮たる自然主義とは殆んど沒交渉のものであつたが、その劇界に與へた新刺戟と、彼が斯界に對する眞摯な研究的態度とは、劇壇改革の運動をして、一層確實にその歩を進めしめたの

であつた。

思ふに自然主義が戯曲に與へた影響は、この期に於ける他の文學程切實ではなかつたが、なほイブセン劇などの飜譯劇が行はれた事と、その影響を受けた中村吉藏・佐野天聲・眞山青果などの社會劇の起つたことは注目に値する。イブセンの社會劇は明治三十四年高安月郊の手によつて飜譯され、その中には社會の敵・人形の家などが收められてあつたのであるが、その當時の劇壇は、未だそれらを演出する程進んで居なかつたのである。ところが明治三十九年にイブセンの死が、わが國に傳へられてから、ノラ・ブランド等の名が世人の口に上るやうになり、その趣を傳へた社會劇もこの風潮に刺戟されてあらはれたのであつた。イブセンの劇の特色は、個人の覺醒と社會に對する反抗とにある。しかして驚歎すべき劇的技巧をもつて居た彼は、新しい立脚地に立つて人生と社會とを見ることを全人類に敎へてくれたのである。

中村吉藏　はイブセンの思想に私淑し、社會劇牧師の家を書いて宗敎界の腐敗を暴露し、鋭利な批評を加へて新しい問題を社會に提供しようとした。後に出た剃刀は彼の代表作で、社會制度の缺陷から起る悲劇を描き新問題を提供して居るのである。

このほか明治四十一年に大農・意志・不死の誓を書いた矢野天聲も矢張りイブセンの影響をうけた一人である。その表現には未だ到らないところがあつたが新社會劇作家として注目すべき作品を殘して居る。なほ同年第一人者・生れざりしならばを書いた眞山青果は吉藏、天聲と同じくイブセン

に私淑したもので、第一人者は因習的な俗見と戰ふ新人を主人公として力强い表現を試み、その技巧に於てもよく渾成されて居て天聲などに勝り、新社會劇作家として動かすべからざる地歩を劇壇に占むるに至つた。

以上の社會劇は、イブセン劇の內容をそのまゝ取入れた感があり、直ちにとつてもつて我が國の社會生活と調和しないものがあつたが、これが將來わが國の實社會に卽した思想劇への展開の因子をなしたといふことは、極めて重要な意義があると云つてよい。

このほかこの期の戯曲として記さなければならないのは、山崎紫紅の新史劇である

山崎紫紅の新史劇　山崎紫紅は明治三十九年に新史劇七つ桔梗を出し、史的事實によせて時代精神を現さんと試み、個性の發展自我の滿足を主張しようとした所に自然主義的傾向が窺はれる。この作はその結構に於ても表現に於ても從來になかつた新味を有し、また斯界に一新生面を開いたものであると云へる。

第六篇　大正時代の文學

大正文學の概觀

明治第三期に於てわが文壇の主潮をなして居た自然主義の文學は、眞を描くことに囚はれて人間の靈性を無視し、人生觀照の態度に缺くるところがあつたから、既に四十年代の末に永井荷風・谷崎潤一郎の耽美派、或は鈴木三重吉・森田草平などの新浪曼主義の文學が起つて、文學の機械化・物質化を救はんと試みた。耽美派はあまりに頽廢的な點に世間からの非難を免れなかつたが、新浪曼主義、自然主義からくる壓迫と若惱に呻いて居た人々に、慰藉と休息とを與へたことは多としなければならない。またこれと前後して評論壇にも金子筑水・片上天絃などにとつて反自然主義的意見が論ぜられ、失はれた理想に對する憧憬の情が熱烈に動き出して來た。かくの如き傾向は漸次勢力を加へて行つたが。やがて新理想主義の哲學が思想界に入るに及んで、わが思想界はその光明的な主張に共鳴し、延いて文壇も一轉機をなさざるを得ない狀態となつた。果して大正の改元を大體の境界線として、わが文壇は自然主義をはなれて新理想主義の時代を迎へ、人道主義的立場をとる白樺派の武者小路實篤・有島武郎・志賀直哉などは忽ち文壇の中心勢力をなすに至つた。而して彼等の人道主義的な叫びは一面佛教思想の復活となり、或は基督教的思想の崛起を促し、倉田百三・吉田絃二郎・江原小彌太等の宗教的文學を生み、更に島崎藤村・田山花袋等の先進作家にも轉化を促がすに至つた。かくして大正前半期即ち大正六年頃迄は、新理想主義の文學が文壇の主流をなすの觀があつたが、後半期即ち大正六七年頃になると、新現實主義の文學が主要勢力となり、その代表的作家には菊地寛・里見弴・芥川龍之介・豐島與志雄・佐藤春夫などをはじめその數は極めて多く、しかも夫々個性に從つて各種各樣な道を歩んで、その色彩傾向を異にしたのである。從つてこれを明治時代の文學のやうに、一二のイズムに總括することはやゝ無理ではあるが、今廣い眼界から眺めて、これらをすべて新現實主義の範疇に入れて叙述を進めることにする。さて新現實主義の文學が、大正後期に於ける文壇の主潮となつたことは明かに認められるが、これとほゞ並行して社會主義的傾向をもつた文學が勃興して來たことは甚だ注目すべき現象である。社會主義文學の代表的作家としては藤森成吉・前田河廣一郎・江口渙・加藤一夫・長谷川如是閑・小川未明・宮地嘉六などで、このほか藤井眞澄・宮島資夫・中西伊之助・新井紀一などが所謂プロレタリア作家と稱せられる。これらの人々の作品は皆社會的意識を要素として居る點に於ては共通であるが、その懷抱する社會的色彩は、それぞれ濃淡區々であることは云ふまでもない。

飜つて詩歌の方面を見るに、詩壇では前半期に白秋・露風が一期を劃して後、なほ川路柳虹・西條八十・千家元麿・高村光太郎・野口米次郎などがあらはれて各々特色を發揮したが、後半期には社會

的傾向を帶びた民衆詩が勃興し、福田正夫・百田宗治・富田碎花・白鳥省吾などの新進詩人を出した。歌壇に於ては島木赤彥・齋藤茂吉らのアララギ派の歌が中心をなして居たが、なほ士岐善麿・安成次郎・西村陽吉らのプロレタリア歌人があらはれた。次に俳壇に於ては著しい變化は見られないが、なほ個性の上に立つて特色を示さんとする傾向は、藝術的な童謠とともにまた時代思潮の反映と見ることが出來る。

思ふに大正文學の前半期の主潮は、大體に於て新理想主義であると云ひ得るが、後半期になると各派對立の時代となり、作家は各々好む所に向つて個性を發揮したから、新現實主義の文學とか、乃至社會主義の文學とか一主義をもつて、文壇を區劃するといふことは出來なくなつた。また作家自身から云つてもその作風は一定せず、製作上から云つても小說と戲曲とを並行的に書き、明治文學に於けるやうに小說作家と戲曲作家とが明瞭に區別されて居ない。だから大正文學に於ては、特に戲曲の部を置かず、小說の部に於て之を併述し、また明治文學に於ける時代區劃に倣はず、大體の傾向から便宜新理想主義文學・新現實主義文學・社會主義文學に區分して叙述して行きたいと思ふ。

第一章　新理想主義の文學

新理想主義文學の出現　大正前半期の文壇の主潮をなした新理想主義は、自然主義を逃避するものではなく、自然主義が認めた現實の醜惡に直面し、更にその上に新理想を建設せんとしたものである。自然主義は否定的であり、暗黑的であつたが、新理想主義は肯定的であり、有理想的であり、光明的であつた。しかしてその思想的基調は、大體に於て人道主義乃至愛の思想で、古くは佛陀の慈悲、キリストの愛にその根源がある。他を愛せよと云ふことは決して新思想ではないが、新理想主義の文學は、この思想に對して文學的に新解釋を下し具體的な作品によつて、これを表現せんとしたところに重要な意義があるのである。

新理想主義文學の中で代表的なものは、雜誌白樺に據つた人道主義一派で、所謂白樺派と呼ばれる人々であつた。卽ち武者小路實篤を中心とし、有島武郎・志賀直哉・長與善郎などである。

武者小路實篤　は學習院在學中すでにトルストイの研究に沒頭し、明治四十三年有島武郎等と共に雜誌白樺を發行して、盛んに論議と創作とを誌上に發表したが、當時にあつては、いたづらに文壇の嘲笑を買つたに過ぎなかつた。しかし飽迄も進んでやまない熱情と男性的な强い信念とを有つて居た彼は、まもなく新理想主義文學の巨匠として文壇の中心人物となつたのである。彼の作品の

多くは人類愛を基調として書かれたものであるが、その表現は無技巧であり、その文章は比較的生彩に乏しいと云はれる。しかし平明暢達を特色とし、一字一句生命が溢れて居る。たゞ比較的氣品に乏しいのを憾とする。彼は小說のほかに評論、隨筆、詩、戲曲など多くの作品を公にして居るが、中で戲曲はその數も多く實演の形式にとらはれず、大膽な筆をもつて意の赴くまゝに描いて彼の個性をあらはして居る。又その作品の中には舊來の形式に拘泥しない結果、一々小說であるか、戲曲であるか、或はまた感想であるか明らかに區別されないものが多い。お目出たき人・世間知らず・或る青年の夢・幸福者などは、その代表作である。

有島武郎　は白樺派から出で武者小路について新理想主義の文學に重きをなすものである。彼も武者小路と同じく小說・戲曲・詩歌何れをもよくし、その文學の基調は矢張り愛の思想であつた。たゞ前者の愛は人類愛とも呼ぶべき高く大きいものであつたに對し、武郎のは肉親的個人的な限定された愛を取扱つた點に相違があつた。作家としての彼は、豐富な語彙と莊重的確な表現とを以て新理想主義作家中嶄然頭角を拔いて居た。また彼の作品は、その作家的生涯の上から見て大體二期に分けることが出來る。即ち大正十一年一月に發表した宣言を境として、それ以後は作家としてよりも寧ろ思想家としての生涯を送るやうになり、偶々發表する作品にも社會主義的傾向の濃いものを出すやうになつたからである。從つてその文壇的生命も前期にあつたと云ふべきである。前期の代表作としては實驗室・凱旋・小さき者へ・石にひしがれた雜草・カインの末裔・クララの出家・生れ出づる惱みなどがあり、いづれも純一な愛を基調とし豐麗な表現をもつて文壇の注目を惹いた。死とその前後は彼の戲曲である。後期の代表作としては、宣言・或る施療患者、戲曲に斷橋・ドモ又の死がある。宣言は彼が人道主義的作家の殼を脫して社會思想運動の渦中へ突入するための宣言であつて、彼の思想の轉機を示すものとして注意すべきものである。ドモ又の死は新味が多く、且つ象徵的に表現された點に於て彼の作中すぐれたものの一つである。

志賀直哉　はまた白樺出身の新理想主義作家として代表的な一人である。直哉の扱ふ愛は、武郎の愛よりも更に狹くして深い感じがする。その愛は決して盲目的な愛ではなく、常に明らかな理智が働いて居た。彼は自然主義作家の如く、尖銳な神經をもつて現實の醜惡や暗黑面を描き出し、その惡や醜さに對し感傷的な涙をそゝいだり、逃避的態度をとつたり決してしない。飽迄純客觀的な態度のもとに、その醜惡を暴露してやまないが、決して暴露のための暴露に墮することはない。それはよりよき人生の相に對する理想をもつて現實を凝視して居るからである。そこに現實改造の憧憬があり、彼の藝術の生命がある。和解・暗夜行路・范の犯罪・濁つた頭などは、その代表作と云はれる。なほ直哉の表現は單純且つ素朴であるが、些の冗漫もなくその點技巧として充分精練されたものである。

長與善郎　は少しおくれて白樺派の同人となつたのである。彼は人類愛のために戰はんとする男性的な點に於て、武者小路と相似たるものがあるが、實篤のやうな確固たる哲學と信念を有さない。

その表現は生硬な感じと稚氣とを免れないが、力强い筆觸と、彼れ特有な純眞な優しさとは、よくこれ等を補つて餘ある。項羽と劉那・盲目の川の二篇は、最もよく彼の特色をあらはした作品である。

宗教文學　新理想主義の思想的中樞は、大體に於て愛を基調とする人道主義であるから濃淡の差こそあれ、必ず宗教的な色彩を持つて居る。その色彩が比較的濃厚であると所謂宗教文學となる。宗教文學と云つても宗教の方便としての文學とか、宗教傳道のための文學とかいふ意味ではなく、宗教的な題材を取扱つて宗教的情操が流れて居るといふ程の意味をもつ文學である。新理想主義の作家と目されるものの中で、この宗教的色彩の比較的濃いものを擧げると、倉田百三・吉田絃二郎・江原小彌太・賀川豐彦などがある。彼等は實際に於ける白樺出身ではないが、その傾向から云ふと、白樺派作家の中に入れてもよいやうに思はれる。但し倉田百三は後れてからではあるが白樺派の人となつた。

倉田百三　は愛を高唱する人道主義者で、その思想の中心は佛教乃至キリスト教から來た宗教的愛である。彼は不調和な人生に美しい調和の世界を見出さうと希ふ熱心な求道者であつた。その表現は詩的で淸新ではあるが、やゝもすれば感傷に流れて纖弱の弊に墮する。出家とその弟子・俊寛・處女の死は彼の代表的戲曲である。

吉田絃二郎　は感傷的な點に於て倉田百三と一脈相通ずるものがある。彼は自然主義文學の系統

から出て次第に宗教的な傾向を現はし、新理想主義の作家と目されるに至つた。彼は常に釋迦・キリスト、トルストイ、芭蕉、ドストイエフスキイなどの思想や人物に憧憬して、豐かな宗教的情操の中に甘い哀愁の涙を注がうとする殉情的な多感な詩人の俤を有する。從つてその觀察は明透を缺き小說作家といふよりも、寧ろ人生の詩人とも云ふべき人であつた。人間苦・熊のわな・芭蕉・ダビデと子たち・島の秋はその代表作と稱せられるものである。

賀川豐彥　は大正十年に死線を越えてを出し、その體驗の記錄であるといふ點に世俗の歡迎を受けたが、藝術的價値は乏しく、むしろ後に書いた太陽を射るものの方が、此の點に於て勝れて居る。

江原小彌太　は大正十年突如として新約を出してその名を高め、引續き舊約・復活などを出して絕倫の努力を示したが、新約以外は文學としての價値は少ない。新約は材を聖書から取り、その表現も清新であり且つ人物の個性が明かに描き出されて居る傑れた文學的作品である。

なほ明治文壇に活躍した先進作家中、この期に入つても依然として名聲を持續し、大正文壇に光彩を添へた人々が少なくない。岩野泡鳴・谷崎潤一郎・島崎藤村・田山花袋・森鷗外・德田秋聲・正宗白鳥・上司小劍などは卽ちこれである。

先進作家の人々　先づ岩野泡鳴は所謂一元描寫を主張し大正八年に征服者被征服者を公にしてその主張を具體化し、更に毒藥を飲む女・憑物などの力作を書いた。谷崎潤一郎はハツサンカンの妖術・嘆きの門・異端者の悲しみなどにますゝその惡魔主義的色彩をあらはして依然獨自の境地を見

せたが、漸く行詰つて戯曲の方に新しい展開を示し愛すればこそ・愛なき人々などの作品を發表した。

次に島崎藤村は大正八年に新生を出だして自然主義から他へ轉じようとする態度を明かにした。田山　袋も大正六年にある僧の奇蹟・殘雪などを書いて、かつて提唱した自然主義から離れて一轉化をなさうとする努力を見せたが、その心にさしたる飛躍は見出されなかつた。森鷗外は、この期に於ても歴史小説や傳記物に老熟な作風をつゞけて流石に大家の貫録を失はず、高瀨舟・ぢいさんばあさん・北條霞亭・伊澤蘭軒などの名作を發表して世の景仰を集めた。

まだ徳田秋聲・正宗白鳥は在來の餘勢をもつて、前者はあらくれ・ある賣笑婦の話などを、後者は毒婦のやうな女・人さまざまなどを書いて共に技巧の上に一段の進境を見せたが、內面的には全く固定してしまつた。上司小劍は鱧の皮・父の婚禮・東京を書いて前期より格段の進境を見た。このほか小栗風葉・泉鏡花などは昔日の意氣なく大正の新文壇には何等特記すべき業績を殘さなかつたのである。

第二章　新現實主義の文學

新現實主義　新現實主義の文學は新理想主義の文學と、社會主義文學との連鎖をなす役目をもつて居る觀がある。その特色とするところは、舊現實主義の現實內容を廣く自由にしたところにある。

新現實派の作家　新現實派の作家は非常に多く、その作風も各々特異性を發揮して居るので、一々について述べることは煩雜であるから、今その主要なる人々についてのみ述べる事にする。卽ち新現實主義派に屬すべき重なる作家には、菊池寛・芥川龍之介・里見弴・藤森成吉・室生犀生・加納作次郎・有島生馬・細田民樹・谷崎精二・相馬泰三・松岡讓・細田源吾・水守龜之助・中村武羅夫・加藤武雄・沖野岩三郎・廣津和郎・豐島與志雄・葛西善藏・近松秋江・中村星湖・久米正雄・宇野浩二・佐藤春夫・久保田萬太郎・水上瀧太郎・南部修太郎など、ほかに女流作家として中條百合子・藤村千代子・吉屋信子などがある。

里見弴　は白樺派の同人であつたが、漸次理想主義的傾向を離れて現實的傾向に進み、新現實派としての色彩を鮮明にして文壇に優越なる地歩を占むるに至つた。彼の初期の作品には鏡花の影響が多く見受けられるが、大正九年以降の作である、父親・直輔の夢・多情佛心・大道無門などに於ては彼獨特の深い心理描寫に渾熟された味ひを見せて居る。

有島生馬　も最初は白樺派の一人であつたが、後に新現實主義に轉向して行つた。美少年・鳩飼の娘・眞晝の出來事などの作品がある。元來畫家である彼の作風は、溫藉高雅であり、その表現も畫家らしく陰影のある巧妙なものである。

次に菊地寛・芥川龍之介・豐島與志雄・久米正雄・松岡讓などは、帝大文學部出身の有志によつて發刊された文學雜誌新思潮よりあらはれた作家である。これらの人々の中では豐島與志雄が一番先きに文壇にあらはれたのであつた。

豐島與志雄　の觀照の態度には飽迄も現實を深く視て行かうとする意識が强く働いて居るが、その作品にはどこかに理想の匂ひがあり、主觀的な分子が見える。理想の女・生あらば・反抗・野ざらしなどはその代表作である。

菊池寛　は冷徹した理性と鋭い良心とをもつ作家であつて、作品の何れにも理智が働いて居る。即ちある主題を捉へて表現する場合に、すぐさま情に訴へないで根底に理知を働かして、邪惡な感情が頭を擡げようとするのを抑へつけ、しかもその結果は理知によらずに作り上げたものよりも豐かな情趣をもたせようと努めるのである。大正五年に戯曲屋上の狂人を出して一般から注目され。翌年恩を返す話を出すに及んでその技倆を認められ、更に大正七年に無名作家の日記を書いてから名聲俄かに高まり、爾來一作を出すごとに文壇的地位を高め遂に文壇の重鎭として仰がれるに至つた。彼は自己の身邊若しくは一般日常生活の平凡事から題材を求め、的確な表現を以て優秀な作を

公にし、更に歴史物を取扱つてそこに自家の道徳的批判を暗示し、その眞價を發揮した。彼の作品中著名なものは、忠直卿行狀記・恩讐の彼方へ・神の如く弱し・入れ札・蘭學事始・眞珠夫人・火華などがある。その中で眞珠夫人・火華などは新聞小說として一新生面を開いたものと云はれる。なほ戲曲には前出の屋上の狂人以外奇蹟・父歸る・藤十郎の戀・敵討以上・義民甚兵衞などの傑作がある。要するに彼は時代の好尙を洞察する明らかな才智を惠まれて居た上に、勝れた文學的手腕とその主題を捉へる事が甚だ巧妙であつたから比較的易々として文壇的成功をかち得ることが出來たのである。

芥川龍之介　はその素質・傾向・經歴に於ても、また好んで歴史上の事實に題材を求めた點に於ても菊池寛と相似たるものがあるが、彼の作品は寛よりも更に巧緻であつた。その取材の洽博にして清新なると、警拔無比なる觀察と洗錬された修辭とを以て玲瓏玉の如き表現を試みた點に於て、たしかに新技巧派の大立物と目すべきものであつた。題材の選び方も甚だ巧みで、心にくき程纒つて居て寸分の破綻を見せない。高雅にして明朗な作風は森鷗外を髣髴させるものがあつた。しかし飽迄も澄み切つた理智的なその作品には、どこか手觸りの冷たい所があつた。その出世作は大正五年に發表した鼻であるが、そのほか羅生門・或る日の大石內藏助・奉敎人の死・きりしとほろ上人傳・秋・雛などの勝れた作品を出して居る。

久米正雄　は芥川・菊池と共に矢張り新思潮よりあらはれた作家である。その作品は概して華やかで輕快で、しかも人情味が溢れて居るが、比較的實質に乏しい作家と云はれる。重なる作品には

牛乳屋の兄弟・戯曲河武隈心中・螢草・破船などがある。田園の憂鬱・佗しすぎる・都會の憂鬱などはその代表作である。

佐藤春夫　は近代人的な憂鬱性を備へた點に特色がある。

室生犀星　は春夫と共に詩から散文に入つただけあつて、どこか詩人的な風があるが、性慾を扱つて頽廢的氣分が春夫よりも更に濃厚である。青白き巣・地下室の老人などはその代表作と云はれる。

その他の人々　中村星湖はその短篇集失はれたる指輪に堅實な作風を示したが、生彩に乏しい。また舞鶴心中・死の幕の彼方などで華やかな筆を以て、情話を取扱つた近松秋江は、その情趣の多い作風で相當認められ、廣津和郎は初め理想主義的色彩を濃厚に持して居たが、後次第に現實的傾向を示して來た。その作品には神經病時代・悔などがあるが、鋭敏な觀察をもつて世の注目を惹いた。作爲の跡がなく、それで生の哀愁をしんみりと味はせる加納作次郎には、世の中へ・若き日・傷ける群などの作品がある。

加藤武雄は純朴な表現の中に殉情的な氣分が流れて居るのを、その特質となし、鳴咽・終列車・仙太郎の戀などの作品がある。ことに仙太郎の戀は、鄕土小說の世界を開拓したものである。宇野浩二は明るいユーモアを通して悲愁や陰欝さを傳へる作家として有名であつて、藏の中・苦の世界などの作によくその傾向があらはれて居る。

水守龜之助は、日常生活や周圍の出來事に材料を取り、淡々たる中に人生の姿を滲み出してゐるところに價値が認められる。その主なる作品には歸れる父・戀愛時代などがある。尙三田派に屬する久保田万太郎は、滅び行く江戸の名殘りを下町に求めて、哀趣の細かい情調を獨特な觀察に托して描くのに妙を得て居る。その作品に露芝・寂しければ・朝顏などがある。

以上のほか旅役者・零落などを書いて情話文學に新生面を開いた長田幹彥、穩健な作風をもつて知られて居る三田派の水上瀧太郎・南部修太郎・それから明らかな新現實的傾向を示しつゝ、長篇にその努力を見せた中村武羅夫などの活動も見脫すことは出來ない。

第三章　社會主義的文學

社會主義的文學とは、階級の打破、プロレタリアの解放といふ觀念を高潮し、强い社會意識のもとに文學自身社會主義運動の一役割を分擔するものである。

社會主義的文學の新生　世界大戰後、社會改造の聲は第一に全世界に高唱された。無產階級の間には資本主義社會の横暴、或は社會的矛盾が高らかに叫ばれ、勞資問題となり、社會主義的思想の勃興を見るに至つた。而して世界の思想界文藝界は、これ等の影響のもとに一大轉化を起すに至つたのである。

世界大戰の影響として、眞先にわが思想界にあらはれたのは、吉野作造・大山郁夫等によるデモクラシーの提唱であつた。また文藝方面では加藤一夫を始め小川未明・秋田雨雀等の民衆藝術論が起り、既成文學更新の叫びをあげたが、やがて起つたロシヤ革命はわが思想界にも波動を與へ、堺利彦・山川均・河上肇・長谷川如是閑・平林初之輔・村松正俊を初め多くの評論家が出て社會主義思想の研究皷吹につとめ、或はプロレタリア文學のために健闘したが、プロレタリア文學の方面に於ては平林・村松の活躍がもつとも目覺ましかつた。又後にプロレタリア文學家として活躍した前田河廣一郎・藤井眞澄なども既戸文學の攻擊を盛んにして、無產階級の文學のために活動したのである。

評論壇に於けるプロレタリアの活躍は、かく目醒ましきものがあつたが、それらの中からは未だ文學として見るべきものは容易に生れなかつた。それには色々の理由があつたが、その主なるものはブルジョア的の現實を、直ちにプロレタリアの理想をもつて律して行かうとした矛盾があつたためで、そのために文壇から見向かれなかつたのである。然しこれらの中にわつて、先進作家として既に得て居る文壇的地位を利用して、プロレタリア文學の爲に活動した人々があつた。それは藤森成吉・長谷川如是閑・小川未明・宮島資夫・秋田雨雀・宮地嘉六・上司小劍・江口渙・加藤一夫などである。彼等は凡そ大正十年前後から文壇にプロレタリァ派としての作品を公にしはじめたが、それ等の作品には、どこか物足りなさを感じられるが、この點から云つて新井紀一・前田河廣一郎・藤井眞澄・中西伊之助などは、プロレタリア作家として眞に新興の氣勢を示したものであつた。

藤森成吉　は大正七年に湖水の彼方・發狂を翌八年に研究室で・母・子供などの諸作を發表して文壇に確乎たる地歩を占めた。彼は人生の實相を正しく凝視して些細な出來事からでも、或る意義を見出さうとして作品の上に異色を示して居たが、社會主義同盟の結ばれると共に之に加入し、實際運動との接觸を怠らなかつた。プロレタリア文學作家としての彼は、自らはげしい肉體勞働をも體驗し、人間を凝視してそこにプロレタリアの精神を見出さうとする態度を執つた。彼は後に戯曲に意を注ぎ、磔茂左衞門・犠牲などにその特色を發揮した。

小川未明　は明治文壇以來の作家として世俗に投することなく、眞摯な態度をもつて長い文壇的

生命を持續して來た人である。思想の上からも、技巧の上からも決して傳統にとらはれないで獨自な道を辿つてきて居るが、また時代の影響を受けて、浪曼主義的な傾向から人道主義的へ、更に人道主義的傾向から社會主義的傾向へと三轉して居る跡が見える。彼の社會主義的作品について見ると、いづれも筋がはつきりして居ない。それ故興味中心の小說とは全然行き方を異にして居るが、眞實味と熱情とをもつて社會の現實を描き、それによつて世人の心をとらへ世人の覺醒を企圖した點に特色がある。彼等の行く方へは彼の作品の特異性を最もよく現して居るものである。

前田河廣一郎　は大正十一年に出した短篇集三等船室によつてプロレタリア文學の作家として認められた人である。彼は技巧に對して無頓着であるが、階級意識と反抗的精神とが熾烈であつて力の藝術と云ふ感を與へる點に於てゴオリキイの俤があると云はれる。短篇集三等船客のほかに大暴風雨時代・短篇集赤い馬車などがあり何れも彼の代表作である。

以上のほか豐富な經驗を基礎とし洗練された技巧を示す宮島資夫・勞働者の生活描寫に勝れた宮地嘉六、荒削りの表現の中に妙味を有する江口渙、地味な表現のうちに勞働者達の進むべき道を示して居る新井紀一、強い熱情と反抗的意識とをその作品に反映する藤井眞澄、題材を多く朝鮮にとつて特異の作風を示した中西伊之助など皆社會主義文學の主なる併家である。しかしプロレタリア文學は、發生以來日が淺く概して未成品たるを免れないから、その文學的完成は、これを他日に期さなければならない。

第四章　詩　歌

薄田泣菫・蒲原有明などの後をうけて大正の象徵詩人と目すべきものに北原白秋・三木露風・川路柳虹・荻原朔太郎・日夏耿之助・西條八十などがある。殊に白秋・露風は明治末期からすでにその名を詩界に知られて居て、大正詩壇の先達をなしたものであつた。

北原白秋　が象徵詩的傾向を見せ始めたのは、明治四十一年の謀反で、その後四十二年に出した詩集邪宗門によつて象徵詩人としての成功をおさめることが出來たのである。彼はその後大正に入つてから東京景物詩・白金の獨樂などを公にしたが、作詩中もつとも傑作と云はれるのは邪宗門である。その中には鋭い官能の追求と、豐かな官能の交錯とを如實にあらはし、自由に鮮かなその印象を表現して居るのである。大正七八年以後は童謠・民謠などの方面に全力を注ぎ、詩の方にはあまり筆を執らなくなつた。

三木露風　は白秋とともに大正詩壇の中樞と仰がれた。明治四十三年に詩集寂しき曙を出して象徵詩人の名を得たが、大正に入つてから白き手の獵人・幻の田園を公にして敬虔な態度の中に、幽韻な趣致をあらはした。

萩原朔太郎　は頽廢的な神經を微妙に働かし、その感情を率直にあらはす點に於て特色を有する

象徴詩人である。月に吠える・青猫・幻の寢臺などはその代表的詩集である。

西條八十　は洗練された語句を自由に驅使し、さびしさと愛着の情とを美しい幻想に托して歌つた詩人である。砂金・靜かなる眉・見知らぬ戀人などは、彼の特色をもつともよく現して居る詩集である。

自由詩の勃興　詩壇に於ける自由詩的傾向は、明治四十年代に已にあらはれて居たが、この傾向ほ漸次勢力を得て、大正二三年頃になると詩壇は全く自由詩の天地となつたかの觀がある。白鳥省吾・高村光太郎などは自由詩派の代表詩人である。

象徴詩や自由詩は明治時代の終らんとする頃に、その姿を見せはじめ、大正時代に入るやいなや急劇な發展を見だのであるが、純然たる大正詩壇の産物と云ふべきものは民衆詩である。自由詩の發展は詩界に大きな刺戟を與へたとはいへ、その成果から見れば單に詩形上の革新に過ぎなかつたのである。しかるに民衆詩の出現によつて新しき酒は、新しき革嚢に盛られたのであつた。民衆詩を從來の詩に比較して見ると、先づあらゆる生活や事物から詩を見出して用語も平易且つ自由であることである。從つて開放的であり、何人にも親しみ易い特色を持つて居る。これは高踏的に考へられて居た詩と云ふものを、一般民衆の身邊にまで近付かせたと云ふ點に於て極めて重要な意味を持つて居る。民衆詩の勃興したのは大正五年頃からで、世界大戰勃發の前後わが國へ紹介されたホイツトマン・カアペンタア・トラウベルなどの民主的な詩風に刺戟されたことは云ふまでもない。百田宗治・福田正夫・富田碎花・白鳥省吾などは、これ等民衆詩人の大なるものである。而して民衆詩は次第に社會的傾向を帶びるやうになり、大正十年以後にはプロレタリアの詩をも生ずるやうになつたが、未だ搖籃時代に屬するこれらに付ては、文學上特筆すべき程のものもなく、他日の發展を俟つべきものである。

以上は大正詩壇の概要を述べたものであるが、なほこの期の詩壇に活躍した詩人として千家元麿・野口米次郎・堀口大學等がある。中にも千家元麿の詩は、直截な表現の中に現實味を多くもつて居り、高雅な詩境を藏して居る。自分は見た・虹・太陽の愛・新生の悅びなどは、彼の特色を最もよく表して居る詩集である。

童謠　童謠の流行も、また大正詩壇にとつて注意すべき一現象である。從來子供の間に歌はれた唱歌は、あまりに彼等の生活と緣遠いものであつた。そこで文壇の新機運が動くにつれて、兒童特有の世界から詩を見出し、童心に即した詩があるべき筈であるといふ論議が擡頭して來たことは當然のことであつた。しかしてこの考へを眞先に實現しようと努めたのは、葛原繭である。彼はこの意味に於て明治末年から大正にかけて隱れたる童謠界の功勞者であつた。繭は童謠が歌詞にとらはれることと、それが兒童の哀愁をそゝることを忌み陽氣で平和で活動的で、しかも平明なものでなければならないとした。これは今日の童謠界に重要な基礎を與へたものであると言つてよい。かく彼によつて基礎づけられた童謠界は、北原白秋・野口雨情をはじめ西條八十・白鳥省吾・三木露風(後

に羅風と改む）などの出現によつて著しい進歩を見た。

北原白秋の童謡は、大體に於て寫實的で明るく、歡喜に充ちたものが多く、祭の笛・とんぼの眼玉などは代表的な童謡集である。また野口雨情は純眞な童心の持主であつて、洗練された詞章をもつて優雅な感情を表出した。その童謡集には、十五夜お月さんがあり童謡に關する著作として童謡十講・童謡作家問答などがある。

和歌　短歌の方面では、明星派の流れを汲む者に吉井勇・北原白秋などがあり、佐々木信綱の竹柏園門下に木下利玄・川田順などがあり、また子規の流れを傳へてアララギ派を開いた伊藤左千夫の門下には島木赤彦・齋藤茂吉・古泉千樫などが出た。これ等の人々は雜誌アララギによつてその派の歌風を世に布き、現在歌壇の中心勢力となつて居る。更に尾上柴舟の車前草社には若山牧水や前田夕暮などがある。國民文學によつてその歌を發表して居る半田良平・松村英一等及び地上によつて居る對馬完治・丸山芳良等は、何れも自然を靜觀して心理の委曲を歌ひ込まんとする窪田空穗の門下である

なほこのほか自然詩社を主宰し、歌壇の評論家として認められて居る尾山篤二郎があり、新進歌人には雜誌覇王樹によつて居る橋田東聲・臼井大翼、雜誌潮音によつて新古今の流風を汲む太田水穗などがある。また更に近時プロレタリア歌人と稱するものに土岐善麿・西村陽吉などがある。

俳句　俳句の方面は別に目ざましい展開もなく、大正時代になつてからも矢張り明治俳壇の功勞者である河東碧梧桐・高濱虛子・内藤鳴雪を中心に、中塚一碧樓・荻原井泉水・大谷繞石・長谷川零餘子など、それぞれ個性にしたがつて特色ある句を詠んだのである。卽ち高濱虛子は雜誌ホトトギスによつて大體子規の俳境を守り、河東碧梧桐は雜誌海紅によつて主觀的な立場から、新傾向を詠んで人の目を惹いたが、其の後、ホトトギス派からは、長谷川零餘子、海紅派からは中塚一碧樓があらはれ、また荻原井泉水は雜誌層雲を主宰しつゝ新俳句を唱道したのである。

二、國語學史

緒論

國語學史の意義　國語學史は、國語學の起原より現代に至る發達變遷の流れをきはめて、その歴史的展開の理法を攻究する所に意義がある。

本書の態度　本書に於ては、國語學の歴史的展開を考察する基礎研究として、大體、假名遣・てにをは・語源・辭書・文字・音韻・活用などを中心とし主なる國語學者の業蹟ならびに國語學書について概觀を試みようとするものである。

時代の區劃　時代の區劃は、普通の態度をとつて、今之を左の通りに分ける。

第一期　國語學の萠芽時代――國語學研究の初期より契冲出現まで凡そ七百年

第二期　國語學の勃興時代――契冲より宣長の歿年まで凡そ百六十年

第三期　國語學の完成時代――宣長の歿後より天保頃まで凡そ四十年

第四期　國語學の守成時代――天保頃より明治二十年頃まで凡そ五十年

第五期　明治以後

第一編　國語學の萠芽時代

第一期　國語學研究の初期より契沖出現まで（一五八五年―一三〇〇年）凡そ七百年

第一章　この時代の概觀

この時代の概觀　この時代は、單に作歌の栞としての國語の研究で、未だ眞に國語を對象として科學的に研究されたものではなかつた。當時の國語學者と見做される人々も、公卿雲客の貴族でその研究方法は秘密主義であり、研究の結果も獨斷的なのを免れなかつた。だから七百年の長年月の間にも、目覺ましい研究も出づ、假名遣、てにをは、音韻に關する研究も後世研究の萠芽にとゞまつたに過ぎない。

第二章　假名遣の研究

一、假名遣の三派　わが國の假名遣には、古來數種の學派があつて、德川時代の末、國學勃興の際に、はげしく爭つたが、今日尙充分な統一を見るに至らない難問題である。その重なる學派は大體左の三派とすることが出來る。

一、語勢的假名遣　即ち定家假名遣と稱するもの
二、歷史的假名遣　釋契沖及其派
三、音表的假名遣　上田秋成及其派

右のうち第一期を支配して居た假名遣は、勿論語勢的假名遣で、歌壇に於ける定家の勢力に對抗するものがなかつた樣に、之に對して異論をさしはさむものとてはなかつた。唯長慶天皇がその御著仙源抄の序に於て御異見を御もらし遊ばされたのみで、契沖の出現までは、語勢的假名遣即ち定家假名遣が一世を風靡してゐたのである。

次に本期に於ける主なる假名遣研究者ならびに、その著書について述べることにする。

二、源順の和名抄　和名抄（わみやうせう）は正しくは和名類聚鈔（わみやうるいじゅしょう）と云ひ村上帝の御代大中臣能宣等と勅を奉じて、後撰和歌集を撰し、梨壺五人と稱せられた源順（みなもとのしたがふ）の著と云はれる。その卷數二十で天地人物

草木等に細別し、萬葉假名を以て、和名を記したもので當時の物名は、この書によつて明かにすることを得、且つ歷史的假名遣の根據として、わが國に於ける假名遣に付て最初にその基礎を定めた千載不朽の書である。

三、悅目抄　悅目抄は、藤原基俊の著と稱せられるものであるが、詠歌上必要な假名遣及び假名の用法、詠歌の心得方則等を略述したものであつて、假名遣に付ての定說と認むべきものはないが、同音異事を區別して書くべき必要を說けるは注目すべきことである。

（今傳はつてゐる悅目抄は、後世假托の書であることは殆んど定說となつて居り、著者に付ても異論がある）

四、定家假名遣　歌道の權化、藤原定家は當時は勿論今日に至るまで我が國和歌道の典範として一世の崇敬の的となり、その假名遣もまた所謂定家假名遣と稱せられて、また異論をさしはさむことを許されなかつた位、世人の準據となつては居たが、その所論は極めて獨斷的であり、基礎も假名遣法として客觀性に乏しいものである。例へば「恐れ」の場合は「を」、「桶」の時は「お」であると斷定して其理由根據に付ては、何等の說明をして居らない。唯音の輕重、高低等によつて自己の主觀で決すると云ふ極めて科學的價値に乏しいものであつた。

五、定家假名遣に對する異說　定家假名遣一世を風靡した時、それに對して勇々しくも反對の說をなした者は必ずしも皆無ではなかつた。即ち第一は足利時代に於て權少僧都成俊が萬葉集の跋で假名遣は古代語を標準とすべき事を說き、かしこくも長慶天皇はその御著仙原抄の跋に於て定家假名遣の矛盾を御指摘あそばされて居られる。惜しいかな、定家萬能の時代のこと故、その反響は極めてかすかで世人を動かすことは出來なかつたが、後世に於ける歷史的假名遣の新聲として決して徒爾なるものではなかつた。

第三章　「てにをは」の研究

一、我が國語と「てにをは」　「てにをは」は即ち助辭であつて獨立しては、その意味をなさないものであるとされて居るが、元來は獨立の意味を有して居たのを國語の變遷の結果、全く他の語の附屬物となつてしまつた。しかし我が國語が所謂漆着けの語として獨特な優麗な調子を有して居るのは、この「てにをは」の御蔭である。

二、本期に於ける「てにをは」の研究　本期に於ける「てにをは」研究は、唯主として和歌上の慣習を研究したに過ぎない。從つてその研究も歌學の發達と共に起つたものであつて、藤原基俊頃からはじまつたと考ふべきである。

三、順德院八雲御抄　八雲御抄六卷は順德院の御撰で作歌上「てにをは」の必要なことを說いた書である

四、藤原定家の「てにをは」大概抄　藤原定家がその子爲家のために、注意すべき「てにをは」六百四十三字をあげて、その性質を分類したものである。

五、一條兼良　足利義政時代の人であつて、攝旣關白となり後、三宮に准ぜられた。文學を好み博覽多識、神佛兩道に通じ朝儀古典に明らかで、また和歌、連歌に巧みであつた。國語學上の著としては左の二著がある。

歌林良材集　二卷

秘傳天爾葉抄　十三卷

後者は姉小路家の相傳であつて世に姉小路式と稱するもので、その「てにをは」の分類も從前のものより精密で且つ組織的であるから、後世德川時代の國語學者富士谷成章、本居宣長、東條義門等の研究を大成せしむるに預つて力あり、またその及ぼした影響は、飛鳥井家和歌式、歌道秘藏錄の出現となつたことは注目すべき點である。

第四章　假名文字の起原

一、神代文字の存在說について　我が國の神代に文字があつたと云ふ說は、信を置くに足らない。若し數歩を讓つてあつたとしても、文化の發達した時代に及んで、實用に供せられなかつたのは勿論、比較的未開時代に於て、古代の傳說、和歌を傳ふるにも用ひられたことはない。だから我が國の書契時代は、矢張り漢文に端緒を開けるもので、神代文字と云はれる日文（ヒブミ）天名地鎭（アナイチ）、などの如きは信をおくに足らない。

二、假名文字の出現　かの漢文の傳來後、目に訴へる書寫の途は開けたが、結局他國の文字であるがため、自由にわが思想を發表するに不便であるのを痛感して、こゝに漢字をかりて國音をあらはし、久しくして字劃の繁雜不便からして義訓を交へ、假名を發明し、かの古事記、宣命、祝詞の體が出來たが、尙理想的國字たるにはあまりに距離があつたので、平安朝以前に於て一種の省略法が行はれてゐた事は、記紀萬葉に認めることが出來る。

かくの如くにして、瀨次省略の度を進めて、略々理想的境地に達したものが即ち片假名で、漢字を極端に和げくづしたものが平假名である。世上片假名は吉備眞備の作で、平假名は僧空海の手になつたものであると云ふが、當時の狀勢ならびに今日殘つた種々の假名より考察するに、平假名、片假名が各作者の獨創に成つたものであると云ふことは妥當ではない　諸說紛々たるものがあるが、吉備眞備が漸次に成形し來つた文字を、五十音圖に作製し、僧空海は平假名の製作者ではなく、集めて涅槃經下卷の諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅爲樂の四句を意譯せるものであらうと云ふのが、最も穩健な見方であると云はれるが、しかし五十音圖は何れも印度の悉曇（しつたん）に依つたものであると云ふことは辭まれない。たゞ悉曇渡來の年代が不明であつて、眞備の時に渡つて來て居たとの說もあり、空海が眞言宗を請來すると共に、傳へたるものであるとの說もあり、古來可成り異說が多いので將來學者の研究に俟つべきものである。

三、音韻　音韻は、悉曇傳來の時代の究明によつて、明らかになるのであるが、悉曇に關しては、空海の著書及び安然の悉曇藏がある。大學には音博士があり、後には僧侶も從前の吳音をやめて、漢音を練習することになつたが、未だ實用的練習の範圍を出でないものであつて、音韻學の研究としては見るべきものがなかつた。

第五章　第一期の辭書

一、辭書の分類　我が國に於ては辭書に付て一定の名稱がなく、字引、字典、辭典、辭書、節用、字類、字鏡と種々に云つて居るが、この期の辭書を大別して次の四種となる。

1、字　書

類聚名義抄、新撰字鏡、字鏡集

2、字書兼辭書

桑家漢語抄、和名抄、伊呂波字類抄、

3、辭　書

イ、普通一般の語を解釋したるもの、

第一期には見當らず。

ロ、或る限定された範圍の語を解釋したるもの、

袖中抄、壬塵抄、綺語抄、八雲御抄、歌林良材集、言塵集、歌林樸樕（かりんぼくそく）、

ハ、語源辭書、和句解、

4、節　用

撮壤集、節用集、饅頭屋節用集、運歩色葉集、

1の字書とは文字の音若しくは音訓を記したもの。

2の字書兼辭書とは、文字の音訓の外に解釋を加へたるもの。

3の辭書とは解釋を主として記したもの。

4の節用とは日常生活上必要なる言語、事物を解釋したるものである。

要するに、本朝には字書と云ふべきものは可成り多く見えるが、辭書と云ふべきものは、殆んど見ることが出來なかつたのである。

第二編　國語學勃興時代

第二期　契沖より宣長の歿年まで（一三〇〇年―一四六一年）凡そ百六十年

第一章　この時代の概觀

一、第二期の特色　第一期に於ける國語研究は、歌學研究の一手段たるに止まり、保守的獨斷的且つ實用的の產物であることを說いた、この第二期の學者も依然として歌學の一部として、修辭上の必要から研究するとの態度を免れなかつた。即ち富士谷成章の「脚結抄」の如き、本居宣長の「詞の玉緒」の如き、その引例の大部分は皆古歌であつたのを見てもその一般が知られるのである。たゞ平安朝以來の家元相傳の束縛も、德川家康が江戸幕府を開くに及んで努めて自由なる學術研究を奬勵し、舊來の因襲を一新することに意を致したため、國語學界に於ける保守的傾向は第一期に比較して、やゝ面目を改むるに至つたのは事實であつた。例へば前期に於て絕對不可侵とされた定家假名遣も今期に入つては、堂々反對說を提げて一新生面を開いたものも生ずるに至つたのである。釋契沖が歷史的假名遣を唱導して、定家假名遣を非難し二百年間歷史的假名遣の基礎を建てたのも、この時代に特筆すべきことであつた。次に此の期の特色として擧ぐべきは、文學史上平民文學の勃興を特筆すべきが如く、前期の貴族的なるに對して著しく平民的となり、公卿雲客にかぎられた前期の風潮は、商人醫家武人にもその研究者があらはれたことで、以上の二點は第一期と本期との主なる差異點であるといふことが出來る。

二、本期に於ける重なる著書　要するに本期の末葉になるに從つて、著しく自由研究の風を增し、國語學界は異常の活氣を呈して學術上の論爭盛んに起り、幾多貴重なる國語學上の著書を產み出した。

釋　契沖　和字正濫抄、
新井白石　東雅、同文通考、古史通、
僧　文雄　磨光韻鏡、
賀茂眞淵　語意考、
谷川士清　和訓栞、
富士谷成章　脚結抄、かざし抄、
本居宣長　紐鏡、詞の玉の緒、字音假字用格、御國詞活用抄、

以上の研究は、未だ粗漏を免かれないが、わが國語學の略々完成された第三期の基礎研究として、恰も室町文學が德川文學を豫想胚胎するが如く、國語學史上特筆大書すべき事である。

第二章　歴史的假名遣說

一、釋契沖の歴史的假名遣說　德川時代に於ける國語復興の先鋒として、また標準不確定な當時の假名遣を排して、歴史的假名遣の基礎を確立した國語學上の大恩人は、阿闍梨契沖其の人である。契沖以前の假名遣なるものは、定家假名遣の如き、何等客觀的標準もなき發音を以て其案を制定したものであつて、極めて根據の薄弱なるものであつた。故に足利時代に於て既に僧成俊は之に對して異論を說へ、假名遣は須らく古代に據らなければならないことを主張した。契沖は則ち此說を完成したのである。蓋し彼は萬葉代匠記を著はさんとして、古典古語の研究に沒頭し、それよりして、自然に古語の假名遣に一定の標準あることを發見し、遂に歴史的假名遣說を說ふるに至つたのである。彼の假名遣に關する意見は、その著萬葉集代匠記、和字正濫抄、和字正濫抄要略等に於て窺ふことが出來る

和字正濫抄にあらはれた彼の意見の概約をのぶれば、

定家假名遣は何等の根據なきものであるから、信ずるに足らない。假名遣は宜しく日本紀より三代實錄に至る國史及び古事記、萬葉集、新撰萬葉集、延喜式、和名抄その他古今集、諸家の家集等に材料を求めなければならぬ。

と、また更に發音の狀態を說き、假字についての研究を述べて、假名遣の根據材料を蒐集列擧したのである。かくの如くして、平安朝以來紛亂して居た假名遣の誤謬は訂正せられて後世に大なる裨益を與へた。たゞ萬全は何人にも期待すべくもなく、契沖の研究中にも阿行の「お」と、和行の「を」との所屬を誤つたことは千慮の一失と云ふべきである。

二、橘成員　契沖一度歴史的假名遣の說をなすや、之に反對をなすもの少くなかつたが、橘成員の如きは、その主なる者である。彼は和字古今通例全書八卷を出して契沖の說に反對した。即ち云ふ。

契沖は、上は六國史より萬葉集、古今集を典據として、假名遣の標準を定むべしと云ふが、わが古代に於ては、未だ假名遣法が確定せず　音訓の混用、或は、「た」、「お」、「ろ」、「え」等の假名の誤まれるものも少くないから根據とするに足らない。しかし古典の中には、採るべきものも無論あるから、これ等は適當に取捨選擇すべく、若し假名遣の確定せざる古代を標準とせば結局假名遣を認めざる事になる。

と論じ、更に假名遣は、平上去入の四聲によつて定まるべきで決して古典の材料のみを以て、動かすべからざる標準とするの不可なることを述べた。

三、契沖の反駁　契沖は之に對して、和字正濫要略二卷をあらはして、成員の所說に反駁を加へて居る。而して、彼は本書に於て正濫抄の缺漏を收拾し、假名遣に對する委しい考證をなして歴史的假名遣の基礎を確立したのである。

然しながら第二期のはじめには、定家假名遣が尙一大勢力を有して居り、從つて契沖の說に反對の氣勢を示すものが可成多く、貝原益軒は、和字解を著し、持明院基輔は、持明院假名遣を、服部吟照は、假名遣問答抄五卷を著して、夫々歷史的假名遣に反對したのであつた。

四、楫取魚彥　前述の如く定家假名遣派と、歷史的假名遣派とは論爭をつゞけて第二期國語學界を賑はしたが契沖歿後七十年楫取魚彥は古言梯一卷を著して、和字正濫抄の缺點を補修し、一千八百十三の古言、雅語をあつめて、いろは順に排列し、その出典を明らかにするに及んでその學界に貢獻する所極めて大きく、陸續として、古言梯の繼承者があらはれてその不備を補つた。例へば村田春海の假字拾要、足代弘訓の古言梯韻鏡對照等は皆然りであつて、こゝに於て歷史的假名遣派の勝利に歸したのであつた。

第三章　この期の「てにをは」研究

一、姉小路式の祖述者　第一期の姉小路式は、「てにをは」研究としては幼稚なものであつたが、その後世に及ぼした影響は實に大なるもので、本期にあらはれた有賀長伯の春樹顯秘增抄一冊は、細川幽齋の春樹顯秘抄の增補であり、和歌八重垣七卷は「や」、「ぞ」、「こそ」、「ぬ」、「か」、「かは」等を分類して用例を示し、且つ說明を加へたものであつて、共に姉小路式の祖述者とも云ふべく、また本居宣長の詞の玉緒の先聲をなしたものである。

二、富士谷成章　富士谷成章の脚結抄六卷は安永七年に出でたる、「てにをは」研究の名著で「てにをは」を、屬・家、倫、身、隊の五種に分類し考證歌を添えて、俚言を以て意義を解釋し、用法の時代によつて變化する事實を說明し、また語を、名・裝、かざし、あゆひの四品詞に分ちて、從前の研究の如き、單に「てにをは」の小範圍に止まらず科學的推究と豐富な引例は、實に驚歎に價するものであつて、和蘭文法輸入以前に於ける我が國人の研究としては、不滅の大功績と云はざるを得ない。唯、分類の餘りに緻密に過ぎると、用語のあまりに奇警なるとは二つの缺點である。なほこのほか彼の著に、挿頭抄三卷がある。彼が門人に口授したのを、門人が筆記編纂したる體裁なれど實は固陋なる堂上家の束縛を免るゝための方便に過ぎない。脚結抄に於て彼は、語を挿頭、裝、

名、脚結の四部に分類して研究したが、挿頭、卽ち「かざし」で、代名詞の一部、副詞、接續詞等を總括した名稱で、其研究は例證多く科學的分析的で、例によつて精細の研究は、脚結抄と共に敬服に堪へない次第である

三、本居宣長の國語學上の功績　國學の泰斗本居宣長は、國語學史上にも幾多感謝すべき研究を遺して居る。

第一に擧ぐべきは、明和八年に出せる、紐鏡であつて、この書は主として係結の呼應を作圖によつて證明したのである。そもこの係結に付ては、富士谷成章も、その著に少しく述べては居るが、未だ一法則を樹立する迄の研究には至らなかつた。しかるに宣長は呼應の法則を定め、先づ「係」を、一、「は」、「も」、二、「ぞ」、「の」、「や」、三、「こそ」の三種に分け、「係」に呼應する「結」の法則を立て、三轉四十三段にわけて「係」と「結」とが相應ずる狀態を作圖に依つて示したのである。但し何故にかくの如く呼應するかの理由に至つては觸るゝ所がなかつた。さればこの缺を補ふて自己の說を確立するために、詞の玉緒七卷を著はし八代集より豐富な材料を採錄して、やゝ科學的說明を試みて居るのは結構であるが、國語學の研究としては、和歌の範圍のみならず、廣く凡ての方面からも、その材料をとるべきを、當時に於ける一般國語學者の通弊に墮したことは、惜しむべきであつた。

第四章　貝原益軒と新井白石の語源研究

一、貝原益軒　貝原益軒は漢人劉熙の釋名に倣つて、日本釋名を著はし、天象、地節、地理、宮室等二十三種にわけて語源を解釋した。そして語源を解釋するにも獨斷をさけて一定の標準によるべきことを說いた。大體彼の研究方針は左の如きものである。

一、國語は恰も謎を解くが如きものであるが大體八つの部にわけることが出來る

二、古代は所謂倭語なので漢字はなかつた時代であるから、古語を以て字音を解き、近代の俗語を以て古語をとくのは何れも危險である。

三、解き難い語を强ひて解釋してはならぬ。

四、母語(例へば雲)を以て子語(くもる)を解くは誤りである。

五、古語を解くには、素直に解いて牽强附會におちいらぬこと

六、和語には同訓にして意の異るものがある。

七、和語には「筑波峰の嶺」、「二日の日」の如く語を重れたものがあるが必ずしも誤りではない。

八、清濁相通用したもの。

例、「くれはたおり」を「くれはどり」、「御岳」を「おだけ」等

九、字音轉じて和語となつたもの。

彼の研究の方針は、實に結構であるが、なほ常識を以て、言葉の意義を説明し、而してこの條件によつて、その語源を説明せんとした結果は種々の附會に陷つた。即ち意見そのものは卓見であつたが、研究の產物は結局松永貞德の和句解の範圍を、いくらも出でなかつたのである。

二、新井白石　新井白石は、もとより國語學を本領とするものではないが學識兼該にして見識一世に高く、その著述三百餘種の中、國語學に關するものに東音譜、東雅、同文通考、采覽異言、古史通等がある。

東雅　二十卷は彼が六十一歳の著で、物名卽ち名詞の研究であつた。從來の獨斷的研究を脫して歷史的語源研究としての開祖と云ふべきであつたが、惜しむらくは之を繼承して完成せしむる後進がなかつた。彼の語學上の意見を左に列記する。

一、凡そ言語は夫々、時間的にも差異があり、空間的にも雜多な差異を生じて、後世になつて之を研究解釋することは至難な事であるが、我が國の古語には幸ひ先哲の解釋したものがある。故に之によつて意義を解釋し、更に類推して他語に及ぼし、尙解釋し難きものは、强ひて解釋するを要しない。

二、我が國の古今の言語に通達するには各時代の言語狀態を研究しなければならぬ

三、また古今の言語を研究するには、音韻學の力に俟たればならぬ

四、我が　の言語の、印度、西洋の言語に比して聲音の少きことを論じ、漢字固有の音の轉じて獨特の和訓となりしは、漢字の有する聲音のなき所から已むを得ず轉じたるものである。

東音譜は五十音を子音、長母音、重母音、撥音にわけて、綴方を説明した彼の音韻研究の書である。

三、多田義俊の音義的語源說　多田義俊は伊呂波聲母傳一卷を著はして、「いろは」の各字に特種の音義があると云ふ前提のもとに、音義の上から語源を解釋せんとする音義的語源說を唱道した。

例へば、

語頭に「い」の字を有する語は息に關係ある意義を有つて居る。

いのち　これは命、「息の內」と云ふ意味の語。

いそぐ　息を數多くつく意味から出た語。

いや　息やむの略語。

いたむ　命にかゝる語。

聲母傳は、義俊の創見でないと云はれるが、後に橘守部がこれを承述して世に行はれたのである。

第五章　谷川士清と村田了阿

一、谷川士清の和訓の栞　第二期の辭書として、國語學史上最も光彩を放てるものは士清の和訓の栞三篇である。前篇は四十五卷中卷は三十卷後篇は十八卷よりなり、前篇一卷より十三卷迄は安永六年に出版され後篇十八卷は、實に明治十八年に出卷されたのである。從前でも字鏡集、類聚名義抄の如く、字音又は和訓を集め簡單な註釋を加へたもの、或は日本釋名、東雅の如く語源を解釋したもの、或は八雲御抄、言塵集、歌林樸樕の如く雅言を解釋したものはあつたが、辭書としての條件を具ふるものではなかつた。しかるに和訓の栞はこの點に於て語彙を廣く古書よりとつて、從來の如く名詞のみに限らず、動詞は勿論俗語に至るまで精細且つ信ずべき根據のもとに解釋した略々、完成せる辭書であつて、石川雅望の雅言集覽とともに德川時代の二大辭書と云ふべきである但し士清の語學上の學說は、大體契沖、白石、眞淵、宣長等の說をとり、創見は少いと云はれる。

二、村田了阿　村田了阿には俚言集覽の著がある。其名の如く鄙俗を先とし、雅訓を後にし現代を主とし、上古を從とし、集中江戸の語が十中の八九を含むと云はれる辭書である。

第六章　文字の研究

本期に於ける文學の研究者は多數あらはれたが、第一は契沖が和字正濫抄に於て片假名、平假名の字體の起原に付て論じて居るのを始めとして新井白石の同文通考をあげねばならない。

一、新井白石の同文通考　白石は同文通考を著はして文字研究の說をなし、神代文學の有無に付ては先人の說を綜合して之を批評し、片假名の製作者に付ては、卜部兼俱の說をとつて吉備眞備、平假名の製作者は一條兼良の說に從つて空海なりとした。後、釋日本紀の說を見て前說を改め、字體は空海以前より行はれ、空海はたゞ四十七字の配列をなしたに過ぎないと述べた。兎に角、文字全體に付ての研究をなし、統一されたる點に於て後世にも之に及ぶものはない。文字研究家としても白石は、斯界の一人者であることは我等の驚歎に堪へない次第である。

同文通考のほか、文字研究としては神道家跡部光海が、和字傳來考一卷を著はして神代文字存在說を唱へたが空想的であつて、附會の說が多く信賴するに足るものではない。

第七章　士清と眞淵の活用研究

一、谷川士清の日本紀通證　我が國の國語研究に於て、假名遣、「てにをは」の研究は比較的早くから起つたが、語の活用に關する研究は遙かに後世であつて、今迄の假名遣の範圍を離れ國語に語尾變化と云ふ靈妙の活きがあると云ふことを自覺して、この變化を五十音圖に配當して活用圖を作つたのは谷川士清（たにかはことすが）で、その著日本書紀通證三十五卷の中でその事を說明して居る。

二、賀茂眞淵の語意考　谷川士清の日本書紀通證が出てから二十年程經つて、賀茂眞淵は語意考を著はして、動詞の活用を五十音圖に配當し、第一音を初、第二音を懷、第三音を用、第四音を令、第五音を助と名付けて活用を說明した。かくの如く眞淵は動詞の活用に一つの法則のあることを發見して、五十音に配當して活用圖を作つたが未だ幼稚なものであつて、活用に四段二段一段等の差違あることをすら知らず、第五音を活用圖に配當した點や、「坐す」、「植る」などを和行四段に活用したのは甚しき誤謬と云ふべきである。

三、本居宣長の御國詞活用抄　眞抄の語意考についで、あらはれたのが宣長の御國詞活用抄であつて、動詞、形容詞の活用を二十七に分類し、それ〴〵同類の雅言俗語を集めたが、四段二段等は未だ區別するに至らなかつた。

四、本居春庭の詞の八衢　父宣長の說を承けて更にその研究を大成したのは本居春庭（はるには）であつて、これは次の第三期に於て述ぶるが順序であるが、便宜上、こゝに述べることにする。彼はその著詞の八衢二卷に於て、活用語を二十七に分類し、活用に從つて夫々一定の名稱を附した。彼の活用分類中、上下一段を同所におき、加行變格、佐行變格を同所にし、奈行變格を上二段と同列になし、「在」、「居」、「侍」の良行變格を四段活用に置きたる等は、今日の文法眼からは雜駁の譏を免れないが、當時にありては勝れたる見識と云はねばならない。

第八章　音韻に關する諸研究

一、音韻研究の諸書　第一期には僅かに韻鏡の流通と、眞言僧侶の悉曇研究に過ぎなかつた音韻研究も、本期に於ては、契沖の和字正濫抄を筆頭に、白石の東音譜、釋文雄の磨光韻鏡、和字大觀抄、眞淵の語意考、宣長の字音假名用格などが續々としてあらはれた。

今各學者の音韻に關する諸說を略述しよう。

二、契沖の音韻說　和字正濫抄にあらはれた契沖の音韻說は、その師覺彥の悉曇三密抄に得たるものを基礎として、音發生の狀態をのべて、人の音聲のみならず、風聲水流の如き非情の聲も、すべて五十音に抱含せらるゝことを論じ、次ぎには文字と聲音との關係を論じ、文字の特質を述べ、悉曇に從つて我が國の假名を母音子音に分け、母子兩音を配合して五十音圖を作つた。

三、釋文雄の磨光韻鏡　音韻研究の權威、釋文雄の最も代表的著作は磨光韻鏡二卷である。さきに韻鏡一度後奈良天皇の時に開版せられて以來、これが研究に志すもの漸次多きを加へ、慶長、安永頃最も隆盛を極め、之に付ての註釋も二十餘種の多きに及んだ。しかし韻鏡の流行は、唯反切の目的に使用したのであつたが、釋文雄は我が國の漢吳音に訛の多きを知つて、進んで字音の正否を鑑定すると云ふ韻鏡の眞精神に沿ふて、之を整理研究したのである。即ちその研究の特色を擧げると左の通りである。

一、漢吳音の三音を假名にて表はしたること。

二、各音に輕重の區別あることを論じたること等。

要するに文雄の研究は、幼稚な前代の音韻學者に立勝ること數等であつて、彼の研究が眞淵、士清等の後進學者に及ぼした影響は、非常に大であつたと云はねばならない。

四、眞淵の音韻說　賀茂眞淵の音韻論は、彼の語意考によつて窺ふことが出來る。即ち彼はこの書に於て、極力倭語の優美な事を力說し、假名遣は四聲によつて變化されざること及び古代の假名遣は最も正確であつて模範とするに足ることを論じ、最後に延言、約言、略言について說明して、我が國の語は、二語を約めて一語となり、一語をのべて二語としたものであるから、支那の反切のみを以て國語を說明し終ることは不可能であると斷じた。

五、宣長の音韻論　宣長の音韻說は、徒の著である字音假字用格について見ることが出來るが、この書は「む」と「ぬ」の區別を無視したり、或はまた、我が國は國體が優美であるから、國語も優美であると國語を賞揚し、外國語は鳥獸缺舌の聲であるといふて排斥したのは、然ゆるが如き彼が愛國心の發露であるとは云へ、矢張り獨斷的空想論の譏は免れなかつた。故に白井寬蔭は、音韻假字用例を著はして宣長を攻擊し彼の意見を覆したのであつた。唯、鎌倉時代以後より亂れはじめ足利德川時代を通じて誤りつゞけ、契沖、白石、益軒、士清、眞淵等さへも誤つて居た、「於」、「乎」の

所屬を正し、語學上の疑問を除いたことは、宣長の一大功績であつて、字音假字用格の一書が永久に存在の價値ある所以である。

尙、宣長は、漢字三音考一卷の序論に於て、倭語と、漢語その他の外國語との優劣を論じ、外國語の不正鄙俚の音であること、國語の純粹正雅であることを述べ、次ぎに漢音、吳音、唐音傳來の時期、使用の前後及び變遷、轉訛、國語との混用等につきて、論述し最後に音便に付ても豐富な材料を蒐集して從前の說を、整理完成した。

第九章　伊勢貞丈の著書其他

一、伊勢貞丈の貞丈雜記　有名なる貞丈雜記及び安齋叢書は、共に貞丈の著であつて、神代文字漢音吳音、假名遣等に關する彼の意見をのべ、尙從前の學者の未開の天地である俗語の語源研究をなして一新生面を開拓したものである。

二、宣長の古事記傳ほか二書　宣長の古事記傳は、千古不朽の著作として、何人も知らないものがない。本書は彼が三十五年間苦心の結晶であるが、この古事記研究の結果、彼は左の如き假名用法の意見を、その總論に於てのべてゐる。

一、神代文學は後人の僞作なること。

二、古事記に於ては、假名の用法最も正確であつて清濁の區別を正しくして、訓を用ひたヶ所なく音は全部吳音を採つた。

三、一字を三音、四音に通用したるヶ所なし。

四、同音にても、言葉に從つて使用した文字の異ること。

例へば、「ひ」には「比」、「肥」の二字を用ひて、火の場合には「肥」、ひの場合には「斐」を區別し使用したこと。

五、天暦以前は語と音との差異が明瞭であつて誤りなく、後世の人が古代を推して語と音と差別なく、書く場合に於てのみ假名を用ひ分けたと云ふのは、大なる誤りである。

第三編　國語學完成の時代

第三期　宣長の歿後より天保頃まで（二四六一年―二五〇〇年）凡そ四十年

第一章　この時代の概概

一、第三期の特色　第一期の國語學は、飽迄も歌學研究が主であつて、國語學はその研究の方便であつた。第二期に於ては稍々對立的に研究されて來たが、未だ全く歌學の從屬から脱せず、例へば契沖を除く、荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長の如きは國學者であり、北村季吟、伊勢貞丈の如きは考證家であり、貝原益軒、新井白石の如きは經濟學者であつた。彼等の國語學界に瘁した功績は偉大であつたが、國語學は少くも彼等の本領ではなかつた。然るに第三期になつてからは本居春庭、東條義門、村田春海　鈴木朖の如き、殆んど自家の立場に拘はることなく、科學的に國語學を研究して、可成論理的に之を發表し、立派に國語學者としての位置を把持し、前期學者の缺漏を補正し、豐富な材料を集めて我が國語學をして略々完成の域にまで到らしめて居る。就中、本居春庭、東條義門はその錚々たるものである。

二、本期に於ける重なる著書

詞の通路　詞の八衢　本居春庭
山口栄
活話指南
活語雑話　東條義門
於乎輕重義
男信
雅語音聲考　鈴木朗
言語四種論
神字日文傳　平田篤胤
假字本末　伴信友
雅言集覽　石川雅望

第二章　上田秋成と村田春海の假名遣說

一、歴史的假名遣說の確立　釋契沖さきに歴史的假名遣の新說を唱道するや、これに反對するもの多く、就中定家假名遣の歸依者たる橘成員、服部吟照等のはげしき攻擊を受けたるにも屈せず、堂々自說を開陳したが、後、楫取魚彦古言梯をあらはして、和字正濫抄を補正し、また賀茂眞淵・本居宣長等古語の尊むべきを力說したので、歴史的假名遣の說は、こゝに確乎たる地歩を占むるに至つた。

二、上田秋成の假名遣說　上田秋成は德川時代中葉に於ける國學者文章家として夙に世に喧傳されて居る。性扁狹狷介で世人と合はず、獨り京都南禪寺に閑居して茶技を好み、歌文を樂しみ悠々自適の生を送つた。雨月物語は艶麗幽雅の筆致に富んで文學史上その名高く、國語學上の著としては、有名なる靈語通一卷は、秋成の假名遣論を見るべきもので、もと神名、國號、名物、詠歌、用語、假字の六篇であつたと云はれるが、殘存のものは假字篇のみである。彼の假名遣上の意見は全然契沖とその見解を異にし、假名遣と稱するが如き法則の存在を認めず、假名遣に付ては全く自由な取扱で可なりと云ふ意見である。彼は、假名遣法の成立を說明して曰く、

我が國に於て使用する字音は、漢音吳音であるが、百濟に於て一變して輸入されたものである。我が國の音は輕くして、清澄であるが百濟の人の音は重く濁つてゐる。故に百濟の學者は「い」を「ひ」、「は」を「わ」と云ふ如く發音して、この發音通りに字を裏はして、我が國人に敎へたから我が國の人々は、栗を「あわ」と發音しつゝ文字には「あは」と記す習慣になつたのである。かく文字と發音との不一致は、全く百濟人の固有の發音と我が國人固有の發音の差異より生じて、遂に一つの法則が成立するに至つたのである。方則は人爲的約束であつて各國夫々固有の風によつて設けたものに過ぎないから、一國の法則を以て他國を律するは不合理である。されば契沖が國學を興してより古代の假名遣を遵奉し、之を以て古言を解釋せんとするは、誠に危險である。

と述べて居る。秋成の假名遣に關する考は卓見多しと雖、附會の點も亦免れない。

三、村田春海　村田春海の假字大意抄一卷は、彼の假名遣研究をのべたもので本書に於て彼は、わが國の假名遣は天曆以前最も正しく、字音は唐以前のものをとるべき事を論じ、假名遣は必ず歷史的假名遣でなければならぬと論して契沖、魚彥等の主義を裏書して居る。

この他、春海の著に五十音辨語一卷があつて音韻研究を示して居る。彼は曰ふ、

古言の意義を五十音圖によつて解釋することは、昔よりあつたことで顯昭、仙覺をはじめ、契沖、春滿、眞淵もその一人である。しかしながら之を應用するには、それ〴〵一定の法式によるべく亂用すべからざるものである　妄りに應用するは、わが師の本位にあらず、すべて古言を解釋するには古書を蒐集して例を推し類を考究するが最も良策である。つぎにまた五十音圖は印度から支那にわたり、それより我が國に渡來したものである。

と、彼はまた「於」「乎」「衣」「惠」等の所屬の誤りを解いた。

琴後集も彼の國語學上の意見を見ることが出來る。

第三章　「てにをは」研究

一、この期に於ける「てにをは」研究　第三期に於ける國語學界の特色としては、歴史的假名遣の基礎が確立し、學者にして異議を狹むものは殆んどなく、また「てにをは」に於ても前學者の説を訂正增補し一新旗幟を立つる者はなかつた。隨つて、「てにをは」に關する著書も少く、橘守部の助辭本義一覽、東條義門の玉の緒繰分、など數種に過ぎなかつた。即ち「てにをは」研究は先輩富士谷成章、本居宣長の二人に依つて大成せられ、研究の餘地を殆んど見出さなかつたからである。之に反して動詞の研究は、この時代に於て猛烈なる勢をもつて研究の對象とせられた。

二、東條義門の「てにをは」研究　この時代の「てにをは」研究の代表的なものは、義門の友鏡一卷と玉の緒くりわけ五卷とである。友鏡は宣長の紐鏡を補正し、紐鏡の三轉四十三段の分類を五轉十九類五十二段に分類し、各轉に將然言、連用言、截斷言、連體言、已然言の名稱を與へた。所謂動詞の法とて、現今でも用ひられる所のものは、實に義門その人が開祖である。

玉の緒くりわけ　は單に玉の緒の誤謬を補正しただけで、研究上の創見は少しもないのであつて、ただ言語の分類に於て、言語を體用に二大別し、「體」を有形無形の二種に、「用」を形狀言、作用言の二種に分ち、更に形狀言を四種に、作用言を三十五種に細別した。

三、橘守部の助辭本義一覽　橘守部は、曩に助辭本義考七卷を著はし詞の玉緒の誤謬を指摘論難したが、助辭本義一覽は、その書中音義に關するもののみを拔萃したもので上卷は「係」を指辭と名付けて説明し、下卷は「結」を受辭と名付けて説明し、凡ての助辭を意義上から説明せんとしたものである。然しながら凡ての語源を意義一方のみよりして解釋せんとすることは不可能であると云はねばならない。

要するに第三期の「てにをは」研究は、詞の玉の緒を研究の對象としたもので、何れも玉の緒より進んで新生面を説ける學説はなく、今日に於ても尙然りであることを思へば玉の緒の價値また偉なりとしなければならない。

蓋し「てにをは」研究の二大勢力は、前に姉小路式派あり後に玉の緒派あり、しかして姉小路式派は、歌人に傳統的に遵奉せられ、玉の緒派は廣く一般世間に行はれて、その勢力實に大なるものがあると云ふべきである。

第四章　大石千引と鈴木朖の語源研究

一、この時代の語原研究　凡そ語源を研究せんとするには、先づ音韻學の智識を有して、言語の系統的變化即ち一つの言語につきて云ふときは、この言語は何時代には如何なる體形を有して、如何なる意義に使用せられ、次の時代には如何に變化したかを正確に知り、言語の構造組織を明らかにし外國語か自國語かを分明にして、最後にその語源の解釋に向はねばならない。然るに從前の語源研究は何れも、如上の要件を缺き、常識的標準を以て語源を解釋せんとしたから大なる進歩を見ることが出來なかつた。白石、眞淵、宣長は稍々歴史的科學的に研究したが、他は皆獨斷的常識派と云ふべきで一般に科學的研究の要素が缺乏して居つた。

二、大石千引の語原說　大石千引は言元梯一卷を著はして、「給ふ」と云ふのは手間觸(タマブ)の義、「蒔く」は間配(マクバ)の義、艶(ミヤビ)は京風俗の義であると云ふ如く、五十音順にあらゆる國語の成立を說明をなしたが獨斷的で價値に乏しい。

三、鈴木朖の寫聲的起原說　鈴木朖(あきら)はその著、雅語音聲考一卷に於て言語の起原を說明して、言語は音聲である。音聲には形、姿、意の三要素があつて、言語の中には音聲を以て事物を象り寫したものが多數ある。そしてかゝる種類の言語を分つて左の四種にすると述べて居る。

一、鳥獸の聲を寫したもの。
二、人の聲を寫したもの。
三、萬物の聲を寫したもの。
四、萬物の形、有樣、心意、動靜を寫したもの。

結局彼は言語の根源は音聲であることを論じ、所謂寫聲的起原說を主張したのである。

第五章　石川雅望の雅言集覽

一、この期にあらはれた辭書　この期に於ける重なるものは、德川時代の二大辭書の一と稱せらるゝ石川雅望の雅言集覽を始めとし、清水濱臣の語林類葉、富士谷御杖の詞葉新雅・狩谷掖齊の箋註和名類聚抄等があらはれた。

二、石川雅望の雅言集覽　石川雅望は江戸の人、狂號を宿屋飯盛と云ひ狂詩狂文をもつて有名であつて著書も非常に多いが、國語學に關するものとしては、雅言集覽が最も名高く、和訓の栞と共に、德川時代の二大辭書であると云ふことは、既に前に述べた通りである。

雅言集覽は、和訓の栞が、廣く俗語までも蒐集して居るのと異つて、主として古代の雅言を收めたことは、辭書として和訓の栞に遜色なしとしないが、その材料を廣く歌書文學書より豐富に蒐集して一々その出典を明らかに示して居ることは、敬服に堪へない。缺點としては、解釋の精細ならぬことと、蒐集の言語範圍を局限して、雅言のみをとつたと云ふことゝである。就や、言語を雅俗に別けると云ふことは、甚だ漠然たるものであつて、その區別の標準を求むるに困難なるおやである。

當時一般の國語學者が、言語の雅俗を區別する標準を推測するに、比較的古代の語即ち平安朝以前の言語を雅なりとすると、今一つは著名な文學者に使用せられた言語は、凡べて雅言であると云ふ見解は、果して妥當と云ふべきであらうか、この點に於て雅望も言語の構造、組織等の客觀的標準によらず、言語の雅俗を分けたと云ふ非難を免れない。尙この私見よりして辭書に採錄すべき言語の一方に扁したと云ふことは、和訓の栞に遠く及ばないと云はれても亦已むを得ないのである。

今日普通世に行はれてゐる雅言集覽の流布本は、中島廣足が增補した增補雅言集覽五十七卷である。

三、その他の辭書

雅語譯解　八卷

鈴木朖が雅語を集めて俗語の註釋を加へたものである。

詞言通載抄　四卷

國語學者城戸千楯が言語を挿頭、裝、脚結の三部に分けて更に十音順にしたものである。

第六章　伴信友の文學研究

一、徳川時代に於ける文字研究の諸問題　徳川時代に於ける文字研究の問題は、大體左の範圍である。

一、神代文字の有無
二、假名文字の作者。
三、假名文字の字體及び淵源。
四、伊呂波歌の作者。

文字研究は、前期に於て最も隆盛の觀があつたが、本期に於ては、僅かに伴信友の假字本末、平田篤胤の神字日文傳等に過ぎず。量に於て貧弱を免れないが、その質に於ては誠に立派であつて、とりわけ信友の假字本末は最も代表的の研究と云ふべきである。

二、伴信友の文字研究　伴信友は考證の大權威として、名一世に高く、その著書また尠しとしないが、假字本末附錄とも四卷をあらはして、草假名、片假名の起原及び假名をはじめて使用したる時代、書籍、神代文字の有無等を詳細に考證したのである。本書は同文通考よりも更に一段の價値あるものであるが、共に文字研究の二大名著と云ふことが出來る。

今この書にあらはれた彼の文字研究の概約を述べることにする。

1、草假名の起原

信友は古語拾遺の說に遵つて、我が國の古代には、文字が存在せず漢字の輸入せらるゝに至つて、漢字を以て用を足したが、歌、祝詞、宣命は字音を借り用ゐ、稀には訓を混用したものもあつた。これ卽ち假名であつて、假名には眞字と假字とがある。しかして歌は詠ずる必要より一語の誤りもなからしむるため、音假字を記す習慣であつた、しかるに之等の歌を書きあらはすに、眞字では煩冗なるを以て、自然草體になり、遂に一種の字形を生ずるに至つた。

この草假名は、延曆年間より用ゐられたが、その字體は、區々で統一するに至らなかつたのを空海が草體を根據とし、一層簡略に改めて四十七字體を決定し佛意を偶して、伊呂波歌を作つたのであると考證しだ。つぎには、假名をもつて散文を記したのは、仁明天皇以前からであつて、草假名を用ゐて婦人が書籍を記述するに至つたのは、嵯峨天皇の御代で伊呂波手習は、延喜より遙かに後世のことであると考證した。

2、片假名の起原

片假名の起原に付ては、天平勝寶年中吉備眞備が片假名を製作し、五十音圖中本音は四十五字であつたのを、空海が「圖」、「於」の二音を增加し四十七字となしたと云ふことの信なるべきことを說き、吉備公以前は「圖」「於」の區別が明らかであつたのを、悉曇の法則によつて五十音圖を製作したため、區別が不明瞭となり音圖に入れなかつた。しかるに空海が之を補正して、漸く音圖は整つたが、それは橫列の順序が不整であつた。しかして後世稍々考證考究の結果、今日の樣になつたのであると述べて居る。

次に眞備の片假名製作は、支那の例に倣つて極めて簡單であつたため、廣く世に行はれ、片假名の古書に見えたのは延喜時代に出た堤中納言物語をはじめとするが故に、片假名は、その以前から男女に用ゐられたのであらうと述べた。

3、神代文字非存在說

彼は本書の附錄に於て神代文字の有無に付て論じ元來神字として世に行はるゝものは、龜卜に附會した僞作であつて信ずべきものではないと、彼の初說たる存在說を否定して神代文字非存在說を述べてゐる。

第七章　本居春庭と東條義門の活用研究

一、本期の活用研究　前述の通り、第二期迄の國語學研究は、主として假名遣若しくは「てにをは」の研究が大部分であつて第二期の末に、谷川士清、賀茂眞淵等が活用を五十音圖に配列し、本居宣長、富士谷成章は動詞及び形容詞の研究をして居るが、なほ幼稚であつて活用研究の搖籃時代に過ぎなかつた。しかるに本期に於ては、本居春庭、東條義門、鈴木朗を先頭として活用研究に眞摯なる研究の歩武を進め　殆んど大成をなしたるが如き觀がある。

二、本居春庭の語學上の功績

1、詞の八衢（ことはのやちまた）　二は春庭（はるには）の活用研究の書で、父宣長は御國詞活用抄に於て動詞、形容詞活用の法則をたてたが、未だ活用を分類するに至らなかつたのを、この書によつて活用形を四種に分類して活用の規則を確定した。活用には種々の形式があるが其中で四種の活用、即ち四段活用、一段活用、中二段の活用、下二段の活用に屬するものが最も多く、次には、「し」「しき」、活用に屬するものが多く、他の活用は、これ等に比し僅かであると述べた。春庭がかくの如く、活用を四種に分類して、名稱を附した事は、國語學史上特筆すべきことであつて今日の學者の研究も大體之を襲用して居るに過ぎないのである。

なほこの八衢には、動詞と助動詞及び「てにをは」の連續についての研究があるが、以前には全く研究され

なかつた新研究と云ふべきである。其他活用に付ては種々の意見があるが、阿加佐多以下十行に活く各段の動詞を擧げて出所ならびに、かくの如く活くべき理由を詳細に論述してあつて、この點他に卓越した本書の價値と云ふべきである。たゞ形容詞に關する研究の見當らないのは、一人に萬全を期するは酷であらうが、遺憾と云はればならない。

次には春庭の動詞の自他に關する研究を見るべき、詞の通路をあげねばならない。

2、詞の通路　三卷は、春庭が動詞の自他に關する意見を述べた書であつて、この書以前から連歌の上にては自他の研究及び名目はあつたが、それは未だ組織立つたものではなかつた。しかるに春庭は可成まとまつた系統的なものとして說か述べて居る。即ち彼は自他の形式を次の六種に分類した。

一、自ら然する、　自ら然るる、
　　聞ゆる　　驚く、
二、物を然する、
　　聞く、　　驚かす
三、他に然する、
　　聞かする、
四、他に然さする、
　　聞えさする、
五、自ら然せらるゝ、
　　聞かるる、　　驚かるる、
六、他に然せらるる、
　　聞かさるる、　驚かさる、

六種の語の中で、一、二は四種の活用が混してゐて一定して居ない。第三は多く佐行下二段活用の語が多いが稀に他の活用のものもある。第四は佐行下二段に限り、第五、第六はヲ行下二段に限ると述べて居る。

三、東條義門の山口栞其他　さきに、「てにをは」研究者としての義門の著書ならびにその學說をのべたが、今また活用研究の大立物として彼の偉功を敍さなければならない。

彼は本居父子の學說を補正統合して動詞、形容詞の研究を大成し、國語の法則を確立したのであつて、今日の文典と雖、彼の研究より幾歩も出て居ないのを看ても如何に彼の研究の貴重なるかゞ了得されるのである。その著眞宗聖教和語五卷は、聖教の語及び言葉遣等に付て、古來學者の缺陷を指摘して自己の見解をのべ、しかして聖教和語說の圖即ち和語說略圖を作つた。また活語指南二卷は、和語說略圖の詳細な解釋を試みたもので、略圖に用ゐた將然、連用、截斷、連體、已然、希求の名稱を說明し、語の活くと、活かぬと云ふことについて解釋を與へて居る。更に四十九種の活用言を、將然、連用、截斷、連體、已然、希求に分けて說明し、證歌の意味をも解釋して居る。而して書中、八衢の說に對し二三の異說を試みて居る。

次に彼の代表的研究である山口栞三卷に付て述べる時が來た。

四、山口栞　山口栞は、義門が天保七年の著にして、主として活用に關する研究が記されてある。本居宣長、その子春庭等が動詞の活用について研究し、未だ曾て形容詞に活用のあることを知らなかつたのを、彼は、この形容詞の活用形を研究整頓してこの書によつて發表した事は、非常な卓見と云はねばならない。本書上卷には、語の音聲が轉訛するに三種の區別があることを述べて居る。

一、用言がその活きによつて色々に變化する。

二、體言が結合するときに自ら音聲が次の如く變化する。

イ、第四音の第一音に轉ずるもの

竹――たか
菅――すが
風――かざ

ロ、第二音の第五音に轉ずるもの、

樹蔭
火串
荷前

ハ、第二音の第三音に轉ずるもの、

月夜

神風

ニ、第五音の第一音に轉ずるもの

白――しら
之――な

ホ、第三音の第五音に轉ずるもの、

眉――まよ

三、用言、體言共に一定の法則なく、唇舌牙齒喉の五音又は「阿」「伊」「宇」「江」「於」の五韻が互に通ずるものである。

と、かく常に誤り易き活用、加行及び佐行の活用に付ての研究で、中卷には、「多」「奈」「波」「麻」「也」「羅」「和」各行の活用についての研究を、また下卷には前記の如く脚結抄、御國詞活用抄、詞の八衢等、從前學者の殆んど手をつけない形容詞に付て深く研究をなして整頓したのである。

なほこのほか活語雜話三卷及び活語餘論三卷の二書があつて、前者は矢張り彼が活用についての研究を集めたもので、國語學上の貴重な材料を藏して居り、後者即ち活語餘論は、義門が國語學上の隨感隨想を書きつけたものである。

五、鬼島廣蔭の詞の玉橋　鬼島廣蔭の詞の玉橋二卷は、彼の活用研究を親ふべき書であつて、彼は言語を言、詞、辭に三大別し、言を五種、詞を六種、辭を五種に分つてその說をのべた。彼の著

は近代語學者に對して大なる影響を與へ、現今の文典中にも廣蔭の所說をとれるものがある。

六、鈴木朗の活語研究　活語斷續譜一卷は鈴木朗の活語研究を發表せる書で、彼は宣長の御國詞活用抄、春庭の詞の八衢、義門の和語說略圖等を根據として自說を立て、四段、下二段、中二段、一段、變格、志幾久活等に屬する語を二十八に配列し、その活用を七段に分け各段を接續する「てにをは」を明かならしめたものである。

七、海野幸典の語根語尾說　海野幸典は天言活用安良麻之を著はして、活用に關する自家の說を述べてゐるが、天言とは上にあつて動かぬ詞をいひ、活用とは天言の下について動きはたらく詞を云ふとて、語を天言と活用とに分けた。天言は今日の「語根」であり活用は今の「語尾」に相當する。動詞、形容詞を語根と語尾とに分けることは、富士谷成章已に說をなしてゐるが、兎に角活語研究上一歩を進めたものであると云ふべきである。

第八章　音韻の研究

一、本期にあらはれた音韻研究の特色　從前の我が國語學の發達が常識的であり、科學的でなかつたのは、國語研究に從事したる學者の大多數が神道家、國學者乃至宗宗教家であつたため、自家の說を打たてるための方便として國語を研究する傾向があつたので國體に附會したり、其他種々自說に都合のよい曲解をなして、獨斷的結果に墮つたと云ふ事が、重要な一原因であると觀察されるが、また一方に於て基礎科學の幼稚空疎であつたことも其重大な原因であつたと思はれる。

例へば音韻學を研究するには生理學、音響學、言語學の智識が根底に必要なるに拘らず、當時に於ける音韻研究者は、果してこの方面の基礎的知識が如何なる程度まで用意されて居たらうか。たゞ常識を唯一の標準として進んだ結果は、彼の五十音圖の研究などが極めて杜撰なものであつたと云ふことも、蓋し當然のことと思はれる。第二期に於て釋文雄が磨光韻鏡をあらはし、本居宣長が漢字三音考や字音假字用格をあらはし、賀茂眞淵が語意考を出すに至つて、音韻研究は漸く曙光を認むるに至つたが、尙前期の餘弊をうけた夫等には少からぬ缺點があつた。しかるに第三期になつてからは、以前の缺點曲解も研究の進歩と共に餘程減殺されて、その進境見るべきものがあつた。

主なる人々の研究には、前にのべた村田春海の五十音辨語一卷があり、國學者平田篤胤には古史

本辭經があり、東條義門には奈萬之奈一卷と於乎輕重義二卷とがあり、橘守部には五十音小說一卷かあり、それから太田全齋の漢吳音圖も見のがす能はざる研究である。村田春海の五十音辨語については已に第二章で述べたから直ちに、篤胤の音韻研究について述べる。

二、平田篤胤の古史本辭經　熱烈な神道家である平田篤胤は、古史本辭經四卷を著はして、五十音圖の沿革に付いて漢字三音考の說を引用し、五十音は天地自然の音であつて出來あがつたのは應神天皇の御宇で、作者は勿論日本人であると斷定した。また五十音圖の活用に付ては、語意考の初、體、用、令、助の分け方に從つて活用を說明した。彼の研究は語意考以上に何等の進步もなく、且つ五十音圖の組織を說明するに天地開闢說に附會したなぞは、學者の態度を失つて一神道家たる彼の面目を曝露して居るものと云ふべきである。

三、義門の音韻研究書　東條義門の旺盛な學究心は、音韻研究にもそのあらはれを見ることが出來るのであつて、奈萬之奈一卷では主として、「む」と「ん」との區別を認めなかつた本居宣長の說を否定し、古代に於ては撥音の場合の「む」と「ん」とは確然たる區別が存在して居たのであると云ふことをのべ、また於乎輕重義二卷では、本居宣長が曩に「於」「乎」の所屬を改めた場合の誤謬を正し、且つそれを補つて確乎たる根底を與へたのである。

四、橘守部の五十音小說　五十音小說は守部が自身さきに著はした五十音圖說を、平易に說明して初學兒童にも良解し易い樣にあらはしたもので、本書によつて守部が音義派たる面目が知られると云はれる。

五、太田全齋の漢吳音圖　漢吳音圖は太田全齋が、磨光韻鏡の缺點を補正したもので韻鏡研究の著として注目すべきものである。

第九章　伴蒿蹊其他の書

一、伴蒿蹊　伴蒿蹊の國文世々の跡三卷は、語學の書と云ふよりもむしろ文學書と云ふべきものであるが、我が國の文體の沿革を說明し、その變遷をわけて古體、中古體、近體の三となし、古體の例としては、祝詞宣命をあげ、古語の材料を主として國史から取り、續日本紀以後に於ては宣命のほか國語として見るべきものは尠く、後世になつては宣命さへも國語の例にては讀み難くなつた。故に古語の根據は紀記のみであつて、他は國史中にある歌か又は萬葉の言葉のみである。と古と今との言語に非常な變遷のあることを述べ、つぎに中古體の模範としては伊勢、源氏、竹取、大和、落くぼ、狹衣、枕、日記類にては土佐日記、序では古今集序、大井川行幸序、その他歌の詞書では三代集及び三十六人集等である。近體の中で最も古いものは、大中臣朝臣輔親集序であつて多くの字音を用ゐて居るが、これより以後は勿論近體であると記し文體の變遷を、言語上の變遷と文脈上の變遷の二方面から觀察したものである。

二、藤井高尙の消息文例　藤井高尙の消息文例は、我が國古來の消息文の沿革を知るに便利なる書と云ふべきである。

三、富士谷御杖の北邊隨筆　富士谷御杖の北邊隨筆は、彼の語學上の意見を斷片的ながら窺ふことの出來る著である。

四、鈴木朗の言語四種論　鈴木朗の言語四種論一卷は、文政七年の著であつて、彼は本書に於て品詞の分類を論じ體詞、形狀詞、作用詞、「てにをは」の四種ありとし、尙言語の根源及び四種の詞の發生する次第を說明して居る。

第四編　國語學の守成時代

第四期　天保頃より明治初年まで（一三五〇年―明治十五六年頃まで）凡そ五十年

第一章　この時代の概觀

一、この時代に於ける國語界の形勢　第三期は國語學史上最も重要な時代で、從來あまり注意されなかつた動詞、形容詞、副詞等に關する研究も行はれ國語學界は空前の盛觀を呈したのであつたが、第三期につゞいて來る第四期は時幕末に際して內憂外患相ついで起り、國家多事の時であつたため、わが文物は一頓座を來たし國語學の研究としても、前期よりも不振の狀態を免れなかつたのは、甚だ遺憾な次第であつた。さりながら、この第四期とても、國語學に貢獻すべき研究の全然なかつたわけではなく、多事な世間をのがれ、國難をよそに風月をながめて居た所謂隱士の手に多少の研究はなされたのであるが、何しろ彼等の地位が當時の社會に重きをなさゞりしが如く、その人々の手になつた國語研究が重んぜられなかつたのも亦已むを得なかつたのである。

かくの如き世の狀態であつたから、國語研究も幕末文久以後から明治初年頃迄は、全く世間の人々から顧みられなかつたのであつた。

二、この時代にあらはれた國語研究　この時代にあらはれた研究の大體をのべると、第三期迄は假名遣に對する批評研究は多少ともあつたが、本期になつてからは全く異議を唱ふる者もなくなつて、歷史的假名遣は第三期の末に全く確定されたと云ふべきである。

「てにをは」に付ての研究は、大體富士谷派と本居派とに分れるが、前者は之を祖述する者もなくて亡びたが、本居派は一世を風靡し、當世は云ふまでもなく後世の學者すら、之を以て「てにをは」法則の金科玉條として、遵奉せらるるに至つた。從つて詞の玉緒を增補訂正する學者も比較的多くあらはれたが、中でも長野義言、八木立禮、中島廣足等は有名なるものである。

活用に付ての研究としては、西洋文典が輸入された結果、和蘭文典の形式に則つて鶴峯戊申が語學新書をあらはし、鈴木重嶺が詞のちかみちを編して、はじめて我國に於て文典らしい形式を具へたものが出現したのである。

第二章　長野義言等の「てにをは」研究

一、この時代の「てにをは」研究　この時代の「てにをは」研究は、前期研究の足跡を辿つたに過ぎず何等の新機軸も見出されない。たゞ仙臺の人保田光則が富士谷派の學說を再び興さんとして脚結抄考、かざし抄增補等をあらはしたのが、やゝ注意すべき事柄で、このほかでは鹿持雅澄の結詞例や、長野義言の玉の緒末分櫛、それから萩原廣道のてにをは係辭辨、中島廣足の玉の緒補遺、物集高世の辭格考、堀秀成の助辭意義考等である。

二、鹿持雅澄の結詞例　鹿持雅澄の結詞例一卷は萬葉集古今集等から結詞についての證歌を蒐めて、「てにをは」研究に關する自說を述べたものである。

三、長野義言の玉の緒末分櫛　長野義言の玉の緒末分櫛三卷は、詞の玉の緒が材料豐富なるに拘らず、「てにをは」の意義等の說明が甚だ簡單であつて良解し難い故、その缺點を補ひ、初學のために詳密な註解を施した。そして未然言、續用言、切止言、續體言、已然言等の新名稱を用ひて居る。

四、萩原廣道のてにをは係辭辨　萩原廣道のてにをは係辭辯一卷は、本居宣長の紐かゞみに於ける係辭に付て、自己の說をのべ且つ其理由を詳細に辨明したものである。

五、中島廣足の詞の玉の緒補遺　中島廣足の詞の玉の緒補遺六卷は、詞の玉の緒を增補したもので證歌を萬葉より八代集のみならず、後世のものにても適當なものは豐富に蒐集した點に特色がある。

六、物集高世の辭格考抄本　物集高世の辭格考抄本二卷は安政五年に出されたものであつて、言語を左表の如く分類し詳細に說明して居る。

- 言語
  - 體言
    - 眞體言
    - 假體言
  - 用言
    - 作用言
    - 形狀言
  - てにをは
    - 希求辭
    - 助辭
    - 嘆辭
    - 不の活辭
    - 之の活辭
    - 來の活辭
    - 去の活辭
    - 將の活辭
    - 有の活辭
    - 一つの活辭

かく分類した「てにをは」を、將然、連用、截斷　連體、已然の五段と、體言に連續する方則を委しく說明したものである。

第三章　語源の研究

一、常識的語源研究　語源の歷史的研究家には、さきに新井白石・本居宣長あり、おくれて鈴木朗が雅語音聲考を著はして、科學的語源研究の端緒をなしたが、惜しかなこの端緒を繼承して語源の科學的研究を完成するものもなく、いたづらに常識的研究の範圍に止まつた。從つてこの種の著作としては大國隆正の矮屋一家言、宇田甘冥の本朝辭源位に過ぎなかつた。

二、矮屋一家言　大國隆正の矮屋一家言一卷は言語上の解釋によつて、世の眞理を說明せんと試み釋迦は阿字を觀して離慾寂靜の道を悟り、孔子は仁中孝等の字義を解して齋家治國の道を傳へたが、我が邦には道を言語上より說明したものがないのは、甚だ遺憾であると稱した。本書はこの理想の下に立つて研究した結果の所產であるが附會の說が多く言語學上あまり價値あるものではない。

三、本朝辭源　宇田甘冥の本朝辭源二卷は、用言先出の論をなして居るが前者と同じく、書中附會の說が多い。

第四章　辭書研究

一、第四期の辭書研究　この期に出でた辭書の權威あるものは、中島廣足の增補雅言集覽と、足代弘訓の詞の重波とである。

二、足代弘訓の詞の重波　足代弘訓の、詞の重波三卷は、源語梯、詞葉新雅、源氏玉の小櫛等の解釋で、自ら適切であると考へたものを取つて、五十音圖に配列したものであつて自說は見當らない。

三、中島廣足の增補雅言集覽　增補雅言集覽五十七卷は、さきに石川雅望が著はした雅言集覽が「い」から「な」まで出版になつて、「ら」以下は寫本のまゝで傳はつて居たが、語彙も少く且つ例證も不十分なのを廣足が慨し集覽に洩れた語を加へ、例證を豐富にして增補したものを、その孫惟一が明治になつて出版したものである。

第五章　文字の研究

一、神代文字の有無　神代文學の有無は、本朝に於ても神道家等の一部學者に論爭せられて、鶴峯戊申の鍥木文字考、大國隆正の神字源及び神字箋、落合直澄の日本古代文字考があらはれた。

二、鶴峯戊申の鍥木文字考　鶴峯戊申は平田篤胤の門人であるが師說に從つて、神代文學の存在を說き、その文字は阿奈以知四十七字であることを述べた。

三、大國隆正の神字原　大國隆正も篤胤の學說を繼承して神字存在說をのべたのである。

第六章　音義說の各派

一、音義說の各派　語源を音義上より解釋せんとする說は、古よりあつてこの音義派學者は、すべて言語の起原、語彙の意義、性質構造等を音義上より說明し、その派も次の數派に分れたのである。

1、寫聲派　鈴木朖
2、一行一義派　平田篤胤　鈴木重胤
3、一音一義派　大村光枝　橋守部　鬼島廣蔭　堀秀成
4、言靈派　富士谷成章　富士谷御杖　高橋殘夢
5、神道義解派　林圀雄　平田篤胤　大國隆正

二、各派の主張

1、寫聲派

鈴木朖は雅語音聲考を著はして、言語は音聲を象りて寫したものであると云ふ言語起原論をなした。

2、一行一義派

平田篤胤は古史本辭經をあらはし、鈴木重胤は語學捷徑をあらはして、音義の上より言語の意義及び言語上の法則を解釋せんとしたが、これぞ一行一義派と稱すべきものである。

3、一音一義派

一行一義では不完全なるが故に、更に一音一義に進んだのである。橋守部、鬼島廣蔭等は、この派の學者であつて廣蔭の說を繼承し、木居宣長、鈴木朖、橋守部、平田篤胤等の學說を融合して、一家の見を立てたのは堀秀成であつて、彼は助辭音義考、假字本義考、言靈妙用論、音義本末考、音圖略說等をあらはした音義說の大立物である。

4、言靈派

言靈派の考では言語は神の創造されたものであるから、一種靈妙な作用がある。この靈妙な作用が即ち言

靈であつて、言語の發達變化は云ふまでもなく、吾人の思想の發表も亦この作用に基くとの假說の下に、凡て言語學上の事實を解釋せんとしたもので、富士谷成章、富士谷御杖はこの派に屬し、高橋殘夢はその大立物で、殘夢の著書には、國語本義、國語言靈辨明等がある。

5、神道義解派

言語を音義の上から研究せず、自己の立脚點である神道などに附會して解釋したものであつて、平田篤胤は古史本辭經に於て、從來の五十音圖を訂正し、その理由、聲音發聲の順序等を神道の立場から說明した林圀雄には皇國の言靈、鬼島廣蔭には言靈論顯論の著がある。

第七章　文典の發

一、鶴峯戊申の文典研究　我が國の言語を今日の文典に於ける品詞の如く、區別して研究したのは富士谷成章が嚆矢であつて、爾後「てにをは」、助動詞又は自他、活用等の部分的研究は多くあらはれたが、全體に付ての組織的叙述は、末期にあらはれた鶴峯戊申の語學新書が先鞭をつけたものと云はねばならぬ。彼の語學新書二卷は和蘭文典の法式によつて國語語法を說明したもので、國語法から眺めた時には誤謬も少くないが、はじめて我が語法の形式を洋式文典のそれに模したと云ふことは、國語學史上一新紀元を劃したものである。

二、鈴木重胤の詞の捷徑　鈴木重胤の詞の捷徑三卷は、富士谷成章、本居宣長、同春庭、大國隆正等の研究より材料を集めて今日の文典と殆んど同一なものを、著はしたことは聊か注目に價するもので、上卷は音韻、體言、用言、自他活言、運用活辭、助辭、係辭、結辭、中卷は假名遣、下卷は字音假名遣及び發語についての研究を述べたるものである。

この後、明治時代迄文典書としては、以上の二書よりあらはれなかつたが、明治に入つてから次の如き數種があらはれた。

三、堀秀成の語學楷梯　秀成の語學楷梯は、明治十年版であつて言、辭、詞の三部に分けて文典

を説明したものである。

四、田中義廉の日本文典　田中義廉の日本文典も矢張り明治十年出版されたもので、從來の文法が品詞法を主とせるに、この書は品詞法のほか、措辭法をも説明して文典研究に一段の進歩をもたらした書である。

五、物集高世の初等日本文典　物集高世の初等日本文典は、文字論、文語論に分類して説明したのであるが措辭論はない。

六、チャムバレーンの日本文典　チャムバレーン（Chamberlain）の日本文典は、明治二十年文部省出版にかゝり、單語法と文章法との二部に分けて、單語法には活かざる辭、即ち實名詞、代名詞、副詞、接續詞、數詞、間投詞、關係詞の七、活く辭卽ち動詞、形容詞の二に付て説明し、文章法には文章法ならびに、音韻の説明をなして居る。

この書は洋文典の法式によつて日本語法を記述したるもので、わが國の語法を規定した標準文法が日本人でなく、外國人の手によつて出來たのである。

以上の諸書のほか、外人ブラウン、アストン等の日本文典が相接いで出で、チャムバレンの口語文法も後にあらはれた。わが文典の結實時代に於て外人によつてその成果を收められたことは殘念ではあるが、當時言語研究に必要な基礎科學の幼稚な國人にとつては、亦已むを得なかつたのである。

第八章　この期にあらはれた活用研究

本期に出た活用研究の書は、著述の目錄等には、可成多數ある樣に見受けられるが、何しろ國內多事の時であつたから、事實世間に出版されたものは、極めて小數であつた。

一、用言變格例　鹿持雅澄（かもちまさすみ）の用言變格例一卷は、萬葉集古義の附錄であつて、四段活用を國語の常格として、中二段、下二段の活用は、すべて四段から變化したものであることを證明したものである。

二、詞の八衢補遺　中島廣足の詞の八衢補遺二卷は、上卷に於て主として八衢の缺けた點や、誤れる部分を補正し、下卷は八衢には關係がない。

三、活語初のしほり　長野義言の活語初のしほり一卷は、動詞自他の研究、ならびに詞の延約に付ての研究を述べたものである。

四、活語四等辨　黑川春村の活語四等辨一卷は、活語に、然か云ふ詞、然かする詞、然かせさする詞、然かせらるゝ詞の四等の差別あることを説いたもので、活語に於てこの四等の區別を明かにしなければ、活語の意義を知り難いことをのべて居る。

五、集語別記　文部省編修寮の語彙別記一卷は、言語の活用には十四種あるが、實際上は十種活

用で充分なるが故に十種と定め、第一種より第八種までを作用言、第九種第十種を形狀言と區分した。

第九章　音韻の研究

一、音韻考證　黑川春村の音韻考證二十二卷は、春村がまだ少壯の時、太田氏の漢吳音圖を見てその精細な研究に驚歎して、それより以後氣付ける材料を記錄して三十年後に之を整理し、字音の正否について極めて歷史的に考證したものであるが、この書は遂に出版に至らなかつたのである。

二、音韻假字用例　白井寬蔭の音韻假字用例三卷は、本居宣長が字音假字用格に於て、「む」と「ん」との區別は古代にはなく、古代は「む」の音だけで「ん」は音便で後世になつてから、あらはれたものであるとの謬見は、上田秋成其他多數の學者に訂正されたが、寬蔭また字音假字用格のこの缺陷を指摘して堂々論評した著である。

第十章　この期にあらはれた國語學上の雜書

一、發言三轉例と雅言成法　この二著は何れも鹿持雅澄の手になつたもので、舒言三轉例一卷には左行波行加行にのびた三種あることを述べ、この三行にのびた語を集成したものである。また雅言成法二卷は、古言を解釋するに古來學者の陷れる誤謬を指摘して、古言解釋の方法を說明したものである。

二、小夜時雨　萩原廣道の小夜時雨は、本居宣長の玉霰にのつとり後世に及んで亂雜になつた古語使用の方法を、批評訂正して復古を主張した。

三、玉あられ窓の小篠　中島廣足の玉あられ窓の小篠六卷は、玉霰に證歌をそへ解釋を施したものである。

四、言葉の正道　大國隆正の言葉の正道一卷は、人類が萬物に優れる所以は言語を有するからであるとし、また我が國が萬國に勝れる所以は言語が純正であることであると述べた。更に我が國語が外國語に優れる所以は語に活用があり、且つ用法嚴重であつて、運用自由なること等を神道家の立場より說明し、また聲音の根源は、波行であると述べ、最後に脚結抄、かざし抄、詞の玉の緒等の批評をも試みて居る。

第五編　第五期の國語學

第五期　明治十五六年以後

第一章　國家改良論の勃興

一、博言學科の設置　明治二十年頃迄の國語學の概要は、大體前篇までにつくして居るが、本篇に於ては明治十九年帝國大學に博言學科を置かれてより以後、ローマ字採用主義、漢字廢止論勃興の大略を述べて終らんとする。

そも明治十九年はじめて帝國大學に博言學科を設置されてから、チヤムバレーン主として言語學を講じ、後明治二十七年になつて上田萬年獨逸留學を終り、歸朝して言語講座を擔任して言語學を講じ、我が國語は、はじめて科學的研究の道程につく事が出來た。

二、外人の研究　然しながら國語學の組織的研究は、我が國語學者の科學的知識の不十分なるがために、この時期の研究は主としてアストン、サトー、チヤムバレーン、イドキンス等外人の手になつたのが大部分で、夫等の外人は朝鮮語と日本語との關係、或は滿洲語と日本語との關係、アイヌ語に關する言語學的研究をなしとげて我が學界を益した。

三、國字改良論の高唱　泰西の文物が漸々として我が國をうるほすや、我が國人は痛切に自國語の不完全を知つて、第一に提唱されたのは國字の改善であつた。即ち我が國古來から漢字と假名とを併用し來つたが、その漢字には楷書、行書、草書の三體があり、正字、俗字、訛字、略字、國字等がある。加ふるに字劃が非常に複雜であつて之を記憶するにも夥しい時間と勞力とを要し、一通り修得した後でも、正しく用ひ、書きしたたむる事は中々困難な仕事と云はなければならない。之がために如何ほど教育の進歩を妨げ、國家の進運を阻害するか計り知られない位である。

また假名に於ても片假名、平假名の二種があり、またそれの變體があつてこれも中々厄介なものである。故に國字改良の叫びは蓋し當然な事であると云ふべきである。

國字改良の具體的運動は、已に明治二年南部義籌が修國語論を大學に建議し、明治四年には、漢字を廢して羅馬字を採用すべきことを文部省に建議した。

また明治十四年頃には吉原重俊、高崎正風、大槻文彥等が、かなのとも會を興し假名專用の便利なることを社會に發表した。その他かなのとも會と略々趣旨を同じうしたものに、いろは會いろは文會、いづらの友、などの諸會合が起り、後この四社が併合して、十六年七月にかなのくわいと改稱して機關雜誌を發行し社會の視聽を喚起した。

四、羅馬字會の出現　かなのくわいと殆んど同時に、矢張り國字改良の目的の下に矢田部博士等の首唱によつて、羅馬字會が創立せられ羅馬字雜誌を發刊するに至つた。しかし共に數年ならずして萎靡して振はず、その目的を達せずして終つた。しかるに明治二十七八年日清戰役後には、再び國字改良論がやかましく論議されて、明治三十年には井上博士主となつて國字改良會を組織して、その主張を高唱したが、これも亦案外不首尾に終つてしまつたのは遺憾である。

しかしながら國字改良は、漸く社會の公論となつて帝國議會に建議せらるゝ樣にまでなつたが、何しろ一朝一夕に效果をあげ得べき問題にあらず。これを完成するのは極めて至難の大事業であつて、可成の年月と多大の努力とにまたなければならない。

最近になつて文部省國語調査會は、種々考究論議の結果、常用漢字一千九百六十二字と常用略字百五十四字とを發表して、漸次國字改良の理想に近づきつゝあるは、誠に喜ぶべき傾向であると云ふべきである。

第二章　文體及語法の改良

一、國文の改良　國字の改良に伴つて國文の改良も、漸次人々の考慮に上つた。我が國に使用せらるゝ文體を見ると、人により、場合により、用途により、或は時代によつて夫々雜多なものがあるが、重もなるものを擧ぐれば普通文體、漢文直譯體、和漢混淆體、書簡文體、歐文直譯體、言文一致體、候文體、韻文體及び擬古文、漢文、公用書體、商業文等があつて、一定の標準文體と云ふべきものがない。そこで時代の趨向を察して明治二十二年頃、山田美妙は標準文體として言文一致の可なることを唱へて自らその範を世人に示したが、當時に於てはいたづらに異を立つるものとして非常なる反對があつた。然しながら時勢の進歩は幾何もなく、言文一致體の我が國語の標準文體として適切なるものなることを認むる樣になつて、明治三十七年七月國語調査委員會は、將來我が國の標準文體として言文一致を採用すると云ふ方針を發表した。

さてこの言文一致を標準文體とする主旨は、誠に結構なるものであるが實際問題としては、なほその發達の日が淺いためか形式實質その他の點に於て種々なる疑問があり、言文一致と云ふことそれ自身の解釋についても實際的說明は困難なことであるとされて居る。

しかるに學習には稍々困難ではあるが、普通文は一千有餘年の歷史を有し、形式實質等に於ても言文一致の如き難點もなく略々完備の域にあり、且は文體の主要件たる簡潔明瞭と云ふ特色を具備して居るからして、將來我が國の標準文體確立の期は、蓋し二者の融合練成された時ではあるまいか。

兎に角言文一致體の廣く社會に使用される樣になつたのは、最近二三十年以降の事であるが、その使用せらるゝ範圍は漸次擴大されつゝあることは、まさに國語學史に一新紀元を劃するものと云ふべきである。

二、假名遣の改良　國語問題中の難問題である假名遣に付ては、明治二十七年井上文部大臣より假名遣廢止可否の諮問案を帝國大學、第一高等學校に下したが、諸家のそれに對する意見は、區々として決するに至らなかつた。

そして明治三十三年八月小學校令改正の際、漢字制限、假字字體一定と共に、所謂字音假名遣は廢止されて、發音通りに表記される樣になつた。しかしながらこは實際上便利なるが如くなれど、主として初等教育に實行せれたのみで、社會一般は尙歷史的假名遣を襲用するからして反つて二重の繁雜混亂を來すに至つた。そこで文部省は更に明治四十年九月七日の訓令を以て字音假名遣は、歷史的でも發音的でも便宜よろしきに從ふべしとの意味を以て右の如き方針を發表した。

明治四十一年九月七日文部省訓令

字音假名遣ハ當初改正ノ際ハ、兒童ヲシテ國語學習上ニ於ケル困難ヲ避ケシメントスル趣旨ニ出テタルモ

ノナレトモ、實施ノ結果ニ鑑ミ豫期ノ目的ニ副フコト能ハサルヲ認メタルヲ以テ、今回國定教科用圖書改正ノ時期ニ逢レルヲ機トシ、之ヲ廢止セリ、惟フニ假名遣ハ時勢ノ進歩ニ伴ヒ整理ヲ要スヘキコト勿論ナリト雖尚益々愼重ナル研究ヲ積ミ以テ其ノ目的ヲ達センコトヲ期ス。

省令改正ノ結果、字音假名遣ハ小學校ニ於テモ他ノ學校ニ於ケルカ如ク、古來慣用ノ例ニ依ルヘク教科用圖書亦之ニ依リテ編纂セラルヘシ、然レトモ字音假名遣ノ爲徒ニ國語ノ學習ヲ難澁ニシ、兒童ノ心神ヲ過勞セシムルカ如キハ務メテ之ヲ避ケサルヘカラサルヲ以テ、敢テ繩墨ニ拘泥スルヲ要セス、便宜從前ノ假名遣ヲ許容スル等取捨其ノ宜シキニ從ヒ適當ノ教授ヲ施サンコトヲ要ス。

一見甚だ曖昧な方針であるが、今日之を確定することは至難なことであつて、言語の自然陶汰による適當な時期をまつより方法がないであらう。

三、語法の改良と許容案　語法の改良については、關根正直口語法私見をあらはして、語法は言語上の慣習を規定した人爲的法則であるから、時代に伴つて變遷するは當然であると云ふ意味を述べたが、僅に一部の學者より贊成するものはなかつた。しかるに時勢の進歩と口語文の一般に普及せらるゝに及んで、文部省は遂に十六ケ條の文法許容案を出して、中古の語法に修正を加へ現代の慣用に重きをおくの實を示したのである。

× × × ×

以上極めて概要ながら我が國語學の展開發達をのべ終つた譯であるが、尚最近著しき國民精神の一傾向として複古的色彩のあらはれを蔑視することは出來ない。讀書界に於ても國語國文に關する書物の出版せらるゝものは實に夥しいものがあり、雜誌等にあらはれた國語學に關する意見研究も亦少くないが、とくに國語學史上一時期を劃する程の新研究、新著書もない樣であるから、それらに付ては之を他日に讓ることにする。

三、國文法

緒論

一、文法の意義　文法とは文の法則を知る學科である。文とは一箇の完結せる思想を表せる語の結付をいふ學術語にして、英語のセンテンス Sentence に相當する。わが國の文には文語と口語とあり、その法則は即ち國文法である。

二、文法の目的

1、正しく文を作るために

上世言文一致の時代にありては口語即文語であつて、文を作るに特にその法則を學ぶ必要は無かつたが、平安朝の末頃より言文漸く相分れ鎌倉時代室町時代といふ具合に、時代を經るに從つて益々其の差を生じ、戰國を經、德川時代に及んでは全く言文不一致の世となり、引きつゞき現今に於ても依然として言文相分れて居るから日常我等が、正しく文を作るためには必ず文法を學ばなければならない。

2、正しく文を解釋するために

文章を解釋するに當つて文法の知識がなかつたならば、屢々誤解を招き到底的確なる解釋を下すことは出來ない。

3　正しき國語を知らむがために

正しき國語を知るには標準語を知らなければならぬ。文法は、標準語より歸納的に研究して得たものであるから、正しき國語は又文法によつて知ることが出來る。

三、文法の種類

一、各國語文法
二、歷史文法
三、比較文法
四、方言文法
五、標準文法
六、混合文法

四、文法の組織　如何なる種類の文法にても、之を音韻文字篇・詞辭篇・文章篇の三部に分つて說くべきであつて、とくに詞辭篇はその中心たるべきものである。但し本書は、便宜上音韻文字篇を餘錄として後章にその概略を述べるに止めた。

五、國語の分類　わが國語を、主としてその性質職掌上から分類すれば左の如し。

1、獨立辭

名詞　事物の名
代名詞　名詞の代用
動詞　動作
形容詞　性狀
副詞　動作・狀態を修飾限定す
接續詞　語・句・文をつなぐ
感動詞　感動

2、附屬辭

助動詞　形の變化あり、動詞又は他詞の意義を補ふ。
助詞　形の變化なく諸詞に附屬して語句の關係を表す。

注意　名詞・代名詞を體言といひ、動詞・形容詞を用言ともいふ。
助詞は、また「てにをは」ともいふ。

第一編　詞辭篇

第一章　名詞代名詞

一、名詞

一、意義　名詞とは有形無形一切の事物の名稱として用ひらるる語を云ふ。

例　人・山・心・富士山・源義經など。

二、名詞の種類

I、名詞を大別して次の二種とす。

イ、普通名詞　同じ事物に通じて用ひらるゝ名詞、例へば、

山・河・花・心・忍耐・勉强など。

ロ、固有名詞　一つの事物に限つて用ひる名詞、例へば、

日本・富士山・源義經など。

2、成立より名詞を大別して次の二種とす。

イ、本來の名詞

ロ、轉來の名詞

本來の名詞は國・山・人・日・川など、その名の如く本來のものであるが、轉來の名詞は、他詞より轉じたるもので例へば、

動詞より轉じたもの、

商（あきなひ）・侍（さむらひ）・戰（たたかひ）・帶（おびる）・露（つゆ）・謠など。

形容詞より轉じたもの、

白・黑・青・赤・苦しみ・悲しみなど、

三、數詞　數量を表する名詞を數詞と云ふ。

例　ひと・ふた・五・六・百・千・など。

四、助數詞　數詞につけて用ひる名詞を助數詞といふ。

例　つ・本・冊・枚・圓・錢・番など。

二、代名詞

一、意義　名詞の代りに用ひられる語を代名詞といふ。

例　我・彼・そこ・こゝ・いづこなど、

二、代名詞の種類　代名詞はこれを人代名詞と指示代名詞とに分つ。

1、人代名詞　人名に代へて用ひられる代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
われ・僕（私）	汝・君（あなた）	彼（あの人）	誰（だれ・どなた）

○括弧内は口語の場合

2、指示代名詞　事物場所方向等を指し示すに用ひられる代名詞。

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ（これ）	そ（それ）	か（あれ）	いづ（どれ）
場所	こ（ここ）	そ（そこ）	かし（あそこ）	いづこ（どこ）
方角	こなた	そなた	あなた・こなた（あちら）	いづ方・いづち（どちら）

○括弧内は口語の場合

三、體言の數及び敬語

1、數　わが國語では正確に數を表すことはない。唯體言の複數を表すには次の様な種類がある。

イ、同じ語をたゝんで、

われ〳〵・人々・山々・木々の如くする。

ロ、接尾語を添へて、

汝等・私ども・義經等・君達・子供衆の如くする。

ハ、接頭語を添へて、

幾世・諸人の如くする。

右の中で私どものどもの如きは、複雜を表さず謙遜の意を表す事もある。例へば身ども・われわれどもの如きはさうである。

2、敬語　體言の敬語は、比較的簡單である。

イ、本來の敬言、

君・すめらぎ・あなた・など。

ロ、接頭語を附するもの、

おん身・み佩刀・おみ帶

ハ、接尾語、

女御・嫁御

第二章　動　詞

一、意義　事物の動作又は存在を表す語を動詞といふ。例、
讀む・書く・泳ぐ・有り・記すなど。

二、動詞の種類

1　動詞をその性質の上から自動詞、他動詞の二つに分つ。

イ、自動詞　動作を他に及ぼさぬ動詞、
雨降る・風吹く
の降る吹くといふ動作は何等事物を處分せず即ち物に及ばないから自動詞である。自動詞にはその意義を完全にするため其の動作の係るべき標準を要するものがある。
例　鏡は壁に懸る。

ロ、他動詞　動作を他に及ぼす動詞。
下女犬を打つ・少年本を讀む
の打つ讀むの如きはその動作が犬・本に及び犬本を處分するから他動詞である。他動詞は、常に動作の及ぶべき事物が必要である。例へば「少年讀む」といふだけでは其の意更に通じない必ず本とか又は之に代るべき語を要する。これを他動詞の目的といふ。なほ目的以外別に動作の係るべき標準を要するものがある。
例　われ教を師より受く、

2、動詞をその組織上から本來の動詞、轉來の動詞、熟語の動詞の三つに分つ。

イ、本來の動詞　讀む・休むなどの如く動詞本來のもの。

ロ、轉來の動詞　他の品詞より動詞に轉じたもの、

a、名詞より
筆す・意味す・罪す・私す・宿る・獨言つ・猿樂ふ・料る（料理する）

b、形容詞より
畏む・貴む・疎む・惡む・強がる・廣がる。

c、副詞より
ふら〳〵す・くら〳〵す・ぶらつく。

ハ、熟語の動詞　他語と合して一つの動詞となつたもの、
試る（心見る）顧る（返り見る）薫る（香居る）

三、動詞の形態

1、語根と語尾　動詞をその變化する部分と然らざる部分とによつて語尾と語根とに分つ、例へ

ば「開く」といふ動詞について云へば、ひらといふ部分は如何なる場合にも變化することがないから是を語根といひ、くといふ部分は、場合によりかきくけなどに變化するから是を語尾といふ。

語根は更に語幹と語根とに分ち得る。例へば四段活用である「うかぶ」といふ動詞に於て「うか」までは語根であるか「うく」と加行に活用するとき「か」は語尾となる。仍ち「うかぶ」といふ動詞に於て「うか」までは語根であつて、その中にて如何なる場合にも變化なき部分「う」を語幹とするのである。但し通例文法上では語幹を論じない。

2、語根語尾の有無　多くの動詞は、語根語尾の區別があるが、來、爲、得など一音の動詞にはこの區別がない。

四、動詞の活用　動詞は意義を樣々に言ひ表さんがために語尾を變化する。之を動詞の活用といふ。

五、活用の種類　動詞は語尾の活用により正格五種變格四種、合せて九種に分つ。（語根語尾の別なきものは、すべて語尾と見做す）

1、正格

イ、四段活用　あ列・い列・う列・え列の四段に活用し、五十音圖中か・さ・た・は・ま・らの六行に存在す。

ロ、上二段活用　い列・う列の二段に活用し、う列にる・れが添はる。五十音圖中か・た・は・ま・やらの六行に存在す。

ハ、下二段活用　え列・う列の二段に活用し　う列にる・れが添はれ五十音圖中あ行からわ行に至るすべてに存在す。

ニ、上一段活用　い列の一段にだけ活用し、五十音圖中あかなはまわの六行に存在す。

ホ、下一段活用　え列の一段にだけ活用し、蹴るといふ一語だけである。

2、變格

イ、加行變格活用　あ列・い列・う列の三段に活用し、來といふ一語だけである。

ロ、佐行變格活用　え列・い列・う列の三段に活用し、爲・おはすの二語だけである。
但し或る名詞、漢語、外來語が動詞として用ひられる場合には皆この活用となる。

ハ、奈行變格活用　あ列・い列・う列・え列の四段に活用し、う列にる・れの添つたもの。死ぬ・往ぬの二語だけである。

注意　死ぬを四段活用の動詞として用ゐることは現代文に於て許容されて居る。

ニ、良行變格活用　あ列・い列・う列・え列の四段に活用し、有り、居り、待りの三語だけである。

注意　居りを四段活用として用ゐることは、現代文に於て許容されて居る。

六、活用表　動詞の活用を表に示せば左の如し。

種類	動詞の語根	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段活用	書(か)	か	き	く	く	け	け
	漕(こ)	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	貸(か)	さ	し	す	す	せ	せ
	立(た)	た	ち	つ	つ	て	て
	買(か)	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	學(なら)	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	讀	ま	み	む	む	め	め
	借(か)	ら	り	る	る	れ	れ
上二段	生(い)	き	き	く	くる	くれ	き
	過(す)	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎ
	落	ち	ち	つ	つる	つれ	ち
	恥(に)	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢ
	強(し)	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひ

活用										
下二段活用	延(の)	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	べ
	教(をし)	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へ
	尋(たづ)	れ	れ	ぬ	ぬる	ぬれ	れ
	出(い)	で	で	づ	づる	づれ	で
	捨(す)	て	て	つ	つる	つれ	て
	交(こ)	ぜ	ぜ	ず	ずる	ずれ	ぜ
	寄(よ)	せ	せ	す	する	すれ	せ
	告(つ)	け	け	く	くる	くれ	け
	受(う)	け	け	く	くる	くれ	け
	(得)	え	え	う	うる	うれ	え
	懲(こ)	り	り	る	るる	るれ	り
	報(むく)	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	い
	恨(うら)	み	み	む	むる	むれ	み
	延(の)	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	び

用				
植う	ふ	ふ	ふる	ふれ
枯か	れ	れ	れる	れれ
消き	え	え	ゆる	ゆれ
賣せ	め	め	むる	むれ

上一段活用						
(射)	い	い	いる	いれ	い
(着)	き	き	きる	きれ	き
(似)	に	に	にる	にれ	に
(干)	ひ	ひ	ひる	ひれ	ひ
(見)	み	み	みる	みれ	み
(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐれ	ゐ

下一段活用					
蹴	け	け	ける	けれ	け

加行變格					
來)	こ	き	く	くれ	こ

佐行變格					
爲)	せ	し	す	すれ	せ

奈行變格					
(死)(往)	な	に	ぬ	ぬれ	れ

良行變格					
(有)(居)(侍)	ら	り	る	れ	れ

注意 普通の語では、上一段活用は射る・鑄る・着る・似る・る・干る・見る・試みる・顧みる・惟みる・鑑みる・居る・率ゐる・用ゐるの數語に過ぎない。

但し用ゐるは、奈行上二段活用試みるは、ま行上二段活用としても用ゐられる。

注意 上二段活用の恨みを四段活用として用ゐることは現代文に於て許容されて居る。

七、口語の變化

1、文語と同形なるもの、

四段活用・上一段活用・下一段活用の動詞は口語に於ても同樣に語形が變化する。

2、文語と異なるもの、

上二段活用の動詞は、上一段活用と同樣に、下二段活用の動詞は下一段活用と同樣に、また加行變格活用は口語の場合こ・き・くる・くる・くれ・こと語形が變化し、佐行變格活用は、せ・し・する・する・すれ・せ又はし・し・する・すれ・しと語形が變化する。奈行變格と良行變格とは四段活用と同樣に語形が變化する。

八、口語活用の種類

口語では文語の上・下二段活用が上・下一段活用に變化し、奈行變格活用と良行變格活用とが、いづれも四段活用に變化するから結局口語活用の種類は正格・變格合せて左の

五種となる。

1、正格活用
　四段活用
　上一段活用
　下一段活用
2、變格活用
　加行變格活用
　佐行變格活用

九、動詞活用形の變化　如何なる活用に屬する動詞であるかは、左の方法によつて見別けることが出來る。

1、ず或はむといふ助動詞を動詞の語尾に續けて見てあ列に續くものは四段活用。
　例　行かず・讀まむ
2、同樣にしてい列に續くものは上一段活用。
　例　生きず・落ちむ
3、同樣にしてえ列に續くものは下二段活用。
　例　與へず・捨てむ

注意　形容動詞は、動詞の一種であるが、今便宜上これを次節形容詞のところに於て述べる。

一〇、動詞の音便　發音の便宜上動詞の語尾の音を轉ずるを音便と云ひ大體左の四種に分れる。

1、い音便　四段活用の加行の動詞の連用形きがぎかいに轉じたもの。
　例　書きて　書いて
　　漕ぎて　漕いで
2、う音便　四段活用の波行の動詞の連用形ひがうに轉じたもの。
　例　問ひて　問うて
3、撥音便　四段活用のは行・ま行及び奈行變格の動詞の連用形び・み・にが撥音んに轉じたもの。
　例　學びて　學んで
　　好みて　好んで
　　死にて　死んで
4、保音便　四段活用のた行・は行・ら行及び良行變格の動詞の連用形ち・ひ・りが促音つに轉じたもの。
　例　立ちて　立つて
　　思ひて　思つて
　　却りて　却つて

有りて　　有つて

一一、動詞の活用形　動詞は、用ひ方によつて種々に活用するが、その活用形に六種あつて夫々特殊な名稱を有する。これを動詞の法若しくは段といふ。

1、未然形（將然形ともいふ）

未然の意味又は假定の條件をあらはす。

例　花咲かば美しからむ

2、連用形

助動詞や助詞に連なる形

例　花咲き亂る

【補】

イ、連用形は「中止形」「名詞形」といつてもよい場合がある。例へば「書を讀み字を習ふ」の讀みは中止形、「本の讀みを覺える」の讀みは名詞形である。

ロ、佐行の爲と良行の有りとは連用形を受けない。故に一見動詞の樣な習あり・便りす・預りあり・祈りす等の習・便り・預り・祈り等は皆名詞である。

ハ、泣き顏・歌ひ手・笑ひ上戸・朝起き・氣受け・讀み・書きのごとく連用形でいろ〳〵の熟語を形作る。

3、終止形

文の終りに用ゐられるものは終止形と云ひ、動詞はすべて終止形をもつて本體とする。

例　別府温泉へ行く。
　　足にて蹴る。

4、連體形

體言に連ねて用ひられるものは、これを連體形といふ。

例　朝早く起くる日もあり、
　　重れて來る時を待て、

注意　口語ではすべての動詞の終止形と連體形が同じ形になつた。これ文語の動詞と比較して活用形の著しい相違である。

5、已然形

確定の條件をあらはすのに用ひられるものを已然形といふ。通例は動詞ど・ども・ばなどに連る。

例　花咲けば美し
　　風吹けど雨霽れず

注意　口語に於ては未然形が已然形と同形になつたので、未然か已然かは文章の前後の意味で判斷しなければならない。

6、命令形

命令又は希求の意をあらはすに用ひられるものは、これを命令形といふ。また希求の段とも云はれる。

例　早く花咲け
　　よく勉強せよ

四段活用、奈行變格活用及び良行變格活用の動詞はえ列の音でそのまゝ命令になり、その他の動詞は、その未然によが結び付いて命令になる。

第三章　形容詞・形容動詞

一、形容詞

一、意義　事物の性質、形狀を表す語を形容詞といふ。

例　善し・惡し・嬉し・悲し等

二、種類　形容詞を、その組織の上から左の三つに分つ。

1、本來の形容詞

善し・惡し・嬉し・悲し

2、轉來の形容詞

イ、名詞より轉じたもの、

物　――物々し
花　――花々し
男　――男々し
大人――大人し

ロ、動詞より轉じたもの、

戀ふ――戀し
羨む――うらやまし
望む――望まし
知る――著し

ハ、漢語より轉じたもの、

美　――美々し
執念――執念し
仰　――仰々し

ニ、形容詞の再度活用、

嫉し――嫉まし
淺し――あさまし
鈍し――おぞまし

ホ、熟語の形容詞　複合して一つの形容詞となるもの、

見苦し　薄暗し
心憂し　細　し

三、形容詞の語根語尾　形容詞は動詞の如く活用し、變化しない部分を語根と云ひ、變化する部分を語尾といふことは動詞と同樣である。

例へば「清し」といふ形容詞について云へばきよといふ部分は變化しないから語根しは用ひ方によつて變化するから語尾である。

四、活用の種類　形容詞はその活用の狀によつて左の二つに分つ。

第一類　久活用　語根にしを含まず、く・し・き・けれと活用する。
例　善し・遠し・深し・低しなど

第二類　志久活用　語根にしを含み、く・く・し・き・けれと活用する。
例　惡し・烈し・嬉し・苦しなど

五、形容詞の活用表

種類	形容詞の語根	已然形	連用形	終止形	連體形	已然形
第一類　久活用	善（よ）	く	く	し	き	けれ
第二類　志久活用	惡（あ）し	く	く	（し）	き	けれ

六、形容詞の音便

1、い音便　連體形きがいに轉じたもの、
善き人……善い人

2、う音便　連用形くがうに轉じたもの、

清くして……清うして

3、撥音便　連用形くが撥音んに轉じたもの、

重くす……重んず

七、形容詞の活用形　形容詞は用ひ方によつて種々に活用するが、その活用形に五種（命令形がないこ）あつて夫々特種な名稱を有する。これを形容詞の法若しくは段ともいふことは動詞と同樣である。但し西洋文法に於てその性質上形容詞の活用を論じない。

1、未然形（將然形ともいふ）

未然の意味又は假定の條件をあらはす。

例　苦しくば長く滯在せむ

2、連用形

助動詞や助詞に連る形。

例　水深くて徒歩にてわたり難し

【補】

連用形は、「副詞形」「中止形」ともいつてよい場合がある。例へば「厚く禮を述ぶ」の厚くは副詞形「山高く水清し」の高くは中止形である。

3、終止形

文の終りに用ひられるもの、形容詞はすべて終止形をもつて本體とすることは動詞の場合と同樣である。

例　山高く水清し

4、連體形

體言に連ねて用ひられるもの。

例　善き日を選びて式を行はむ

5、已然形

既定の條件をあらはすのに用ひられるもの。

例　重ければ車にて運べ

八、口語の形容詞　口語では終止形のしも連體形のきも共にいとなる。未然形・連用形・已然形は文語と同樣に活用する。但し連用形のくは場合によつてうとなることがある。

九、口語の形容詞活用表

種類	形容詞の語根	未然	連用	終止	連體	已然
第一類	久活用	善（よ）	く	く	い	けれ
第二類	志久活用	く	く（う）	く（う）	い	けれ

二、形容動詞

一、意義　形容詞又は副詞に良行變格活用の動詞ありが結びついて「善くあり」「惡しくあり」などとあるべきを、そのくありが約つて、「善かり」「惡しかり」などの熟語をなしたものを形容動詞と云ふ。こは動詞の一種と見なすべきものである。

例　深くあり……深かり
　　烈しくあり……烈しかり

二、形容動詞の種類と活用表

種類		未然	連用	終止	連體	已然	命令
第一類	かり活用	善惡し	から	かり	かい	かる	かれ	かれ
第二類	なり活用	靜盛	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
第三類	たり活用	堂々泰然	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

右表に於ける第一類の善かり、惡しかりは已に述べたるが如く善く・惡しくといふ形容詞が有りといふ良行變格の動詞に結び附いてくありが約つてかりとなつたもの。

第二類の靜なり、盛なりは靜に・盛にといふ副詞が有りといふ良行變格の動詞と結び附いてにありが約つてなりとなつたもの。

第三類の堂々たり　泰然たりは、堂々と泰然といふ副詞が、それぞれ有りといふ良行變格の動詞と結び附いてたりとありが約つてたりとなつたのである。

注意　形容動詞は良行變格活用の動詞とほゞ同樣に活用する。

第四章　助動詞

一、意義　助動詞とは動詞に結びついてその意味を助ける語である。但し名詞・代名詞・形容詞等に結びつく場合もある。

二、種類　助動詞をその表す意義によつて分類すれば左の十一種となる。

1、受身の意を表するもの（所相）

他のものから動作を受ける意味をあらはす助動詞る・らるの二種がある。

例　我賊に金を盗まる

忠臣惡人より讒言せらる

2、可能の意を表すもの（勢相又は能相）

自ら爲し得るといふ能力をあらはす助動詞で受身と同じくる・らるの二種がある。

例　なほ湯水のみは飲まる

此の書は我に解せらる

可能の助動詞には「待たるゝものは鶯の聲」「あなたの空のみ眺めらる」の如く意志なくして自然に可能の意味のあらはれて居る場合もある

注意　受身と可能とは同形であるから、よろしく文意によつて識別すべきである。

3、使役の意を表すもの（使役相）

自ら爲すことなく、他のものに動作を行はせる意味を表す助動詞であつて、す・さす・しむの三種がある。

例　す　騎兵馬を走らす

さす　猫に鼠を捕すべさ

しむ　頼朝義經をして義仲を攻めしむ

4、崇敬の意味を表すもの（敬相）

敬意を表す助動詞であつて、る・らる・す・さす・しむの五種がある。

例　る　父上東京に行かる

らる　兄上は未明に起き出でらる

す　主上都を出で立たす

さす　御馬より落ちさせ給ひぬ

しむ　おほやけも行幸せしめ給ふ

【補】

一、使役の助動詞から轉じたす・さす・しむが崇敬の意を表すに用ゐられるときは、大抵下に給ふ・おはし

すなどの語を添へるのを常例とする。

二、崇敬の助動詞は、わが國語の特性であるから、もつとも注意を要すべきものであるとともに、「行幸ならせらる」「きこしめし給ふ」などの如く助動詞の重複する時は、よく文意に注意していづれが何相であるが識別しなければならない。

5、打消の意を表すもの（否定）

動詞又は他の助動詞に結びついて打消す意味を表す助動詞であつて、ず・じ・まじの三種がある。

例　ず　御恩の萬分の一も報い奉らず

じ　こはかなはじと刀投げすてゝ逃げ失せたり。

まじ　よもやさることもあるまじと思ひぬ。

【補】

一、ずと良行變格のありと結びついて「行かざらむ」「行かざりき」「行かざるべし」「行かざるも」「行かざれば」といふやうに用ゐられることがある。

二、まじは推量の意を含んだ打消であるから推量の助動詞とする説もある。

三、じは活用しない。

6、推量の意を表すもの、

動詞又は他の助動詞に結びついて推量の意味を表す助動詞であつて、らむ・べし・らし・めり・む・まし・けむ等がある。

べしは推量の助動詞であるが、そのほか可能・決意・適當・勸誘・義務などの意を表すこともある。但し命令の義ありとするのはよろしくない。

例　らむ　岸の姫松幾代歴ぬらむ

べし　あの花は櫻なるべし……推量

この水飲むべし……可能

比良の高根に雪消えて若菜つむべく野はなりにけり……適當（摘めるやうにの意）

國民は宜しく國家の大本を思ふべし……勸誘（がよいの意）

人は必ず道德を守るべきものなり……義務

明日よりは早く起くべし……決意

らし　かゝる山奥にも人住むらしと見ゆ

めり　あはれ今年の秋も往ぬめり

む　風吹き雨降らむ

まし　人の心は長閑けからまし

けむ　日蓮の精進や如何に强かりけむ

7、希望の意を表すもの、

動詞又は他の助動詞に結びついて希望の意をあらはす助動詞でたし・まほしの二種がある。

例　たし　來る十日までに上京せられたし

まほし　落ち行けば命ばかりはいきの守みのをはりこそ明かまほしけれ

8、指定の意を表すもの、

事物動作を指し定める意をあらはす助動詞でなり・たりがある。

例　なり　孝は百行の本なり

たり　君君たり臣臣たり

注意　たりは時の助動詞にもあるが指定の場合は名詞・代名詞に連り時の場合には動詞に連る。

9、詠歎の意を表すもの、

動作を言ひ終へたるに感情を添ふる助動詞でなり・けりの二種がある。

例　なり　秋の野に人まつ蟲の聲すなり

けり　身のなるはてぞ憐れなりけり

10、比況の助動詞

用言に結びついて比喩の意をあらはす助動詞でごとしの一種がある。

例　ごとし　歳月流るゝごとし

11、時の助動詞

動詞及び他の助動詞に結びついて時の觀念をあらはすものを、時の助動詞と云ひ、過去の時をあらはす助動詞、完了の時をあらはす助動詞、未來の時をあらはす助動詞に分れる。

イ、過去の時をあらはす助動詞　過去に於て動作の終つたことを表す助動詞でき・けりの二種がある。

例　き　かゝるためしも數々思ひ出でられき

けり　昔男ありけり

ロ、完了の時をあらはす助動詞　完了の時の助動詞にはつ・ぬ・たり・りの四種がある。而して完了の時は更にこれを現在完了・過去・完了・未來完了に分つ。

a、現在完了　現在に於て動作の完了したることを現すもので、單に完了の助動詞を用ひる。

例　たり　我學校へ行きたり

b、過去完了　過去に完了したる動作即ち完了したる動作の過去に在りしを表すものである。過去完了には、完了の助動詞の連用形に過去の助動詞を連ねて用ひる。

例　彼は學校へ行きたりき

c、未來完了　未來時に完了すべき動作を云ひあらはすもので、完了の助動詞の未然形に未來の助動詞を連ねて用ひる。

例　彼は學校へ行きたらむ

ハ、未來の時をあらはす助動詞　未だ起らざる動作を豫め云ひあらはすものでむは卽ちこれである。

例　風吹かば波立たむ。

注意　一、すべて動詞そのまゝでは現在の時を現すものである。

例　水流る

鳥飛ぶ

二、助動詞には屢々同語形のものがあるから、よく文意を考へて混同しないやうにしなければならぬ。

三、助動詞の活用　助動詞は用ひ方によつていろ〳〵に活用するが、今之を動詞的活用、形容的活用、特殊的活用の三つに分つことが出來る。

1、動詞的活用

イ、動詞の下二段活用と同じ様に活用するもの。

る

らる

す

さす

しむ

ロ、動詞の良行變格活用と同じ様に活用するもの。

なり

たり

けり

ざり

めり

ハ、奈行變格活用と同じ様に活用するもの。

の

ぬ

2、形容詞的活用

イ、久活用と同じ様に活用するもの。

たし

ごとし

べし

ロ、志久活用と同じ様に活用するもの。

まじ

まほし

3、特殊の活用をなすもの。

き
す
じ
む　らむ
けむ
らし
まし

四、助動詞の活用表　○括弧内の活用は古く用ゐられたものである。

意義上の種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令
受身	る	れ	る	るる	るれ	れ
	らる	られ	らる	らるる	らるれ	られ
可能	る	れ	る	るる	るれ	れ
	らる	られ	らる	らるる	らるれ	られ
使役	す	せ	せ	す	すれ	せ
	さす	させ	させ	さする	さすれ	させ
	しむ	しめ	しめ	しむる	しむれ	しめ
崇敬	る	れ	れ	るる	るれ	れ
	らる	られ	られ	らるる	らるれ	られ
	す	せ	せ	する	すれ	せ
	さす	させ	させ	さする	さすれ	させ
	しむ	しめ	しめ	しむる	しむれ	しめ
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね	
	じ		じ	じ	じ	
	まじ	まじく	まじく	まじき	まじけれ	
	らむ			らむ	らめ	
	べし	べく	べく	べき	べけれ	
	らし			らし	らし	

推量	めり	(めり)	(めり)	(めれ)
	む		む	むめ
	まし		まし	ましか
	けむ	けむ	けむ	けめ
指定	なり	なら	なり	なれ
	たり	たり	たり	たれ
詠歎	なり	(なり)	(なる)	(なれ)
	けり	(けり)	(ける)	(けれ)
希望	たし	たく	たし	たき	たけれ
	まほし				
比況	ごとし	ごとく	ごとく	ごとき	
過去	き		き	し	しか
	(けり)	(けら)	けり	けり	ける	けれ
	つ	て	て	つ	つる	つれ	(て)

時	完了	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	(ね)
		たり	たら	たり	たり	たる	たれ	
		り	(ら)	(り	り	る	れ	
	未來	む			む	む	め	

【補】推量のべしは良行變格活用のありと結び附いて約められて　べかりとなることがある。この場合には左の如く活用する。

未然　べから　連用　べかり　終止　(べかり)　連體　(べかる)　已然　べかれ

五、口語助動詞の活用　口　助動詞の活用形も文語における場合と同じく大體三種に分れる。即ちその一は動詞と同じ様に活用するもの、その二は形容詞と同じ様に活用するもの、その三は動詞や形容詞とすこし異る活用をなすものと三種ある。今それらの活用表を左に掲げる。

意義上の種類		未然	連用	終止	連體	已然	命令
動	受身	れる	れ	れる	れる	れれ	れ
		られる	られ	られる	られる	られれ	られ

詞																			
活用的																			
可能		使役		尊敬				形容詞的活用			特殊の活用								
れる	られる	せる	せる	れる	られる	なさる	下さる	たい	らしい	推量	た	ん	だ	指定					
れ	られ	せ	させ	れ	られ	なさら	下さら	たく	らしく										
れ	られ	せ	させ	れ	られ	なさり	下さり	たく	らしく	なく	て		で						
れる	られる	せる	させる	れる	られる	なさる	下さる	たい	らしい	ない	た	ん	だ						
れる	られる	せる	させる	れる	られる	なさる	下さる	たい	らしい	ない	た	ん							
れれ	られれ	せれ	させれ	れれ	られれ	なされ	下され	たけれ		なけれ	たら	れ							
		せ	させ		られ	なさい	下さい												

六、助動詞の接續

1、動詞と助動詞との接續（文語）

第一表

（崇・能可・役使・身受・消打・敬比・況動助の詞動の接續）

動詞の活用	語根	未然形	終止形	連體形	連用形	終止形	連體形	動詞の活用	語根	未然形
良變	有	ら	り	る	り	り	る	佐變	爲	せ
奈變	死	な	に	ぬる	ぬ	に	ぬる	加變	來	こ
四段	書	か	き	く	く	く	くる	下二段	受	け
上一段	（着）	き	き	きる	きる	き	きる	上段	生	き
下一段	（蹴）	け	け	ける	ける	け	ける	下一段	（蹴）	け
上一段	（着）	き	き	きる	きる	き	きる	上一段	（着）	き
四段	書	か	き	く	く	く	くる	四段	書	か
奈變	死	な	に	ぬる	ぬ	に	ぬる	奈變	死	な
良變	有	ら	り	る	り	り	る	良變	有	ら
佐變	爲	せ	し	する	す	し	する	佐變	爲	せ
加變	來	こ	じ	こる	こる	じ	こる	加變	來	こ
下二段	受	け	ず	ける	ける	ず	ける	下二段	受	け
上段	生	き	し	きる	きる	し	きる	上段	生	き
下一段	（蹴）	け	む	ける	ける	む	ける	下一段	（蹴）	け
上一段	（着）	き	じ	きる	きる	じ	きる	上一段	（着）	き
四段	書	か	べし	くる	くる	べし	くる	四段	書	か
奈變	死	な	まじ	ぬる	ぬる	まじ	ぬる	奈變	死	な
良變	有	ら	めり・らむ	る	る	べし・まじ	る	良變	有	ら
良變	有	ら	べし・らし・なり（詠歎）	る	り	り	る	良變	有	ら

第二表（指定・詠歎・希望の助動詞との接續）

動詞の活用	語根	未然形	連用形	終止形	連體形
奈變	死	な	に	ぬ	ぬる
四段	書	か	き	く	く
上一段	（着）	き	き	きる	きる
下一段	（蹴）	け	け	ける	ける
上二段	生	き	き	く	くる
下二段	受	け	け	く	くる
加變	（來）	こ	き	く	くる
佐變	（爲）	せ	し	す	する

未然形に接續するもの：む　まし
連用形に接續するもの：けり　けむ　たし
終止形に接續するもの：めり　らむ　べし　らし　なり（詠歎）
連體形に接續するもの：なり（指定）

第三表（時の助動詞との接續）

動詞の活用	語根	未然形	連用形	已然形
加變	（來）	こ	き	くれ
佐變	（爲）	せ	し	すれ
奈變	死	な	に	ぬれ
良變	有	ら	り	れ
四段	書	か	き	け
上一段	（着）	き	き	きれ
下一段	（蹴）	け	け	けれ
上二段	生	き	き	くれ
下二段	受	け	け	くれ

未然形に接續するもの：り（佐變）　し　しか（加變・佐變）　む
連用形に接續するもの：き　し　しか　ぬ　つ　たり　けり
已然形に接續するもの：り（四段）

特例

第三表中過去の助動詞「き」が加行變格と佐行變格との動詞に接續するには、左の特例がある。

【加變】

來（こ）（未然形）　し　しか

來（き）（連用形）　し　しか

【佐變】

爲（せ）（未然形）　し　しか

爲（連用形）　き

2、助動詞と助動詞との接續（文語）

助動詞の種類	未然形	連用形	終止形	連體形
時	て	て	つ（らむ・めり・らし・べし）	つる
	な	に（たり）	ぬ（らむ・めり・らし・べし）	ぬる
	たら	たり（つ）	たり（べし・らむ・らし）	たる（べし・らむ・らし）
	（ら）（しず・むまし）	（り）（つ）	り	る
	（げら）	（けり）（けり・けむ）	けり	ける
		き	き	し（なり（指定）・ごとし）
推量	べく	（めり）（き・けり）	（めり）（らし）	（める）（らし）
			らむ	らむ
			けむ	けむ
			べし	べき（なり（指定）・ごとし）
受身・可能	れ（さす・しむ）	れ（つ）	る	るる
	られ	られ	られる	られる

助動詞の種類	未然形	連用形	終止形	連體形
使役	せ	せ（たり・けり・けむ・き・たし）	す（めり・らむ・べし・らし・まじ・なり（咏歎））	する（なり（指定）・ごとし）
	させ	させ	さす	さする
	しめ	しめ	しむ	しむる
打消	ず	ず	ず	ぬ
	まじく	まじく	まじ	まじき
指定	なら	なり	なり	なる
	たら	たり	たり	たる（なり（指定）・まじ）
	（む・しむ・まし・じ・ず）	（けり・き・けむ）	（らむ・めり・らし・べし・ごとし）	
比況	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき（なり（指定））
希望	たく	たく	たし	たき（なり（指定））
咏歎			なり	なる（らむ・らし・めり・ごとし）

【補】

一、指定のなりと比況のごとしとは、「心は善きなり」「水の清きごとし」の如く形容詞の連體形にも接續

する。

二、指定のなり・たりは「彼は陸軍大將たり」「貧しきものは幸福なり」の如く體言にも接續する。

三、比況のごとしは「山のごとし」「見るがごとし」の如く中に「の」「が」を挾んで體言にも連續する。

第五章　助　詞

一、**意義**　助詞とは語句を接續し、或はその關係を示し又は他の語に結びついて疑問・禁止・感歎・願望等いろ〳〵の意味を表すものをいふ。

二、**助詞の分類**　助詞を其の用法によりて三類に大別す

1、第一類　體言に結びついて主として語句の關係をあらはすもの、

(一)が・の(二)を(　)に(四)と(五)へ(六)より・(から)(七)まで。

2、第二類　用言に結びついて、主として語句を接續するもの。

(一)ば(二)と　とも　ど・ども(三)に・を・が(四)て(五)で(六)つつ

3、第三類　種々の語に結びついていろ〳〵の意味をあらはすもの。

(一)は(二)も　三)だに　すら(四)さへ(五)ぞ・なむ(六)こそ(七)し(八)のみ・ばかり。

4、第四類　文の終又は中について、疑問・感歎・禁止・願望などの意味をあらはすもの、

(一)や・か(二)よ(三)な・なぞ(四)はや・なむ・がな(五)や・な　は六かも・かな　かし。

三、**體言につく助詞**

1、が・の　主格又は領格を表す。

が　主格（主　語）を示す……鳥が鳴く
　　領格（修飾語）を示す……梅が枝・我が國

の　主格（主　語）を示す……秋風の吹く
　　領格（修飾語）を示す……櫻の花・君の家

注意　一、古くは沖つ風・天つ風・時つ風などの如く、つが領格を表した例もある。
　　二、體言が文の主語となる時は「主格」と云ひ、客語となる時は「客格」といひ、修飾語となる時は「領格」といふ。

2、を　動作の目的又は標準を示す。
　　を　客格（客語）を示す……書を讀む
　　動作の行はれ又は起る場所を示す……路を行く・故郷を去る

3、に　添加又は並列の意などを示す。
　　に　客格（客語）を示す……月影水に映る
　　添加する意を示す……鬼に金棒
　　並列する意を示す……月に花に君を思ふ

4、と　比喩或は並列の意などを示す。
　　と　客格（客語）を示す……水氷となる
　　「共に」の意を示す……友と語る
　　比喩の意を示す……露と消ゆ
　　並列する意を示す……夜と晝とを辨ぜず

5、へ　方向を指示す。
　　へ　客格（客語）を示す……父は東へ下る
　　方向を示す……後へ引け

6、より・（から）　動作の起點又は比較の標準を示す。
　　より（から）　客格（客語）を示す……父は英國より歸れり
　　動作の起點を示す……雲は谷間より起る
　　比較する標準を示す……山より高き親の恩

7、まで　至り及ぶ意を示す。
　　まで　客格（客語）を示す……彼は都まで行く
　　動作の終局を示す……飽くまで戰へ

四、用言に附く助詞

1、ば　條件を示すものであるが、その中動詞形容詞及び助動詞の未然形に結びつくものは假定、已然形に結びつくものは既定の意味をあらはす。

ば
- 假定の條件を示す……緣あらば逢はむ
- 確定の條件を示す……緣あれば逢ふ

2、と・とも・ど・ども　と・ともは動詞助動詞の終止形、形容詞の連用形に結びついて假定の條件をあらはし、ど・どもは動詞、形容詞及び助動詞の已然形に結びついて既定の條件をあらはす。

と・とも
- 假定の條件を示す
  - 繪に書くと(雖の意)筆も及ばじ
  - 繪に書くとも筆も及ばず

ど・ども
- 既定の條件を示す
  - 問へど答へず
  - 酌めども盡きず

3、に・を・が　は動詞形容詞及助動詞の連體形に結びついて反對又は意外の意をあらはす。

……目照るに雨降る

……雨降るを傘も持たず

……學びしが忘れたり

4、で　動詞形容詞及び助動詞の連用形に結びついて、事の次第を示す。

……筆を執りて字を書く

注意

一、にて
- 「に於て」の略　學校にて學ぶ
- 「に因りて」の略　筆にて書く
- 「にして」の略　前は海にて後は山

二、とて
- 「と云ひて」の略　泣けとて泣かしむ
- 「と思ひて」の略　買物せむとて來る

三、して
- 「ありて」の意　幼くして父に別る
- 「遣はして」の意　人をして言はしむ
- 「を用ひて」の意　小刀して竹を切る

5、で　動詞助動詞の未然形に結びついて打消の意をあらはす。「ずして」の略。

……雨降らで風吹く

6、つつ　動詞及び受身・使役の助動詞の連用形に結びつき、動作の連續する意をあらはす。

……景色を見つゝ行く

五、種々の語につくもの

1、は　分別する意をあらはす。

は……柳は緑・花は紅

注意　はは「身なば」「人なば」などいふ時は音便でばとなる。第二類のばと混同すべからず。

2、も　併合する意を示す。

も……壹も夜も休まず

3、だに・すら　一事を擧げて他を類推させる意をあらはす。

だに……手にだに取らず

すら……聖人すら猶かくのごとし

4、さへ　重きが上に更に添へ加へる意を示す。

さへ……鶯の音さへ變らず

5、ぞ・なむ　強く指示する意を示す。

ぞ……春ぞ過ぎぬる

なむ……これなむ玉なる

6、こそ　多くのものの中から、あるものを拔き出し、或は一層強く指示する意をあらはす。

こそ……好こそ物の上手なれ

7、し　語氣を強める意を示す。

し……今し散るらむ

8、のみ・ばかり　一ありて二無き意をあらはす。

のみ……われのみ知る

ばかり……只泣くばかりなり

六、文の終又は中に附くもの

1、や・か　二語ともに疑問の意を示す、文中にこの二語あるときは、その末を結ぶ動詞・形容詞・助動詞は連體形を用ひる。又一種の用法によりて疑問の意が反つて確定の意となることがある。これを反語といふ。

や　疑問の意を示す……志有りや
　　反語の意を示す……豈に料らむや

か　疑問の意を示す……利無きか
　　反語の意を示す……いかでか言はむ

2、よ　命令又は感歎の意を示す。

よ　命令の意を示す……朝とく起きよ
　　感歎の意を示す……可憐の弟よ

3、な・なそ　禁示の意を示す。

な……恩を忘るな

なそ……手な觸れそ

4、ばや・なむ・がな　願望の意を表す。

ばや……字を上手に書かばや

なむ……彼の手に討たれなむ

がな……訪ひ來む人もがな

5、や・な・は　感歎の意を示す。

や……あな面白の春の日や

な……望も破れけりな

は……すはや御自害あるは

6、かも・かな・かし　感歎の意を示す。

かも……出でし月かも

かな……あはれなるかな

かし……疾く行けかし

注意　かも・かな・かし・など感歎の意を示す助詞を感動詞として取扱ふ說もある。

第六章　副　詞

一、意義　副詞とは動詞・形容詞又は他の副詞について其の意味を限定する語である。

1、動詞を限定する例

風烈しく吹き波高く立つ

2、形容詞を限定する例

風頗る烈しく波甚だ高し

3、他の副詞を限定する例

風頗る烈しく吹き波甚だ高く立つ

二、副詞の分類　副詞をその形態上から大きく區別して本來の副詞と、轉來の副詞とに分つ。

1、本來の副詞　多くは他の品詞に轉ず。

【例】既に　聊か　未だ　など

2、轉來の副詞

イ、名詞から轉じたもの

今・昔・今朝・去年・一とせ　など

ロ、名詞に助詞を添へたもの